
涙の色

黒穂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涙の色

【Nコード】

N8883G

【作者名】

黒穂

【あらすじ】

世界は2つに分けられた。この世界に生まれた皇女美穂は心に深い傷を負った。朱雀や仲間たちに支えられながら、彼女は強く成長していく。人の気持やそれぞれの信じるものをめぐる物語

物語の始まり

私たちはこの世界を救った。

目を瞑れば、あの光景が頭を駆け巡る。

いい事をしたなんて、思っていない。

私たちのやり方に不満を持つ人たちがいるかも知れないから……。

これから見る貴方にこれだけは言いたい。

私たちの旅に貴方も不満や、不快な気持を抱くかもしれない。

でも、世界を救うほどの力があっても……

私たちは皆と同じ人間なんだって、忘れないで。

そろそろ私と私の大切な人たちの過去の世界を見て貰うんだけど、最後に名前だけ貴方に言いたい。

私の名前は 美穂。 私の一番大切な人がつけてくれた名前。

どうか私たちを最後まで見守って下さい。

一人の少年は目の前に横たわるある少女の手を握りしめていた。

少年は悲しげな目で少女を見つめていた。

助けてあげられなかった

彼の胸を締め付ける。こうなったのも自分のせいだ、俺がもっと早く駆けつけていたら！少年はただ自分を責めた。

「いッ…痛い…。」

少女の声がして、少年はハッと息を飲む。

「美穂…！」

よかったと胸をなで下ろした。

「ごめん、俺がもつと早く来てたら…この儀式、止められたかも知れないのに…。」

そして美穂と呼ばれた少女の肩にそつと手を置いた。

「…。あなた 誰…？」 美穂の言葉に少年は目を見開いた。

「えっ…朱雀だよ？美穂覚えてないのか？」朱雀は口の中が乾いていくのがわかった。

「しっ、知らない…。貴方なんて知らないわ…！」

朱雀はショックを受けたが、美穂が震えているねを見て混み上げる感情を押し殺した。

「…失礼しました。私は朱雀と言います。怖がらないで…下さい。」

美穂は朱雀を警戒の目で見ていた。

「貴女のこと、私が説明します。私と貴女の関係も。」

この世界には2種類の種族がいる。

魔法を使える魔族と、魔法は使えないが、高い知能を授かったヒューマ族。

2つの種族に争いは絶えなかった。

そしてついに、魔族は魔法で、ヒューマ族は技術で 世界を2つに分けてしまったのだった。

それから数十年たったある日、魔族の王国アクア国で姫が生まれた。

美穂の後の姉、クロサス・S・アクアだ

それから一年後、もう一人姫が生まれた。

マリン・M・アクアこれが美穂だ。

この時朱雀は2歳だったはずなのだ。

美穂が首をかしげた。「はず？」

朱雀は顔色を一切変えずに「10歳からの記憶しかないから、気がついたらベットのの上ですつと父さんに介護してもらってたみたい。」

「怖く、なかつた？」美穂のその言葉に朱雀は首を横に振った。

「怖いって気持より不安で、いつ捨てられるか毎日考えてた。」
そして笑いかけた。

「だから貴女の気持が私には分かります。貴女を助きたい、この気持は本当です。」

また美穂は首をかしげる。

「どうして敬語使うの？」美穂は朱雀が自分に敬語を使ったりすることがわからなかつた。「癖で、友達のときの話し方と立場上の話し方が混じるときがある。」

美穂は王国の姫、朱雀は王国の騎士団体のうちにすぎない。

だからこうなるのも無理はなかつた。

「敬語、やめて…。」美穂は心地悪そうに言った。

朱雀は何も言わずただうなずいた。

昔同じような事を美穂に言われたことがあつたからだった。

美穂は体を起こそうとしたが、激痛が全身に走った。

「痛…！」

「動いたら駄目だ。」朱雀は美穂を寝かし、また手を握る。

「何で体痛いのか？」「何も気にせず、今は休んでろ。大丈夫、俺が美穂を守るから…。」

そう言っているうちに美穂はだんだん夢へと引きこまれていく。

「朱雀…ここに、ずっと一緒に…居てくれる？」

「うん、美穂のことずっと見てるよ。」

そう言つと、安心したかの様に美穂は眠った。

朱雀は美穂の腕を見た。腕にはうっすら紋章が刻んであつた。
儀式の跡だ。

美穂は体全身が痛そうだった。

この跡は腕だけにとどまっていらないだろう。

たぶんこの城には自分以外美穂の味方はいないだろう。

朱雀はそう思う。

美穂の父 国王様、そして母 王女様が亡くなったとたんに、この城大臣たちは手のひらを反したように態度が豹変したのだ。

美穂から王の座を取ろうとした。

そしてその頃から宗教が過剰になり、美穂を儀式に使う結果になった。

正直城の奴らは狂っている。

朱雀はそう思っている。

「だから俺が美穂を守るんだ。」

朱雀はそう呟き、窓の外を見た。

蒼い鳥が空に向かって泣いていた…

まるで朱雀たちの巡る運命を予知しているかのように

物語の始まり（後書き）

初投稿でちょっと緊張。頑張って自分の伝えたいことを書きます。

儀式は続く

ひたひたと歩く音が聞こえる。

美穂は真つ暗な場所で足音に追われていた。助けて、と叫んでも誰もいない。

独りだ。

ふと後ろを振り向いた。

そこには美穂に伸びる無数の手。

「やめてー!!」

「美穂！大丈夫だ、美穂！」

声がして、目を開けた。

「朱雀……？」

美穂は悪夢から解放された。

「大丈夫か？」

そこに朱雀がいた。

ずっと美穂の傍にいたのだ。

「頭の中がごちゃごちゃしてる。」

美穂の記憶は全て失ったわけではないらしい。記憶を失うきっかけはやはりあの儀式のせいだった。

脳にも損傷を受けた場所があるらしく、一部の記憶は失った。

幸いにも、物の名前や言葉は覚えていた。

「体、動かせる？」

朱雀がそう言うと美穂は体を起こした。

「美穂に会いたかったって言うてる人がいるんだ。」

入っつていい、という朱雀の合図と同じに、髪の毛の長い女が駆けしてきた。

「美穂……！心配したんだよ……！」

そして美穂に抱きついた。

「あれ、あの……！苦しい……！」

美穂の声を聞き、朱雀は女を美穂から引き離した。

「こら、日向！部屋から追い出さずぞ！」

「やだあゝいいじゃん別に、感動の再会なのに」

日向はふん、と鼻をならした。

美穂は日向の容姿に驚いた。

日向には獣の耳があつたのだ。

そしてこつちの世界では珍しい着物を羽織っていた。

着物はヒューマ族が昔着ていたとされているが、世界が2つに分けられた時からは見なくなつた服だ。

日向は美穂に近づき、美穂の短い髪をなでた。

「どうしたの、美穂？まさか朱雀が言つてたことって…」

朱雀はムツとして言つた。

「本当です！信じてなかつたんか?!」

日向はうんとうなずいた。

「あゝ。」

美穂はどうしたらいいのか戸惑つた。

「改めて紹介するね、私は日向。妖狐だよ。よろしくね！」

「よろしくお願ひします。猫耳じゃなかつたんですね。」

美穂は初めて笑つた。話をする美穂と日向を朱雀は後ろから見ていた。

やはり女同士の方が話しやすいのか、美穂の初笑顔は日向に取られてしまった。少し悔しい気もするが、二人を見ているとなんだか微笑ましい。

コンコン

ドアをノックする音。そして誰が部屋の中に入って来た。

「…何しに来た。」朱雀はその人物を見たときに顔色が変わつた。

「体の具合はどうですか？皇女様。」

アクア国の紋章が刻まれた服を身にまとつた中年の男が笑いながら

入って来た。

「どうですか、だと？お前がやったことだろ！」

朱雀は怒鳴った。

「そうよ、クソジジイ！」

日向もそれに続いた。「黙れ、朱雀！そしてお前もだ、この女狐！
どうあがいたって私の方が地位が上だ、これ以上言えば身内がどう
なるかわからんぞ！」男の言葉に朱雀は反論しようとしたが、父親
の顔が浮かんで引き下がった。

卑怯者と呟いて。

朱雀はただの騎士団体のうちの一人。

そして男は大臣。

格の差は目に見えていた。

「さて、下種共が静かになった所で本題に入ろう。皇女様のお体をお借りして行なった儀式ですが、これはほんの序盤なのです。」

「何?!」

朱雀は声を荒げた。

「儀式はここからが本番、この世界に7つある我らの信仰神クリスタル・ブイオの神殿に行つて、儀式を続けてもらう。」

これには朱雀と日向は黙つてられなかった。「ちよつと待ってくれ！こんな儀式、もう二度とさせる気はない！」

「あなた美穂を何だと思つてんの?!」

美穂は部屋の隅で小さくなっていた。

「したくなければいいですよ？ただし、儀式を一度受けたらもう逃げられません。」

大臣は微かに笑った。「どういう意味？」

日向が不満そうに言った。

「一度目の儀式から七度目の儀式を終えるまで、皇女様の体は徐々に衰弱していきます。」

つまり儀式を放棄すれば美穂は死ぬということだ。

朱雀も日向も言葉が出てこない。

「考えておいて下さい。」
そして大臣は出て行った。

こんなの儀式でも何でも無い、呪いだ と朱雀が確信した。
大臣たちは何か企んでいる。
何かとんでもない計画を企てている。
でもやらなければ美穂は死んでしまう。

残酷な現実だけが朱雀に押し寄せる。

この時の朱雀に考える余裕などなかった。

朱雀はただ、美穂を失いたくない一心だった。

儀式は続く（後書き）

二話です。

上手く書けているか分かりませんが、よろしく願います。

イバラの道へ

紺青の髪が風に揺れる。

ブンツという音とともに剣が振り下ろされる。「朱雀、何苛立ってるんだ？」

朱雀の友ノア・ノルオークはひたすら剣術の稽古をする彼に話しかけた。

「何でもない。」

「ないわけないよな。お前のことだ、一人で抱えこんでるんだろ？」

朱雀は無言だった。

「やめちまえば？」

「えっ？」

朱雀はノアをみた。

「だから、やめちまえって言ったんだ。何であの女にこだわる？お前がそんなに苦しいんならほっとけよ。」

そう言った瞬間、ノアの胸元は朱雀に掴まれていた。

「朱雀……？」

「もう二度とそんなこと言つな。」

そう言つて手を放した。

「本気……なんだな。」

「ああ。」

朱雀の言葉にノアの顔が明るくなった。

「そう言つと思つたぜ。」

「試したのか？」

朱雀は怒った口振りで言った。

「まあ、ね。俺は信じてたぜ？お前は人を見捨てるような奴じゃないって。」

ノアがその先を言おうとしたとき、物陰から誰か出て来た。

「私が頼んだの。」

現れたのは美穂。

「何でこんなことを？」

朱雀は言った。

「朱雀たちがあの男の人と話していた内容、わからなかったけど私の問題でしょ？だから私のせいで朱雀が悩んでると思って。」

美穂はうつ向いた。

「それで、俺が真っ青な顔してるこの子見つけて、一肌脱いだって訳。」

ノアが美穂の代わりに言った。

「美穂…。俺は君に苛立っているわけじゃないんだ。あの大臣、ジエドルドに怒っているんだ。」

美穂は首を横に振った。

「うっん、それでも旅は危険だから私一人で行く。朱雀を巻き込みたくないし。」

朱雀は美穂に近づき微笑んだ。

「美穂は俺のために言ってくれていることは良くわかった。でも、連れて行ってくれ。」

美穂は後退りした。

「なんで？どうして他人の私にそこまで…？」

朱雀は美穂を引き寄せ、耳元で何か呟いた。

美穂は驚いて声も出ない。

そして朱雀は少し照れながら言った。

「俺も一緒に行きます。」

「はい…。」

美穂は戸惑いながらそう言うしかなかった。

「さてと、用事は済んだみたいだな。城は俺が監視しておくから、安心して行ってこい。」

「ありがとう。」

朱雀は安心した、この男なら信用できる。

かれこれ8年の付き合いだ。

「で、ジエドルドの奴なにか企んでいるようだし、ほんとにすんのか？儀式。」

ノアの言葉に朱雀は顔をしかめた。

「そのことなんだが、神殿に行く道中に呪いを解く方法を探して見つけられなかったら、仕方ないけどするしかない。」

賭けに近かった。

「美穂、儀式痛いかもしれないけど…呪いを解く方法が見つかるまで我慢できるか？」

心配そうに美穂に聞いた。

「うん。辛いかもしれないけど…私、頑張るから。」

美穂の目から涙が零れ落ちる。

朱雀はそつと抱きしめた。

きつと不安に違いない、だってまだ16歳の女の子だ。

美穂は好きで皇女になったわけではないし、記憶喪失になったわけでもない。

自分勝手な大人たちが美穂を追いつめ、傷つけたのだ。

美穂は声を出して泣いた。

今までの不安が一気に出てきたかのように。

朱雀は美穂が泣き止むまで抱きしめていた。

これが朱雀が見た最初の涙の色だったのかもしれない。

次の日の早朝、朱雀と美穂は出発することにした。

なるべく早く出発した方がいい。

今も刻一刻と美穂の体は弱って来ているのだ。

それにしても皇女が旅に出るというのに城の者は見送りにも来ない。

まあ来られてもうれしくはないのだが。

見送りには朱雀の父とノアが来てくれていた。

「しつかり美穂ちゃんを守るんだよ。」
父親はあまり言葉を発しなかったが、朱雀には父の言いたいことがわかる。

時間がかかってもいい、元気に帰って来い。父の顔にはそう書いてあった。

ノアも心配なようだ。

朱雀は日向がいないことに少し寂しさを感じていた。
なぜ来ないのだろうと思ったが、日向には日向の事情があるのだ。
朱雀はそれ以上考えるのをやめた。

そして時間がきた。

朱雀が町のから出ようとしたその時、叫ぶ声がした。

「まっつて〜！」

日向が駆けて来たのだ。

ハアハアと言って朱雀の顔を見る。

「ずいぶん遅いお見送りだな。」

朱雀は笑った。

「違う！私も一緒に行くから！」

朱雀は何言ってるんだと日向を見た。

「だって朱雀と美穂だけだったら、朱雀が変なことするかもでしょ。」

日向はほくそ笑む。

「するかー！そんなこと！」

朱雀は全力で否定した。

黙ってしまったら、日向の思いつぼだ。

「お願い！朱雀と一緒に旅をすれば、私の故郷が見つかるかもしれないし！」

日向は今度は真面目に言った。

「まあ、いいだろう。ただし！大人しくしてろよ？」

朱雀は日向の気迫に負けてやった。

こうして朱雀は旅に出ることになった。

朱雀は呪いを解く方法を探しに。

美穂は命を繋ぐために。

そして日向は故郷を探すために。

それぞれの理由、目的のために今彼らは歩き出した。

このイバラの道を。

イバラの道へ（後書き）

読んでくれている皆様、ありがとうございます！
朱雀たちの微妙な心を文字にするのは難しいです。
わかりにくい所があったり、質問があれば感想として送って下され
ばお答えしますので。いつでもどうぞ。

旅の始まり

アクア国内を離れるのはここにいる全員、初めてのことだった。野生の魔物も初めて見る。

「野生の魔物かあゝなんか怖そ〜」

日向がそう言つて体が震えるふりをした。

「こつちから何もしなきゃ向こうも何もしてこないだろ。」
朱雀は言つた。

「美穂は怖くない？」

日向の問いかけに美穂は笑みを見せた。

「うっん、私何だか楽しい。記憶ないけど、この風景とかは初めて見る気がする。」

それはそうだ、と朱雀は思った。

美穂はほとんど城の中で過ごしていたのだから。

そう思うと、忌々しい呪いのおかげで外に出れたわけだから、何とも皮肉である。

最初の神殿までいくつか町を通る。

その町の一つに今たどり着いた。

王都アクアの隣に当たる町、クレライトだ。王都に近いだけあって、大きな町だ。

入るには門番に証明を見せなくてはならない。

「止まれ。順番に目を見せる。」
門番が言う。

こつちの世界では魔術で目の中に証明書を埋め込んでいる。偽装防止だ。

日向から目を見せた。「狐か……」

門番は嫌な顔をしたけれど、日向はその反応に慣れていると言つた様子だ。

次に朱雀の目だ。

朱雀は気が進まなかった。

「何だ？お前。証明が無いだと？」

門番の言う通り、朱雀にはそれがなかった。

朱雀の体が魔術を受け付けなかったのだ。

そして朱雀自身、こつちの世界では誰でも使えるはずの魔法が一切使えなかった。

「お前、反逆者か！？」

門番たちが騒ぎ出した。

「俺はアクア国の騎士、第15隊隊員。朱雀です！」

必死に訴えても、門番たちは耳を貸さない。

「あつあの…！その人は、私の護衛の方です。ぶつ無礼はゆるしませんよ?!」

美穂がおどおどしながら叫んだ。

門番は直ぐ様美穂の目を覗き込んだ。

澄んだハニーブラウンの瞳に浮かび上がったのはアクア国王位継承者の証。

門番の顔色がどんどん悪くなっていった。

「こつこれは、申し訳御座いませんでした！」

そして門を開けた。

朱雀は門をくぐった後美穂にお礼を言った。

「ありがとう。」

美穂は朱雀を見たが、直ぐに目をそらしてしまった。

朱雀が呟いた言葉を思い出してまともに顔が見れなくなっていた。

「さっすが美穂。よく言えたね。」

日向に誉められてよりいつそう顔が赤くなる。

「怖かったけど、私皇女みたいだからちよつとでもみんなを助けられたらいいなって。」

美穂は笑ってそう言った。

こうして見ると普通の女の子なのに…。
朱雀は何だか複雑な気持になった。

「遅くならないうちに宿を探さなくちゃな…日向、美穂を連れて探しておいてくれるか？」

「朱雀はどこ行くのよぉ〜」

日向は不満げに言った。

「図書館か、博物館とか行ってみる。呪いの解き方の古文書があるかもしれないし。」

そう言うと朱雀は行ってしまった。

宿はなんとか見つかり、美穂と日向は話をした。

「ねえ〜美穂。朱雀と何かあった？」

ニヤニヤと笑いながら尋ねる日向に美穂は吹きだした。

「べつ別に、何にもないけど…？」

明らかにおかしい美穂を日向はしつこく問い質した。

「だから、ね。私朱雀に、ね。好きだから、守りたいからついて行くって。言われちゃった…。」

待ってました！とばかりに日向は目を輝かせた。

「それで、美穂の気持ちは？」

「まだわかんないよ…好きとか嫌いとかわかんない。」

だよねえ〜と何だかつまらなそうに日向は肩を下ろした。

「記憶が無くなる前は朱雀のことあんなに好きだったのにねえ〜」

日向の何気ない言葉に美穂は思った。

（私は皆が知ってる美穂じゃない…。皆が求めているのはきっと昔の私なんだ…。）

夜遅くになって、朱雀がやっと宿にやって来た。

部屋が一つしか取れなかったので、朱雀も一緒の部屋だ。

美穂と日向に今日の話をする。

情報が何もなかったこと、そして町に流れていた噂のこと。

「噂あ？」

日向が何の？と言うように顔をしかめた。

「ヒューマ族がしびれを切らして、とうとう兵器を造りだしたって

噂。」

ありそうな話だよな。そう朱雀が言った。

ヒューマ族と魔物が壁を作った時、一部のヒューマ族がこちらに閉じ込められた。という事態になった。

ヒューマ族はそれを拉致だと言って身柄をわたせとかなり苛立っていたのだ。

魔物もわざとやったわけではないのだが…。

魔物が怒って身柄を渡さなかったのも悪い。

何十年も前の話だから、こっちに閉じ込められたヒューマ族はもう居るはずもなく、いつか世界的な戦争になることは目に見えていた。まさに冷静状態なのだ。

「世界戦争…か。」

部屋の空気が一気に重くなった。

美穂だけが、何もわからない。

美穂の不安は積もる一方だった。

そんな1日が終わり、皆眠りについた。
しかし、はぁー はぁー という何かの音により朱雀はたたき起こされた。

じつくり聞いて見ると音、ではない。
声、だ。

朱雀はゆっくりと声に近づいて行く。

「あー！助けてー！」

そこには絶叫する美穂の姿があった。

「美穂：？どうした、しつかりしろ！」

朱雀が美穂の肩を激しく揺らした。

美穂は目を開けたが、様子が変わった。

そのまますくつと立ち上がり、体を震わせた。歯もガタガタと鳴り、目の前の朱雀にも気が付いていない。

朱雀は何度も彼女の名前を呼んだ。

だが美穂に声は届かない。

「イヤー！！！」

かん高い声を発した後、美穂は部屋を飛び出してしまったのだ！

朱雀は美穂を追いかけた。

何が何だかわからなかったが、朱雀は必死に追いかける。

美穂と朱雀は暗い街並みに消えていった。

旅の始まり（後書き）

黒穂です！少しづつですが、毎日更新できてます。
旅が始まり、会話が多くなったりで更新が遅くなるなもしれませんが、これからもよろしくお願いします。

心の傷と思い

これほど必死に走ったことがあっただろうか？

朱雀は息を切らしながら、宿から飛び出した美穂の後を追っていた。

朱雀は手を伸ばし、やっとの事で美穂の腕を掴んだ。

「放して！放してよー！！」

美穂は抵抗する。

朱雀に、ではなく、美穂が見ている人物に。

「俺だ！朱雀だ！」

朱雀は殴られたが、痛いとは感じなかった。

必死に美穂を止める。

「美穂！！」

朱雀が思いきり彼女の名前を呼んだ。

「す…ざ…く？」

美穂は朱雀を見ていた。

「帰ろう？」

朱雀は優しく微笑みながら言った。

引つかかれたところから血が出ていたが、そんなことどうだってよかった。

美穂が帰って来てくれればそれでいい。

「朱雀…。」

美穂はそう言っただけで倒れてしまった。

朱雀は抱き抱え、宿へ戻った。

戻ると日向は何事かと驚いていた。

「美穂どうかしたの？！」

「わからない…。」

朱雀はそう答えるしかなかった。

「日向、朝が来たら美穂を医者に見せようと思う。
日向はそうした方がいい、とうなずいた。

まだ夜だったが、二人とも眠る気にならなかった。

朱雀はずっと美穂を見ていてやりたかった。

苦しそうな表情を浮かべる美穂。

きつと今も悪夢と戦っているはずだから。

とうとう朱雀が一睡もしないうちに、朝が来てしまった。

朱雀は美穂を医者に見せに行った。

美穂は朱雀の傷を見てどうしたの？と聞いたが、朱雀は何でもないと
言うだけだった。

医者に見てもらった。

すると朱雀だけ別の部屋に呼び出された。

「座りなさい。」

先生が怖い顔をしている。

「何かわかったのですか？」

「君はあの子の知り合いかね？」

「はい…。」

「精神的な病ですな。あの子に何かあったんですか？」

朱雀は答えることができなかった。

「薬を出しますが、直ぐには治らないでしょう。しばらくのあいだ
夜はベットに縛りつけてください。」

縛りつける？

朱雀は嫌な顔をした。

「仕方ないでしょうあの子が心に受けた傷は深い。治るのに時間がかかるでしょう、それまであなたは一睡もしないつもりですか？」
わかりましたよ、そう言っただけで朱雀はうつ向いた。

宿に戻った。美穂は日向に連れられて買い物に行っていた。

朱雀は自分を責めた。あの時早く気が付いて、美穂を助けに行っていたら…

朱雀は目を瞑った。

美穂が大臣たちに追いつめられているとき、朱雀は騎士団にいた。

ジートという名の騎士が、騎士団の隊員や兵士、メイドを殺害して逃亡したのだ。

殺された者に共通しているのが、クリスタル・バイオを信仰していない者たちだ。

朱雀は彼を追っていた。

ジートがこんなことをするなんて信じられなかった。

走っていると、見覚えのある後ろ姿がそこにあった。

ジートだ！

朱雀は彼の名前を呼んだ。

どうか嘘であってくれと願いながら。

振り返ったジートを見て朱雀は息を飲んだ。

ジートの顔や服は、血で赤くそまっていた。

そして彼は笑みを浮かべていた。
不気味なその眼差しは朱雀を見つめて、次に城を見つめた。
そして呟いた。

「もうすぐ儀式は終わる。」
儀式…？

朱雀はハツとしてジートを置いて城に戻った。
戻ってみると儀式は終わっていた。

あの時、ジートではなく美穂の所に行くべきだった。

朱雀は頭を抱えた。

美穂の精神病も自分のせいなのだ。
謝って済むことではない。

「憎んでるかな、美穂は俺のこと。」

そう呟いたとき、声が出た。

「憎んでなんかないよ？」

心配そうな顔の美穂がいた。

「戻ったのか、日向は？」

「行く所があるって言ってた。」

そうか、と朱雀はうなずいた。

「朱雀のこと、日向さんから聞いた。朱雀、友達の所に行ってたんだよね。」

「ああ、そのせいで美穂がこんな目に。」

美穂は笑っていた。

「朱雀のせいじゃないよ。」

「でも、精神病になったのは俺が守れなかったから…」
美穂は首を横に振った。

そして、美穂は思いがけないことを口にした。

「私は皆に必要とされてる？」

「当たり前だ！」

朱雀は必死に言った。その言葉を聞いて、美穂の心の中にあつた不安が一気になくなった。

ずっと皆に必要とされてないのではないか、と思っていたから、朱雀の言葉は嬉しかった。

「美穂、もし一人だと感じて俺が味方だから。」

朱雀はそう言って図書館から借りてきた本を読み始めた。

赤くなった顔を隠すために。

「うん、ありがとう。直ぐには治らないかもしれないけど、私頑張るね。」

そう言って美穂は朱雀に笑いかけたが、朱雀は本で顔を隠したままだ。

「ごつめ〜ん！遅くなった〜、て何？この空気。」

日向は美穂と朱雀の間に流れている何とも言えない空気に気が付いた。

「もしかして、今いい感じだった？ごめんね。」

からかう日向に朱雀は怒った。

「お前はどこまでも能天気だなあ！」

「なによ！凶星でしょ！」

またいつものケンカが始まった。

美穂は笑いながらその光景を見ていた。こんな時間がいつまでも続いたらいいと美穂は心の底から思った。

「ともかく、明日この町を出よう。ここに手がかりはなさそうだ。」

「次はどんな街が楽しみ〜。」

ピクニックかよ、朱雀は呆れたが、日向はこんな奴だと自分に言い聞かせた。

荷物をまとめ終わったとき、もう夜だった。

日向が美穂と一緒に寝ると言ってくれたので、朱雀は安心して眠る事ができた。

日向も無神経なことを言わなければ、優しい女の子だ。

朝早く朱雀たちは街を出て次の街を目指した。

美穂の体は少しづつだが確かに弱っていた。

道中貧血になって、何度もしゃがみこんでしまっていた。

街につくと朱雀は情報を収集に行った。

朱雀は焦っていた、クリスタル・ブイオの信仰者は沢山いたが、どの人も儀式のことを知らなかった。

どの町でも何の情報も無い。

何も掴めないまま時間だけが過ぎていった。

そしてついに最初の神殿にたどり着いてしまったのだ。

心の傷と思い（後書き）

黒穂です。五話、やっと書けました。

朱雀たちの微妙な心を書くのが難しいです。

皆さんが私の小説を読んで、少しでも楽しんでいただければ私も幸せです。

神殿

神殿の中は意外に明るかった。

朱雀、美穂、日向の順に奥へと進んでいく。

おびただしい数の石像。

しかも、一体一体の顔や服、髪型が全て異なっていた。

気味が悪い。

ここにいれば誰もが思うだろう。

大げさに言うと神殿にいるだけで、精神が壊れそうになる。

そんな感じがした。

美穂や朱雀はアクア国の人間だが、クリスタル・バイオを信仰する

気はなかった。

バイオは無幻を司る神。

つまり、何も考えずにただ無の世界で生きよう。そんな儒教だ。

確かにその考えでいくと、苦しみや悲しみが無くなり、心が気づく

ことはない。

しかし、楽しいと思ったり愛しいと思ったり、人が持っている美し

い心まで無くなってしまふのだ。

朱雀は思う。

苦しい、悲しい、辛いと感じるからこそ、人は強くなれる。

人が心を無くし、涙を流さなくなったら、そんな人ではない。

ただ時間に流される、操り人形だ。

だからバイオの神殿に行くのも、正直嫌だった。

「何か気持ち悪い所よね」

日向があちこちにある人骨を見て言う。

「日向、帰ってもいいぞ。」

朱雀の言葉に日向は、バカにしないでと怒った。

そんな会話を朱雀がしていても、美穂は一言も話さなかった。

険しい顔をしている。

怖くないわけないよな、朱雀は思った。
そしてなるべく、美穂に笑いかけるようにした。

しばらく歩くと広い空間に出た。

そこには今までの石像より立派で大きい石像があった。
髪が長い男を表していた。

「これがブイオか…。」

朱雀は何故か嫌な感じがしていた。
体がブイオは敵だ！と知らせている。

「男性、だっただね。」

美穂も女神のような姿を想像していたに違いない。

朱雀たちがブイオを前にして動けなくなっていると、地響きがした。
ゴゴゴ…という激しい音が響き渡った後、何か上から飛び降りてきた。

「なんだ?!」

朱雀たちの目の前に現れたのは 魔物だった。

「我、ブイオ神にお仕えするものなり。手合わせ願おう。」
そう言つて朱雀たちに飛びかかってきた。

魔物は四足歩行で背中に翼があった。

鋭い牙が口からはみ出ている。

「やるしかないのか…。」

そう言つて朱雀は剣を抜いた。

「遠距離は私と美穂に任せて!」

日向はそう言つと火の玉を作り、魔物に投げつける。

それを魔物はスルリとかわしたが、日向は当てることが目的ではなかった。

相手を錯乱させ、隙をつくらせ、朱雀の攻撃が急所に当たりやすくするためのものだった。

朱雀はそれを見逃さず、一撃魔物の懐に入れた。鈍い音が響いた。

石を叩いたみたいだな手応えに、朱雀はしまったと顔をしかめた。弾かれて、朱雀の腕が上にかかる。

その瞬間、魔物は無防備になった朱雀の腹に尻尾を叩きつけた。

朱雀は壁に激突し、咳き込んだ。

「朱雀！」

日向が叫んだ。

「大丈夫だ。日向、あいつはガーゴイルだ！」

石の魔物。

物理攻撃はあいつには効かない。

朱雀の攻撃は無意味に等しい。

「私と美穂で何とかするしかないか。」

日向は美穂に合図した。

美穂は日向の前に出る。

日向が詠唱を唱え終わるまで、美穂の魔法でカバーするのだ。

「いくわよ！」

そう言っただけ日向は詠唱を唱え始めた。

魔物は日向に突進してくる。

美穂は手を前にだして、グツと力を入れた。

その瞬間、美穂の前に透明な壁ができた。

ドスンッと凄い音をたてて壁に魔物がぶつかった。

壁は壊れない。

凄い強度だ。

「ブイオ様と同じ力か…。お主がアクアの血筋だな？」

魔物はそう言った。

美穂やアクアの血筋がある人は、結晶を自在に操ることができる。

ブイオの名前にクリスタルが付いているのも、ブイオがその能力を使うことができたからである。

と、いうことは…ブイオはアクア族ではないだろうか？
太古の昔、ブイオはアクアの国王だったのではないか？

ブイオの考え（世界の無幻化）に賛同した人々がブイオを神として
たたえた。

クリスタル・ブイオは人々が思い描いて作った神、ではなく、本当
に実在していた人だということになる。

「ブイオの子孫が…美穂なのか…？」

朱雀は腹を押さえながら言った。

魔物は何も言わなかったが多分そうだろう。

日向のまわりに光が集まりだした。

まずいと思ったのか、魔物攻撃は激しくなる。

「日向…。もう、限界…！」

美穂は苦しそうだ。

「美穂！もういいわ、結晶を壊して！」

美穂は手から力を抜いた。

すると、あれだけ頑丈だった結晶が崩れ落ちた。

その瞬間、魔物が水にのまれた。

うめき声を上げて、倒れこんだ。

魔物の堅い皮膚が溶けている。

日向は酸の水を浴びせたのだ。

しばらくすると魔物は立ち上がり、何処かへ消えてしまった。 力試

しは終わりということだろうか。

朱雀は立ち上がったって攻撃を受けた所を触ってみる。

…？ 痛くない。

痛みは感じない、回復してくれたのだろうか？

すると祭壇のまわりの口ウソクに火がついた。

いよいよ一度目の儀式が始まるのだ。

美穂は黙って祭壇に横たわった。

微かに震えている。

朱雀は見守るしかない。

祭壇に横たわるとブイオの石像の目が光った。
そのとき、美穂の体が宙に浮いた。
そして光が美穂を包み激しく光る。

（我の愛しい子孫よ、時は満ちた。旅を続け、我にその身体を与えよ。）

美穂はこの声を聞いた。

男の声、ブイオだろうか？

美穂はそう思った。

宙に浮いた体が、元の場所に戻っていく。

美穂が再び祭壇に下ろされたとき、体に異変が起こった。

体が熱い！

疼くのを通り越して焼け焦げるみたいに熱い。

すると腕から激痛が走った。

筋肉、そして皮を突き破り、なんと結晶が出てきたのだ！

腕からだけではない、足や背中、頭まで鋭い結晶が突き出してくる。

美穂はのたうち回った。

鋭いものが体の中から筋肉や皮膚を突き破り出てくる痛みが、想像できるだろうか？

朱雀は体が震えていた。

こんなことになるなんて、誰が想像しただろうか？

美穂の症状が治まり、朱雀は駆け寄った。

「大丈夫か?!」

朱雀はそう言つて美穂を抱き寄せる。

「大丈夫。」

そう言つた美穂の顔を見た朱雀は、違和感を覚えた。
美穂の目が一瞬あのジートの目のようになった。

気がしたのだ…。

美穂の体は出血が酷く、一刻も早く医者処置が必要だった。

「日向、どうにかできないのか?!」

朱雀はつい怒鳴ってしまった。

「私は回復呪文はできないの、知ってるでしょ?!」

日向も怒鳴り返した。こんなケンカをしたいわけではないのに、焦り、戸惑い、相手に当たってしまう。静まり返ったそのとき、声が出た。

「何してるの?!」

女性だ。

「あの、助けて下さい!!」

朱雀は叫んだ。

「…? 祭壇荒らしじゃなさそうね。待ってて、今処置するわ!」
そう言って女性は、朱雀たちに手を差し伸べてくれたのだった。

神殿（後書き）

こんにちは、黒穂です。

もう六話なんですネ。

何十話とか続いたらいいなあ〜と思ってます。

それでは、次の後書きでお会いしましょう。

アヤカ（前書き）

少しでも暴力的な表現を用いています。

人の死などを嫌う方は不快な気持ちになるかもしれません。

ご了承ください。

アヤカ

その女性は美穂の傷口にそつと触れた。
すると傷口がふさがった。

「治癒術か…。」

朱雀はそう呟いて、不思議そうにその光景を見る。

「見るの初めて？」

女性はクスツと笑った。

「初めてというか、俺は魔法が使えないから…いつ見ても不思議だ
なつて。」

すると女性は目を丸くして聞いた。

「あなた、ヒューマ族？」

朱雀は首をかしげた。

実際朱雀にもわからないのだ。

「そう…。あつ、自己紹介まだだったわね。

私の名はアヤカ、考古学者よ。」

アヤカは言った。

「俺は朱雀、あつちで機嫌が悪そうにしてるのが日向で、今寝てる
のが美穂です。」

アヤカは不思議そうに言った。

「美穂つて…この子マリン皇女でしょ？」

「俺が美穂つてつけたんです。マリンつて名前、嫌いだって言うも
んだから。」

ふう〜んと言ってアヤカは再び美穂に手を添えた。

「アヤカさんは何故この神殿に？」

朱雀は聞いた。

「私、ここに勝手に入っては荒らし回る変な男が来るって聞いたか
ら…私歴史好きだし、神殿とか昔の建造物とか荒らされるのが嫌な
の。」

荒らし回る男？

朱雀は無意識に口を開いていた。

「その人変態なんですって、各地のバイオ神の神殿に行つては、自虐行為を繰り返すみたいよ。」

朱雀はアヤカの話聞いてゾツとした。

何でも、自分から皮膚が疼いてくるような毒物を食べたり、ナイフで身体中を刺したりなど…朱雀たちには考えられないようなことをしている奴がこの世にはいるのだ。

「変な人がいるんですね…。」

朱雀は気持ち悪くなりながら言った。

「よし、これで美穂様は大丈夫よ。」

アヤカは額の汗をぬぐった。

「あの、どうして美穂はこんなことに…？」

「儀式の時、美穂様の体に光るものが入ったんでしょ？」

「はい…。」

「それは多分バイオの力の一部、力の制御ができなくて、力が暴走したんだと思う。」

ジエドルドはこうなることも知っていたのだろうか？

もし知っていたならば、なんて奴だ！

人としての感情はないのか？！

朱雀は腸が煮えくり返りそうになったが、平常心を保った。

きつとジエドルドはバイオの教えに洗脳されたのだろう。

ジートも、そうなのだろうか？

朱雀は首を激しく横に振った。

ジートはもう敵なんだ。

朱雀は自分に言い聞かせた。

「さてと、私はもう行くわ。」

アヤカが寂しそうに言った。

「アヤカさん色々ありがとございました。」

ううん、とアヤカは首を横に振った。

「あなたたち、次行く町は？」

朱雀は困ったように言った。

「決まってるんです。」

「アーリアに行けばいいわ、あそこは結構治安がいいし、次の神殿に近いしね。気をつけなさいよ？王都から離れるほど、ヒューマ族の世界に近づいて治安が悪くなってくるからね。」

そう言っつて朱雀たちに背を向けた。

「あの、アヤカさんは何処に行くんですか？」

朱雀は聞いた。

「私？私は変態男を捕まえて、何処かの町の警備隊にでもつきだすわ。」

アヤカはそう言っつと暗闇の中に消えていった。

「日向、いつまで怒ってんだ？」

朱雀はまだ怒っている日向に話しかけた。

「別に、怒ってなんかない！」

どう見ても怒っている。

「さっきは言い過ぎた、ごめん。美穂を早く助けてやりたかっただけなんだ。」

朱雀は意地を張らずに素直に謝った。

日向は朱雀を見つめ、その目が本気だとわかったところで、はあ、とため息をついた。

「必死になりすぎて周りが見えなくなる、昔からの悪い癖ね。いいわ、許してあげる。ただし、おごってね。」

そう言っつて日向は美穂を抱えた。

啞然としている朱雀に日向は叫んだ。

「朱雀ー、置いて行くわよー。」

朱雀は許してもらえたと確信し、歩き出した。

アヤカは次に変態男が現れると疑いのある神殿に向かっていた。
正直心細い。

もし襲いかかってきたら？

想像するだけで恐ろしかったが、怒りの感情の方が大きかった。
神殿をこれ以上上げなして欲しくない。

バイオの神殿にここ最近、動物の死骸や、自らの血を撒いていく、
変態男を捕まえて止めさせたいと考えていた。

バイオの教えにははつきり言って反対だが、古代に造られた貴重な
遺産を守りたかった。

考古学なら誰もがそう思うだろう。

しばらく歩くと神殿が見えてきた。

アヤカは肩から提げていたカバンを握りしめ、恐怖をまぎらわした。
神殿の中は暗い、一歩一歩慎重に歩く。

明るい…？

バイオの石像がある部屋が大量のロウソクによって明るくなってい
た。

！！

アヤカの目の前にあの男がいた。

ブツブツと呪文を唱えている。

男の周りには無数の動物の死体。

アヤカは思わず後退りしてしまった。

カッン

アヤカは床に転がっていた人骨を蹴ってしまった。

(しまった…！)

男は振り返る。

そして奇妙な笑みを浮かべる。

アヤカにゆらゆらと近寄る。

アヤカは短剣を抜いて突き出していた。

「こないで！」

しかし男は歩みを止めない。

「お前は、ブイオを信仰するか？」

男の言葉に反射的にうなずいていた。

恐怖で体が勝手に動く。

「ならば、信仰の証を見せよ。」

証…?!

「お前の足の小指、切り落とせ。」

「なに言ってるのよ！そんなこと、できるわけない…！」

アヤカは逃げようと走り出した。

殺される、殺される、殺される！

泣きながら必死に走る。

「きゃっ！」

アヤカの体は一瞬宙に浮いた。

男に腕を掴まれ、ひねりあげられたのだ。

「痛い…！」

腕が折れてしまいそうなくらい強い力だ。

人でないような虚ろな目でアヤカを見つめている。

「殺さないで…。」

アヤカの言葉が聞こえてないかのように、男はもう一つの手でアヤカの首を締めた。

「あ…ああ…」

アヤカは気が遠のいていくのがわかった。

思い出すのは、姉のアスカのこと。

魔術船の女性パイロットで尊敬してた。

いつも優しく微笑んでいた姉。

涙が溢れだす。

アヤカは最後の力を振り絞って口を動かした。

「お…ねえ…ちゃん…」

アヤカは動かなくなった。

「哀れな娘。ブイオ神よこの者の魂を貴方の力で導きたまえ。」

男はそう言つとアヤカの体を担ぎ、何処かへ歩き出した。

…？

朱雀は一瞬変な感じになった。

アリアに着いた朱雀は、宿に眠る美穂と一緒にいた。

嫌な感じが一瞬した。

「俺の思い違いであればいいんだが…。」

朱雀は美穂の手を握りしめた。

この時朱雀は、一人の儚き命が奪われたことをまだ知らない。

後に朱雀は悔やむことになる。

なぜあの時、あいつを始末しなかったのだろうか

アヤカ（後書き）

どうだったでしょうか？

度々このような死の場面や激しい戦闘シーンを書きます。
ご了承ください。

私、黒穂は早く皆様に認めていただけるよう頑張ります。

出会った二人

神殿の中はやはり気持ち悪い…。

朱雀は不安と不快感に襲われている。

まるで、敵陣の中にいるかのようなそんな感じがする。

一つ目の神殿よりも、嫌な感じが強くなっていた。

あちこちに人骨が落ちている。

まったく、気味が悪い神殿だ。

朱雀は少し迷っていた、このまま儀式を執り行っているのだろうか？

美穂が死ぬのは嫌だ、でも儀式をやって、美穂の心が死ぬのも嫌だ。

わがままかもしれないが、美穂は傷つけたくはない。

何故俺が美穂を守りたい、そう思うようになったのか。

それは俺が騎士団が入って間もない頃だった。

朱雀は14歳になって、ようやく騎士団に入団できた。
入りたかった理由は一つ。

家計を助けるためだ。

父さんは医者だが、患者から治療費を全く取らなかった。

人助けはいいが、こっちの生活がヤバくなってきた。

騎士団はわりと安定した金が入ってくる。

朱雀は必死に勉強し、強くなろうと努力した。

でも、魔術だけはどうしても使えない。

だから入団後の成績はいつも一番下。

団員からは嫌がらせを受けるありさまだ。

「このヒューマ族！何にもできない蛮族が！」
誰もがそう言い、朱雀をののしった。

（俺はヒューマ族なのか…？）

朱雀は段々、自分に自信が持てなくなっていくた。

ある日、城の中を気品のある女の子が歩いてた。

その子がいると知らずに、団員たちはいつもの様に朱雀を殴った。

朱雀はその気になれば、団員に勝てた。

でも、朱雀は手を出さなかった。

むやみに人を傷つけてはいけないと、父に言われているのもある。

朱雀自身、あまり人の苦しむ顔や悲しむ顔を見たくないと思っ
た。

朱雀が殴られた瞬間。

女の子はハツと息を飲み、そして近づいて来た。

何をするかと思いきや、朱雀を殴った団員になんとグーで殴ったの
だ！

女の子は凄いい剣幕で怒っている。

そして団員たちはあろうことか、女の子に手をあげようとしたのだ！
その時、騎士団長が来て団員たちに槍を向けた。

「お前ら！この御方を誰だと思ってる、我らが守るべき主、マリ
ン様であられるぞ！」

団員たちの顔が青ざめた。

そして、団長は団員たちを連れて行ってしまった。
だいたいこの想像はできる。処分されるのだろう…。

マリン姫は泣きべそをかいていると思いきや、勝ち誇ったような顔
をしていた。

「あの、大丈夫ですか？」

朱雀は念のために聞いた。

「うん、スッキリした」

マリン姫は笑ってた。朱雀はその笑顔に見とれそうになった。

初めて会った雲の上の人は、優しく、強くて、笑顔が素敵な女の子だった。

朱雀は姫から一歩離れた。

「どうしたの？」

彼女は無邪気に聞いてきた。

「あの…その、私はただの騎士ですし、それに皆にヒューマ族って呼ばれているものですから…嫌かと思ひまして。」

姫は怖い顔になった。

「騎士とか姫とか、そんなの関係ない！ヒューマ族だから何なの？ヒューマ族の人だっていっぱい、いい所があるんだから！」

顔を真っ赤にして怒っている。

「それに私、ずっと朱雀さんを見てた。」

朱雀は自分の名前をまだ口にしてない。

「あの、私の名前を何故？」

「騎士団の団長さんに聞いたの。優しい朱雀さん。」

さっきまで怖い顔だったのが、いつの間にか優しい顔になっていた。

「私は貴方の優しい所が好き。だから今日会いに来たの。そしたら

あの男たち、朱雀さんが優しいのをいいことに、酷いことしてたら…殴ってやったわ！」

姫とは思えないこの言動。

朱雀は可愛いと思った。

全然気取ってないし、隣にいて楽しい。

「あと朱雀さん、敬語止めて？嫌いな、お願い。」

お願いされてはうなずくしかない。

「はい…じゃない。うん、わかった。」

慣れるまで時間がかかりそうだ。

「私も朱雀って呼ぶね？これからよろしく。」

朱雀は姫の人柄が凄く好きになった。

ヒューマ族にもいい所がある。

そう言った。

自分はヒューマ族かどうかわからないけど、差別は好きじゃない。姫は朱雀が今まで皆に言えなかったことを、あんなに強く主張してみせたのだ。

「ねえ、朱雀。せっかくお友達になれたんだし、私のお願ひもう一つ聞いてくれる？」

「いいよ、朱雀はそう言ったものの不安になった。

もし無茶なお願ひだったらどうしようか？」

そんな朱雀をよそに、姫の願ひは意外なものだった。

「私に名前をつけて。」

朱雀は思わず え、と呟いた。

「私、マリンって名前嫌い。」

「何で？ いい名前だと思うけど……？」

朱雀は何故だか全然、わからない。

「だって、親の七光りって言うでしょ？ マリンって聞くだけで、私がかどんな人かも知らずに皆、頭さげるんだもの……。」

なるほど。朱雀は納得した。

「わかった。でも、時間をちょうだい？」

「うん、可愛くて綺麗な名前にしてよ？ じゃあ名前が決まったら、私の部屋には入れないから……そうだ、ベランダの下にいて？」

そう言うのと走って行った。

途中振り向き、絶対よ？ といいながら。

朱雀は悩んだ。

何て名前をつけてあげようか？

父さんにも相談したが、朱雀が決めた名前の方が喜ぶと言われた。

そうだ、そう言って朱雀は目を瞑る。

そして自分の美しいと思うものを思い出した。

そしてある光景が見えた。

一度父に見せてもらったことがある。
ある秋のこと、太陽に照らされ、黄金に輝く一面の稲穂。
それは幼い朱雀に感動をあたえた。
美しい稲穂。

「美穂。」

美穂だ！ そうだ、そうしよう。

朱雀は決まった途端、姫の所へと駆け出した。
喜ぶ顔がみたい。

朱雀は初めてこんなことを思った。

姫のベランダの下から彼女を呼ぶ。

「来てくれたの？」

とても嬉しそうに出てくる。

「名前、決まったから。」

「呼んで、私の名前を。」

朱雀は言った。

「君は美穂、俺の大切な友達。美穂だ。」

彼女 いや、美穂はにっこり笑うと、ベランダから飛び降りた！

朱雀はアツと言って美穂を受け止める。

「大丈夫？」

美穂は叱らずに、自分の身を気づかってくれた彼に抱きついた。

「うん。私は美穂、朱雀の友達。」

こうして彼女の名前は美穂になった。

それから四年の月日が経ち。

朱雀は18、美穂は16歳になった。

だんだん年頃になり、美穂は朱雀に抱きつかなくなっていた。

互いに異性を気にし始め、昔のように手を繋ぐこともなくなったが、

朱雀は美穂に笑いかけてもらえるだけでよかった。

この笑顔が消えてしまわないように、朱雀は美穂をずっと守りたい
と思った。

出会った二人（後書き）

黒穂です。

二人の出会いを書いてみました。

純粹な朱雀の心が皆様に伝わるといいなって思います。

次から後書きに余談も書こうかなーと思ってます。

指名手配

不安なのか、美穂は朱雀から離れない。
恐いだろう。

一度あんなことが起きたんだ。

朱雀は毎日のように呪いを解く方法を探した。
しかし、何も情報は得られなかった。
ぐずぐずしていたら、美穂が死んでしまう。
考えている暇などなかった。

朱雀は美穂の記憶がなくなった時、途方に暮れたものだ。
前みたいに美穂は笑わなくなった。

笑ってほしいし、わがままも言ってほしい。
でも美穂は傷つけられ、昔の面影はなくなってしまった。
別人のようになった美穂。

それでも彼女を守りたいと思う気持ちは変わらない。
守るって決めたのだ。

今の美穂も前の美穂も、どっちも彼女なのだ。

「大丈夫か？」

朱雀は度々そう尋ねる。

「うん、大丈夫。」

彼女は決まってそう言うだけ。
体は震えているのに…。

日向は一緒に来なかった。

体調が悪いと言って寝込んでしまったのだ。

そんな状態で連れて来るわけにいかないので、宿で留守番させている。

広い空間に出る。

朱雀は身構えた。

きっと魔物が出てくるだろう。

予想通り、奥から出て来た。

ガーゴイルではない、鳥のような魔物だ。

「我はブイオ神に仕えるものなり、手合わせ願おう。」

そう言うと朱雀たちに飛びかかる。

朱雀は美穂を下がらせた。

「我のスピードについてこれるか？」

魔物は低い声で朱雀に問いかける。

自信に満ち溢れた声だ。

朱雀は剣を振り上げ、衝撃波を作り出す。

その爆風に乗って朱雀は飛び上がった。

そのとき、朱雀の背後から声がした。

「遅い！」

魔物は確かに朱雀の背後をとった。
はずだった。

「そつちこそ、遅いよ。」

魔物は後ろを振り返る。

そこに剣を振りかぶる朱雀の姿があった。

魔物は崩れ落ちた。

死んではない。

朱雀は手加減したのだ。

殺生はしたくない。

魔物はスツと消えた。

認めてくれたのだろう。

朱雀はスピードには自信がある。

団長に神業と言わせたほどだった。

今回の魔物は戦いやすかった。

スピードは朱雀も自信があったし、何より朱雀は空中戦が得意だった。

騎士団らしくないが、馬に乗るより、よっぽど得意だった。

美穂は柱の影から顔を出した。

無傷の朱雀を見て、ホツとした。

いよいよ、二度目の儀式。

美穂は恐かったが、朱雀がいてくれる。

一人じゃない、朱雀が言った言葉を思い出すと体の震えが治まる気がした。

美穂は祭壇に近寄り、横たわった。

バイオの石像の目が光った。

美穂はギョツと目を瞑った。

何も見たくない。

体が宙に浮いているのがわかる。

そして体の中に何か入って来る。

苦しい、息ができない。

美穂は涙を流していた。

(何を恐ることがある？お前と私は同じだというのに。)
美穂だけに聞こえる声、男の声だ。

バイオ？

美穂がそう思ったとき、体は祭壇に下ろされていた。横を向くと朱雀が見えて、安心した。美穂が体を起こそうとしたとき、体に異変が現れた。

ドクンツ　美穂の体の中で何かが波打った。

一瞬息ができなくなり、咳き込んだ。

口にあてていた手を見た。

血が付いている。

また息ができなくなったと思うと、今度は血を吐いた。

血は止まらない。

すると背中に温もりを感じた。

朱雀が美穂の背中をさする。

気休めぐらいにしかならない。

そんなことわかっていた。

でも、気休めでもいい、美穂に少しでも楽になって欲しかった。

美穂は朱雀を真っ直ぐ見た。

目が霞んで見えない。

段々、何にも感じなくなっていく。

美穂は気づいていないが、この時の美穂の目は死人のように光がなかった。

朱雀は彼女を抱き抱え、急いで宿に戻った。

宿に着いて、

まず美穂をベットに寝かした。落ち着きを取り戻している。

もう大丈夫だ。

隣の部屋を覗くと、日向は座っていた。
正確には何か読んでいる。
真剣な顔で。

「日向、具合はどうだ？」

朱雀が話しかける。

…。

日向は何も言わずに、読んでいたものを朱雀に渡した。

それは新聞。

朱雀は文に目を通した。

そこに書かれていたのは…

虐殺皇女、

アクア・M・マリンを指名手配。

朱雀は啞然と新聞を見る。

「指名手配？何かの間違いだ！」

朱雀は声を張り上げた。

美穂は旅に出るようになってからは、毎日朱雀といたし、旅に出る前も城から出たことがない。

悪いことなんか、できるわけがない。

それも、殺人なんて尚更だ！

誰かの仕業としか思えない。

ジエドルドか？

まず疑ったが、あいつは儀式が終わるまで手を出して来ないだろう。

ジートか？

いや、ジートもジエドルドと同じだろう。

誰の仕業か全く検討がつかない。

ドンドン と部屋のドアが叩かれる。

「ここにいるのは、わかっている！抵抗せずに出てこい！」

朱雀に追い討ちをかけるかのように、兵士たちの声が響いた。

見えない敵。

敵は今も準備をしている。

美穂を殺す準備を…

指名手配（後書き）

次回から、黒鬼編に突入します。

激しい戦闘シーンやグロテスクな表現を含むかもしれません。

あらかじめ、ご了承ください。

私は人の醜い心も、なるべく隠さず書いていきたいと思っています。

美しい心、醜い心。

二つを書くことで、初めて人を表す事ができると私は思っています。

皆さんはどうお考えでしょうか？

by 黒穂。

勘違い。(前書き)

これまでのお話し。

アクア国皇女、美穂（アクア・M・マリリン）

は、大臣たちの手によって儀式の犠牲になってしまう。

美穂の友達の朱雀は、彼女の儀式を止めなるべく旅に同行する。

日向という妖狐は自分の故郷を探すという口実で、朱雀たちに同行することになった。

儀式、世界の冷戦状態、美穂の心は深く傷ついてしまった。

朱雀はそんな彼女を守りたいと決意する。

そして新たな問題、美穂の指名手配。

黒鬼編が今、幕を開けた。

勘違い。

身に憶えのない指名手配。

美穂は落ち込んでいた。

町から少し離れた山に朱雀たちは逃げてきた。

町は騒がしい。

「まったく、殺人犯に美穂の名前を使われるなんてな。」

朱雀はため息をついた。

「もう、頭きちやう！美穂が虐殺なんて、するわけないのに！」

日向はかなり頭にきている。

「皆、もういいよ。きつと私が恨まれることしたんだよ……。」

「よくない！」

朱雀と日向は同じに叫んでいた。

いいわけない、美穂は実際何にもしてないない。

朱雀は考えた。

殺人犯が人を殺している現場を誰かが見た。

殺人犯はそいつを殺さずに美穂の名前を言って逃がした。

目撃者がいるはずだ。

まずはその目撃者を探さないと……。

町中を歩くのは危険だ、なにしろ顔が割れている。

変装しかない。

朱雀はとっさに思いついた。

まず、朱雀だが。

紺青色の髪はとにかく目立った。
帽子を深くかぶって、ロングコートを羽織る。

日向は…。

どう頑張っても、狐の耳が見えてしまっ。

また日向は留守番を、させられることになった。

美穂は男の子になった。

これを言っでは怒られるが、顔は歳より幼く見えるし、胸も小さい。
少し大きめの服を着れば、体のラインはすぐに隠れた。
気の弱そうな男の子に見える。

日向は文句を言っていたが、これはどうしようもない。

町に行くと、やはり騒がしい。

町中を歩いていても誰も声をかけてこない。

変装は上手くいった。

他人から見れば、朱雀と美穂は兄弟に見えるだろう。

町を歩き回り、いろんな人に声をかけた。

なかなか見つからない。

それはそうか、朱雀は冷静に考えるようにしている。

「あの、目撃者を探しているんですか？」

一人の青年が話しかけてきた。

「ああ、もしかして。君が？」

朱雀はすかさず聞いた。

「はい。」

「何でもいい、知ってることを話してほしい。」

朱雀の真剣な表情に、ただ事ではないと思ったのか、青年は話し出した。

青年によると、一ヶ月前から失踪事件が続いていて、問題になっていたらしい。

そして、五日前から死体が見つかりだした。死体は右目がなく、体をズタズタに引き裂かれていた。

青年は昨日、仕事の帰りに現場に出くわしたという。

犯人は右目に黒い眼帯をつけていて、顔も髪の色も美穂に似ていたらしいのだ。

そいつは、たしかにアクア・M・マリンだと名乗り消えたそうだ。

美穂に似ている…？

朱雀はますます、わからなくなっていた。

「お役にたてましたか？」

青年は聞いた。

「ありがとう。よくわかったよ。」

そう言うと青年は軽く頭を下げ、立ち去った。

また一つ謎が増えた。

「一度戻って日向に相談してみるか。」

朱雀は美穂に言った。「うん、そうだね。」

朱雀と美穂は一度戻ることにした。

すると、なにやら町が霧がかかったかのように白くなっていく。

朱雀は美穂とはぐれないように、手を繋いだが、人の波にのまれてうっかり手を話してしまった。

「美穂！」

名前を読んだが、美穂の姿はない。

人々は混乱し、逃げ惑っている。

この煙幕はあきらかに誰かの仕業だった。

朱雀は心配になり、美穂を探した。

すると朱雀の目の前に、見覚えのある女性が立ちはだかった。

アヤカさん…？

アヤカにそっくりだった。

その人は何も言わずに、スプレーで朱雀の顔に粉を振り撒いた。

朱雀は粉を吸い込んでしまい、意識が遠退いていく…。

そのまま倒れてしまった。

美穂は朱雀を探していた。

視界が悪く、あまり見えない。

一瞬の出来事だったので、何が起こったのかわからない。

わからないが、危険なことは美穂にもわかる。

歩いていると人にぶつかった。

「ごめんなさい！」

そう言っつて、その人を見上げた。

男が立っていた。

朱雀よりも背が高く、白髪で長い髪を一つにまとめている。

日向がいれば、イケメンだと言っつに違いない。

そんなことを考え、美穂は男をじつと見つめた。

「黒鬼だな？」

男は静かに問う。

美穂は怖くなって、逃げ出そうとした。

ドンッ

美穂の頭に衝撃が走る。

殴られて美穂は倒れ込んだ。

美穂の意識は微かにあった。

男は誰かに連絡をとっている。

「アス：目標：確：した。」

よく聞こえない。

そして美穂の視界が真っ暗になった。

「ここから出してくれ！」

朱雀は牢にぶちこまれていた。

「暴れないでよ、あなたが悪いんだからね。黒鬼とつるんでる方が悪い。」

朱雀の顔にスプレーをかけた、あの人が朱雀に話しかけてきた。

「アヤカさんですか：？」

朱雀は聞いてみた。

「何で妹の名前を知ってるの？ 私はアヤカの姉、アスカよ。」

アヤカに姉がいたのか、朱雀は驚いた。

「アヤカさんとは、バイオの神殿で会ったんです。」

「神殿…。もしかして儀式を受けに？」

アスカの顔色が変わった。

「はい。」

「じゃあ、あの女の子…皇女様？」

朱雀はうなずいた。

「勘違い…。ごめんだけど、一緒に来て！」

アスカは朱雀を牢からだし、腕を掴んで何処かへ連れて行くつもりでいる。

「何なんですか、今度は?!」

アスカは焦っていた。

「私にパートナーがいるんだけど…皇女様、拷問受けてたりして…。」

朱雀はさーと血の気が引いた。

アスカは朱雀の手を引き走った。

もし、勘違いで美穂に何かしてたら。

そのときは乱闘でも何でもしてやるう。

朱雀は本気で思った。

アスカが美穂がいる部屋を開けた。

美穂は部屋の隅に追いやられていたが、まだ何もされていなかった。が、男が美穂にせまっていた。

「おいっ！」

朱雀は振り向きざまに、男を殴ってやるうと思った。

ゴンッ

鈍い音がした。

男を殴ったのは、アスカだった。

「アレンのバカ！その子は黒鬼じゃないわ！」

アレンと呼ばれた男は、表情をまったく変えずに美穂を見つめる。

「なんだと？」

不満そうに言う。

「似ているけど、その子は皇女様よ！」

アレンは美穂に近づいて、彼女を立たせた。

「すまなかった。」

アレンは言うが、顔の表情は変わらない。
無愛想だ。

人はこれをクールと呼ぶのかもしれない。

「貴方たちは、何者何ですか?! 美穂にこんなことして!」
朱雀は二人を睨み付けた。

「ごめんなさい、私たちは鬼狩り。鬼狩りのメンバーよ。」

そして運命の歯車がまた一つ、動き出した。

勘違い。(後書き)

えっと、神月ラセさん。

コメントありがとうございます。

なるべく進むスピードに気をつけます。

黒鬼編に突入しましたが、わからない所があれば教えて下さい。
改善に励みます！

読んでくださる、皆様に感謝。

by 黒穂。

魔術船

「鬼狩り…？だったら、何ですか。」

朱雀はそう言つて美穂の傍に行つた。

「私たち、黒鬼を探しているの。皇女様にそっくりな…ね。」
殺人犯と共通点がある。

どっちも美穂に似ている…。

「あの、連続殺人犯と関係があるんじゃないですか？」

朱雀は聞く。

「ええ、その殺人犯が黒鬼よ。だから、勘違いだったにせよ、貴方たちはここに居てちょうだい。」

アスカは深刻な顔をして言つた。

「勘違いだつたんですよ、だったら何で…。」

朱雀が最後まで言い終える前に、アレンが口を挟む。

「黒鬼はこの女を狙つてる、だからここに居た方が安全だ。」

そう言つて朱雀に、指名手配書を見せた。

「この女を黒鬼は殺したがっている。じわじわ追いつめて最後に、自分で始末しようとしている。」

美穂の危険を考えると、ここで保護してもらつた方がいいかもしれない。

「わかりました。あ、日向忘れてた…。」

朱雀は日向の存在にようやく気が付いた。

「その子も…一応確保してるわ。今は隣の部屋で眠っていると思つ。」

アスカは申し訳なさそうに言つ。

「つてことは…どこから、俺たちの後をつけてきたんですか…？」

朱雀は恐る恐る聞いた。

「お前等が兵士に追われて、町を出るところからだ。」
アレンが答えた。

朱雀はゾツとした。

今までつけられているとは…。

まったく気付かなかったのだ。

「さてと、黒鬼の詳しい話は少し移動してから話しましょ。」

そう言つてアスカは何処かへ行つてしまった。

「アスカさん、何処に行つたんですか？」

朱雀はアレンに聞いた。

「操縦席だ。今から俺たちが乗っている、魔術船を動かす。」

アレンの言葉に朱雀はギョツとした。

「魔術船つて今乗っているんですか?!」

朱雀はずっと、何処かの施設の中だと思つていた。

「そうだ、魔術船の中は歩き回つてもいいが…迷うなよ?」

そう言い残して、アレンも何処かへ行つた。

ガガツと船内が軋んだと思つたら、朱雀の体は一瞬飛び上がった。

魔術船が浮上したのだ。

朱雀は窓から外を見る。

浮上したといつても、地面から、何メートルしか離れてない。

この船は空は飛べないだろう。

ただタイヤだと、パンクするし、砂漠や海は走れない。

だから魔術で船を浮かせているんだ。

朱雀はそう解析する。

こんなとき、日頃の勉強が役に立つ。

朱雀は改めて痛感した。

魔術船の中はほとんど振動はなく、乗り物が嫌いな日向も快適そうだった。

朱雀たちは色々話をした。

ごちゃごちゃになつた頭を整理するために。

俺たちはアリアに来て、そこから俺と美穂は神殿に向かった。

神殿に行っている間に、新聞社が号外を出していた。

神殿から、帰って来てみればもう犯人扱いだ。

俺たちが兵士たちを撒いて、山に逃げ込む頃からアレンたちは捕獲の準備をしていたらしい。

そして俺と美穂は情報を集めに町へ、日向は山で隠れた。

日向が一人になったところですのでアレンたちに捕まったらしい。

俺と美穂はそうとは知らずに、殺人犯の情報を聞いていた。

情報は殺人犯が美穂にそっくりだと、いうことしかわからなかった。帰る途中。

アレンたちの煙幕で、俺と美穂は、はぐれてしまった。

そして捕まり、後から聞けば勘違いで捕まえてしまったらしい。

そして今に至る。

「迷惑な話だけど、保護されて逆に良かったんじゃない？」

日向が言った。

「そうかもな、今回の事件。俺たちだけじゃ、どうにもできなかった。」

朱雀は心からそう思う。

アスカやアレンはきつと、犯人のことをよく知っているのだろう。

「こんな事件に巻き込んでごめんね。」

美穂はうつむきながら言った。

「いいのよ、美穂の敵は私たちの敵〜！」

日向が美穂の肩に手を置いた。

「そうだ。巻き込まれなくなかったら、最初から一緒に来てないよ。」

朱雀も励まそうと声をかける。

「皆：ありがとう。」

美穂はやっと顔を上げた。

気分転換に船の中を見てまわることになった。

船の中は広くて、部屋が沢山ある。

一階は部屋が沢山ある。

二階はブリッジで、操縦席もそこにある。
三階はラウンジで、屋根がなく、風が吹いて心地がいい場所だ。

ラウンジで朱雀たちは景色を見ていた。
移り変わる景色を見るのは、飽きなかった。

こんな大きな船を操縦できる、アスカの技術は凄いと朱雀たちは思った。

魔術船のパイロットは国家資格が必要で、女性パイロットはたった5人しかいないと、朱雀は父親から聞いていた。

アスカは妹のアヤカと顔はそっくりだ。

そして、性格もそっくりだった。

好きな事にかける思いが、二人ともすごく似ていた。

アスカは魔術船の、アヤカは考古学の、プロフェッショナルと言ってもおかしくないだろう。

二人が話すところを見てみたいと朱雀は思った。

一方、アレンは日向も気に入らないらしい。

無愛想で素っ気ない態度。

アスカに殴られたときも、顔色一つ変えなかった。

「顔はイケメンなのに、もったいない。」

日向はアレンを見る度そう言った。

アレンにも何かありそうだ。

朱雀は直感的にそう思った。

そんなことを言い合いながら過ごしていると、魔術船が止まった。

「貴方たち、ブリッジに降りて来て。」

アスカの呼ぶ声がした。

朱雀たちはブリッジに向かう。

鬼と呼ばれる人間がいることを、朱雀たちは知ることになる。

決して逃れることのできない運命が、朱雀たちに牙を向いた。

魔術船（後書き）

この小説、小学生の頃から考えていたんです。

友達に見せたりとか、親に見せたりとかが好きで、今に至ります。

昔から、人に読んでもらう事が大好きでした。

あと、絵を描くのも好きです。

皆様は趣味とありますか？

by 黒穂。

黒鬼

朱雀たちはブリッジに集まった。

「今更なんだけど…自己紹介、お願い。」

朱雀たちはまだ名乗っていなかった。

朱雀たちは名前を言い終わると、アスカは不思議そうに聞いた。

「朱雀くんって名字は？」

「……グレイブ。」

朱雀・グレイブになるのだ。

親の名字だから必然的にグレイブになるのだが、朱雀はこの組み合わせが嫌いで、いつも名前しか名乗っていなかった。

魔族でも、ヒューマ族でもない半端な位置に朱雀はいた。

「で、名前はご両親が？」

アスカは聞く。

「いえ、頭の中でたまに声がするんです。その声が朱雀だって。」

アスカは聞きたい事が山程あったが、アレンに睨まれた。

「さっさと話せ。」

アレンの言葉にムツとしながら、アスカは話し始めた。

この世界には鬼と呼ばれる人間がいる。

元は普通の人間だった人たちが。

しかし、過去に 虐待 虐め 差別 を受け、人生に絶望し、世界を呪う。

そして無差別に虐殺を繰り返す。

アレンやアスカはその理性をなくし、ただ人を殺し続ける人間を

鬼 と呼んでいる。

鬼狩りは鬼を捕らえて、救済活動をしているらしい。しかし、ほとんどの場合が感情が欠落していて、普通の人としての生活が困難な鬼ばかりなのだそう。そんな鬼は、一思いに殺すしかない。それ以外に方法はない。

そんな鬼の中で、一際凶悪な鬼がいる。

それをアレンたちは、黒鬼と呼んでいる。

性別は女。理性もまだある。

そこが問題だった。

理性があり、同時に知性もある。

黒鬼は戦略を立て、人を利用する。

ただ殺しまくる鬼とは違い、遭遇は滅多にできない。

裏で駒を進める厄介な鬼なのだ。

そして、黒鬼は脅威的な殺傷能力。

アレンは二度遭遇できたが、二度とも犯行現場だった。

信じられないものを見た、とアレンは話した。

黒鬼が消えたと思った瞬間、そこに居た数十人の首が飛んだ…そう
だ。

朱雀は信じられないとアレンに言った。

「嘘ではない。まあ、いずれお前たちを殺しに来ると思うが…。」

アレンは真剣そのものだった。

「でも、虐待だなんて…。」

美穂は泣きそうになっている。

彼女は記憶喪失だからわからなくて当然だが、虐待や人種差別は世界的問題になっている。

朱雀も差別された一人で、朱雀の場合は魔術が使えないだけで、蛮

族と罵られたのだ。

朱雀はまだましな方で、人買いに売られたり、奴隷にされたり…。世界にはもっと酷いことをされている人々がいるのだ。

「こんな世の中じゃ 鬼 と呼ばれる人が出てきても、おかしくないわ。」

日向はそう言うと、急に怒りだした。

「って言うか、何で美穂が狙われるのよ！」

「そこだ、アレンがすかさず言った。俺が知りたいのはそこだ。お前と黒鬼、何か関係があるのか？」

アレンは美穂に指を指した。

朱雀と日向は考え込んだ。

「この子に同じ年ぐらいの親族はいないの？」

アスカが言う。

「同じ年ぐらい…美穂のいところか、お姉さんがいたんですが、もう亡くなってます。」

朱雀は知ってる限り話した。

「そのいとこの子は、美穂ちゃんに似ているの？」

「顔は似てる方だと思います。でも髪の色が、黒です。」

美穂は茶色の髪をしている、そして黒鬼も。

「おかしいわね、絶対親族だと思ったのに。」

アスカが納得いかないという顔をした。

アスカは王族の後継者争いに目をつけたのだ。

美穂に怨みを持つのはそこしかない。

「待て、姉は似ているのか？」

アレンが言った。

「はい、目の色が違うだけで。」

アレンは何かわかった様な顔をする。

「まさか…お姉さんが？死んでいるんですよ？」

朱雀はアレンに問う。

日向も気になるみたいで、アレンの顔をジッと見る。

「こいつの姉の死体を直接見たのか？」

「いや…見てない。」

見ているはずがない。

「もう一つ聞く。死体は発見されたと、城の奴等は言っていたか？」

アレンは静かに言う。

「谷に落ちた、だから死体はないと…。」

城の者も見ていないのに、死体など見れるわけなかった。

「こいつの姉は生きている。」

沈黙が続いた。

「こいつの姉は何らかの理由で、王族から追放されたか、もしくはもっと酷い仕打ちを受けた。」

朱雀は思い切って聞いた。

「酷い仕打ちって…例えば？」

「人買いに売られた。」

アレンはさらりと言っう。

「そんな…美穂のお母さんはそのせいで！」

日向はハッと口を閉じた。

母親がどうして死んだのか美穂は覚えてないことを、日向は思い出した。

朱雀も知っている、美穂の母親は自殺したんだ。

愛する我が子が死んで、美穂の母親は精神的に追いつめられ、自害のという選択をしてしまったのだ。

美穂の姉の死が城の者（大臣や神官たち）が流した嘘なら、美穂の母親はそいつらに殺されたことになる。

「くそっ！どれだけ美穂が苦しんだと思ってるんだ！」

朱雀は壁を殴った。

「朱雀くん、憎いのはわかるわ。でも、今は冷静にもの考えましょ？ね？」

アスカはそう言って朱雀をなだめた。

「そうですね…今はこの事態を何とかしないと。」
「いつ美穂の命を狙ってくるかわからない。」

「で、そのお姉さんの名前は？」

アスカが朱雀に聞いてきた。

「クロサスさんです。」

「詳しいのね。」

日向がニヤニヤ笑いながら言う。

「騎士になるには、アクア族の家計を全て覚えなさいといけないからな。」

日向を睨み付けながら朱雀は答える。

「てつきり美穂が好きだから、家計を調べて挨拶に行こうとしてるのかと思っただ。」

日向は楽しそうだ。

「ばか野郎…！そんな幼稚なことを考えるのはお前だけだ！」

アスカも美穂も笑っている。

自分のことをネタにされて腹立たしいが、あの空気を打開できたのなら日向のおかげ（？）だろう。

ドオンッ

皆の顔から笑顔が消えた。

「なんだ…？」

ドオンッ

また、この爆音。

そして船内が激しく揺れる。

「襲撃…されてるんだわ…！」

アスカはそう言っていると操縦席に座った。

「とりあえず振りきれるかやってみろ。」

アレンが指示をだす。

「わかってるわ…！皆、急発進するから掴まってて！」

そして魔術船は動き出した。

黒鬼（後書き）

黒穂デス。

黒鬼編に入って、一人で盛り上がってます。

〇〇編とかいくつかある中で黒鬼編が一番好きです。
番外編も書きたいのですが、何書こう…。

襲撃

ドオンッ

襲撃を受けながら、魔術船は最高速度で逃げる。

アレンは長剣を持ち、戦闘態勢に入る。

朱雀は美穂を支えていた。

「おい、朱雀。お前はその女連れて部屋に行っておけ。」

朱雀がアレンに何か聞き返そうとしたが、アレンが先に説明した。

「黒鬼が襲撃している、この船が止められるのも時間の問題だ。俺が食い止める、お前は一番奥の部屋でその女と一緒に居ろ。」

朱雀は美穂を連れて、奥の部屋へと駆け出した。

日向は窓から外を見ていた。

魔術船は荒野のような場所を走っている。

向こうの方に小さな土煙が立っていた。

襲撃者、黒鬼だ。

乗り物には乗っていない、多分風属性の術を使い、飛んでいるのだろっ。

高度な技術がなければ、術を使ってなど、飛べないのだ。

元々術は、相手を攻撃するものであって、自らの能力を保護するためのものではない。

だから難しいのだ。

一歩間違えば、自爆してしまう。

土煙の中から赤い玉がいくつも放出されて、魔術船に当たっている。

「一度にあんな数…。この船もっ、もたない…！」

日向が言ったとき、船の機能がとまり、一気に地面に落ちた。

ドーンッと激しい音がし、船が落とされたことを意味した。

船の入り口が壊され、黒鬼が中に入って来た。

まず黒鬼の前に立ちはだかったのは、アスカだった。銃を持ち黒鬼に向ける。

「黒鬼、大人しくしなさい！私たちが貴女を助けようとしているのよ？」

黒鬼は黙ったまま、アスカに近づく。

アスカは発砲した。

が、黒鬼はそこにはいない。

すでにアスカの懐に、黒鬼の拳があつた。

アスカは激痛が走ったと思うと、床に倒れ込んでいた。

黒鬼は殺す気はないらしい、アスカを無視し、奥へ進む。

「そこまでだ。」

黒鬼の前にいたのは、アレンだ。

アレンは剣を抜き、構えた。

「何もしなければ、俺たちはお前を助けてやる。」

アレンの問いかけに、黒鬼は眉一つ動かない。

そして、アレンに飛びかかった。

アレンも剣を降り下ろす。

黒鬼は素手のままだ。

「剣を抜いたらどうだ。さすがにお前でも、素手で俺を越えて行けないぞ。」

アレンが一撃入れようとしたとき、黒鬼は背負っていた剣を抜いた。

ギンッ

激しくぶつかり合う刃と刃。

アレンは今は応戦できているが、黒鬼は本気を出していない。

やり合っているうちに、黒鬼は苛立ち始めたのか、スピードも力も増している。

そして、アレンの剣が手から離れ、床に刺さった。

黒鬼はアレンを蹴り飛ばし、奥の部屋へと進む。

「くそっ…朱雀！行ったぞ…！」

突破されたという合図だ！

朱雀は剣を抜き、構える。

いつ黒鬼が部屋に入って来るか…。

緊張が張りつめる。

「朱雀、大丈夫なの？危ないんだったら、私がおとりになる。」

美穂が朱雀の背中にしがみつきながら言った。

「大丈夫だから、そんなこと言わないでくれ。」

大丈夫、そう言うしかない。

ガタツとドアが揺れた。

来るか…？

バンツ

ドアが吹き飛ぶと同時に、朱雀も飛ばされていた！

美穂の目の前にいた朱雀が、一瞬にして倒れている。

「朱雀…！」

美穂が駆け寄ろうとしたとき、人影を感じた。

黒鬼と呼ばれた少女が朱雀に近づこうとしていた。

美穂は両手を広げ、その歩みを妨げる。

「もう止めて！貴女の狙いは私なんですよ？」

美穂の顔を見たたん、黒鬼の顔が歪んだ。

「…久しぶりだな、マリリン。」

少女にしては低い声だ。

「貴女はどうして私を殺そうとするの？」

「お前…！忘れたとは言わせんぞ！」

黒鬼の目が怒りにギラついている。

「ごめんなさい…私、記憶ないから…」

黒鬼は啞然と美穂を見る。

「でもクロサスさん…」

美穂がそう言ったとき、腕に痛みを感じた。

黒鬼が美穂の腕を折る勢いで掴んでいる。

「その名前を口にするなあ！お前は死ね、すぐ死ね！！」

美穂はそのまま床に叩きつけられた！

そして黒鬼は美穂に刃を向ける。

「や…めろ…！」

朱雀が黒鬼の足を掴む。

黒鬼はうっとうしいというように、刃を朱雀に向ける。

冷静になったのか、剣を鞘におさめる。

「…私のアジトを探しだせ。そこで決着をつける。

何人来てもいいが、マリンは絶対連れて来い。」

「逃げるかもしれないぞ？」

朱雀は言った。

「逃げられないさ。」

そう言った黒鬼は、自信に満ち溢れていた。

そして、黒鬼はいつの間にかいなくなっていた。

「う…。」

美穂は打ち付けられた体を起こした。

「痛むか…？」

「ううん、大丈夫。」

美穂は体を動かして見せた。

アレンとアスカも駆けつける。

「とりあえず、生きてるみたいだな。」

アレンは安心した様に言う。

「そうね、無事で良かった。」

アスカもホツとしたようだった。

「日向は？」

朱雀は日向がいないことに気づく。

「隠れているんじゃないかしら？」

アスカは部屋を見てまわる。

「日向、もう大丈夫だよー？」

美穂の言葉にも応えない。

朱雀は窓のあたりに、光る物を見つけた。

日向がつけていた髪飾りだ。

まさか…！

「あいつ…日向を連れて行ったな…！」

こうして

黒鬼との一度目の遭遇は、最悪な展開で幕を閉じた。

襲撃（後書き）

プロフィール

美穂 16歳

身長 155cm

髪 茶色でショート

目の色 ハニー

ブラウン

身分 アクア国

現皇女

明るく優しいが、心配性。

皇女らしくなく、普通のどこにでもいる少女の様。

身分や種族を全く気にしない。

以上、プロフィールでした。

by 黒穂。

敵意は愛情へ（前書き）

遅くなりました。

楽しみにしていただきつつ読者の皆様、すみません。

テスト期間中など、事情により更新が遅くなることありますが…
よろしく願います。

では引き続きお楽しみ下さい。

敵意は愛情へ

船内は静かだった。

アレンとアスカは黒鬼のアジトを搜索している。

朱雀はベットに腰掛け、頭を抱える。

「逃げられないって、こういうことだったのか…！」

悔しくてたまらない。

負けたことも悔しいが、それ以上に友達を守ってやれなかったことが悔しい…。

勝てるのか？黒鬼に…。

朱雀は自分に問う。

体は震え、聞けば聞くほど 勝てない と訴えかけてくる。

黒鬼は人間の限界を超えていた。

本当に鬼と化している。彼女は美穂の様に追いつめられただろう。そして。

誰も守ってくれなかっただろう…。

美穂には朱雀という守り人がいたから、頑張ることができた。

黒鬼はきつと、誰にも思われることなく

独りで仕打ちに耐えてきたのだろう。

朱雀はそう考えると何とも言えなくなる。

黒鬼を咎めることができなくなりそうだ。

だか、どんなことがあると 人殺し は 人殺し なのだ。
許すわけにはいけなかった。

「大丈夫？」

うつむく朱雀が顔を上げると、美穂が目の前にいた。

「ああ。ありがとう。」

そっちこそ、朱雀は美穂を見た。

「私は大丈夫。朱雀が守ってくれてるから。でも朱雀は…私の分まで傷ついているんじゃない？」

朱雀は違うというが、気落ちしているのは目に見えていた。

「そんなに背負わなくていいよ、私も頑張るから。ね？」

そして美穂は朱雀に小指を出した。

「何だ？」

朱雀も小指出して、そう言われた。

「約束だよ。嫌なこと二人で分けあうこと。」

美穂はそう言っ、朱雀の小指に触れた。

「うん。」

朱雀は少し照れた。

美穂からこんなことを聞くと思ってなかったからだ。

「嘘もつかないでね？」

美穂は笑っていた、朱雀の心を照らす光の様に温かい笑みだった。

「お取り込み中悪いけど、ちょっといい？」

アスカが手招きしている。

「はい、何ですか？」

「黒鬼のアジトが…」

「見つかったんですか!？」

朱雀と美穂は同時に叫んだ。

「見つからないの。」

え？ それってどういう…？

「情けないけど、もうお手上げて感じなの。全くわからないわ！

黒鬼が一ヶ所に留まったことなんて、一度もないもの…。」

アスカは苛立っている様子だった。

「わかりました、わかりましたから。俺も探してみますから。」
正確には俺たちもだ。

美穂にも手伝ってもらおう。
彼女もそれを望んでいるだろうから。

「ありがとね、私もできる限りのことはするわ。」
アスカはそう言って別室に移った。

さて、どうやって探そう。

鬼狩りの人間がわからなかったら、もう誰もわからないのでは？
と、思ったが。

さすがにジツとはしてられない。

日向の命がかかっているのだ。

早く見つけないと、黒鬼は苛立って日向を殺してしまうかもしれないのだ。

ハアと息を吐き、情報収集に取りかかる。

美穂と一緒にこの近くの町へ行ってみることにした。

船から降りると、アレンがそこに居た。

「俺も一緒に行く。」

一言そう言い、黙ってついて来た。

アレンは口下手だ。

しかし、顔を見ればわかる。

人は目に表れるものだ。

そう思ったのだが…

アレンの考えがわからない。

怒りでもなく、厳格な表情でもない。

何故か寂しげな顔にしか見えてならない。

「アレン何かあったのか？」

…。アレンは黙秘を続ける。

「アレンくん？」

美穂は くん 付けで呼んでいる。

それからしつこくアレンに話しかけると、どうやら折れてくれたみたいで。

「…思い出したんだ…。」

なにやら話し始めた。

「黒鬼と昔会ったことがあった。」

朱雀と美穂は驚き、顔を見合わせた。

アレンは昔のことを二人に話し始めた。

今から十年近く前のことだ。

俺は 奴隷の檻 という場所に監禁されていた。

何故ここにいるのか。

俺は盗賊に家族を殺されて、売られたんだ。

奴隷の檻 は人が売られる前に入れられる、いわば保管庫だ。

そこであいつに出会った。

入って来たときは心底驚いた。

気品があつて、綺麗な目をしていた。

強い意思を感じる目だ。

彼女はいくら罵られても、誇りは手放さなかった。

気づけば俺は、彼女を毎日見ていた。

どこの貴族か知らないが、正義感のある女だった。

売られてほしくないと思った。

その強い眼光を失ってほしくなかった。

ある日、彼女は買われた。

鎖で繋がれ、歩かなければ顔を殴られた。

そして一言残し彼女は連れて行かれた。

「私は死なない、やり遂げるまで。」

何を意味するのかわからなかった。

やり遂げたいこと…

今思えば、アクア国を憎み、復讐を宣言していたのではないかと…と。

「アレンは黒鬼のこと好きだったのか？」

朱雀は思わず聞いてしまった。

「わからない、だが死んでほしくなかった。」

アレンは悲しい目をする。

「アレンくん、黒鬼さんと戦うの？」

アレンは少し困った様にうなずく。

「俺が止める。あいつを助ける。」

アレンは無表情で答える。

迷いが無くなったかの様に。

アレンは黒鬼が奴隷の檻にいたあの女だから、助けたいと思ったわけではない。

黒鬼を追いかけて、剣を交えているうちに

アレンの心は変化していった。

初めはターゲットとしか思ってたかった。

いつしか黒鬼を本気で救ってやりたくなった。

そして、彼女の傷や過去を支えて、生きたいと思うようになった。
「アレン、そう思う気持ちが愛情なんだ。守りたいと思ったらもうそれは、好きなんだ。」

朱雀は言い切った。

自分自身、そうなのだから。

「そうか。」

淡々と言い返すと、アレンは歩き出した。

「さっさと行くぞ、妙な噂が立っている館があるんだ。」

「ああ、行こう。」

朱雀たちはアレンと黒鬼の関係を知り、そして歩き出す。
日向を助けるために、黒鬼を救うために。

そして

アレンは初めて
愛を知った。

敵意は愛情へ（後書き）

プロフィール

朱雀 18歳

身長 170cm

目の色 ブラック

髪 紺青で長め

身分 アクア国第15隊

隊員

誠実で正義感のある青年。

何でも一人で背負ってしまいがち。

美穂に忠誠を誓ったが、恋愛感情に発展していった。

ゴーストタウン

誰もいなければ、家の明かり一つない。

朱雀たちは噂で聞いた、怪しい屋敷がある町に来たのだが…
町はゴーストタウンと化していた。

「余計怪しいな。」

アレンが呟く。

「ああ、まるで自分の居場所をわざと知らせているみたいだ。」
黒鬼はこの町に誘き寄せた。

何かあるに違いなかった。

「それにしても、町の人たちはいったい何処へ？」

これは美穂だ。

「犠牲になつてないといいが…。」

アレンはそう言うと顔をしかめた。

悪臭がする

朱雀も気づき、辺りを見回す。

美穂は何の臭いかと、不安そうにしていた。

アレンと朱雀は臭いの正体が直ぐにわかった。

町中に充満する、この腐敗臭。

死体の臭いだ…。

それもかなりの数で流血が酷いらしく、血の臭いも吐きそうな程する。

朱雀は美穂を抱き上げた。

「少しの間、目をつぶっていてくれ。」

美穂は目をつぶり、朱雀の服をギュツと掴んだ。美穂にその光景を見せるわけにはいかなかった。

朱雀とアレンが歩いていると、予想の通り死体があった。あちこちに散乱していて、どれも喉を掻き切られていた。そして茶色い地面を紅く染め上げている。

朱雀でも何度も吐きそうになるのだ、美穂とてもじゃないけど見せられない。

美穂も何が起こっているのかわかってきたらしく、震えていた。見えなくても大体の想像は臭いからしてつく。血生臭い臭いはやはりごまかせない。

「しっかりしろ、これはまだ小手調べだ。黒鬼は俺たちのツボを探ってるんだ。」

アレンは何とももないのだろうか？
いつもと変わらない。

「ツボって…？」
朱雀は弱々しく聞いた。

「黒鬼は俺たちの心が壊れるツボを探して、いろんなものをちらつかせてくる。」

人の心の弱み。

黒鬼はそこにつけこもうとしている。

アレンの言いたいことは、決して相手に弱みを見せるな。そういうことなのだ。

「だが美穂には無理だ、昔から人が死ぬとか嫌いだから…。」
美穂の弱みを握られることを意味していた。

「その女はそれでいい、泣き崩れて動けなくなったら一巻の終わりだ。」

それもそうか…。

朱雀はうなづく。

「問題は女を守る俺たちの心が、正常に保てなければいけないということだ。」

朱雀やアレンが膝をつき、動けなくなったらそれこそ何の抵抗もできずに死ぬ ことになってしまう。

「気をつける。」

そう言った朱雀の頬を冷や汗がたつた。

正直、自信がない。

この先もつと残虐な現場に鉢合わせすると思うと、自信がなくなる。朱雀も良くできた誠実な青年だが、人間だ。

怖いものは一つや二つある。

誠実だからこそ、人が死ぬ現場には恐怖を覚える。

騎士団にいた時もそうだ。

戦争や紛争に騎士団も、勿論参戦せざるを得ない。

皆人の首を取り、殺す。

戦いで当たり前のこと。

しかし、朱雀にはできなかった。

生き抜く為に皆人を殺す中、朱雀だけはそうしようとしなない。

人が人を裁けるのか。

殺していいのか。

相手の命を奪う権利など無いだろう。

人の命は儂いものだ。

その人の人生や家族を取り上げてまで、戦かわなければいけないものだろうか？

そこまでして、戦争はしなければいけないのか…。

朱雀はそう思うと始末なんてできなかった。

微かに心揺れ動いた朱雀を、アレンは見逃さなかった。

「足手まといにならなければいい。」

アレンはそう言うだけだった。

彼なりに気をつかってくれているように見えた。

「朱雀大丈夫？私歩けるよ？」

美穂は目を開けて朱雀を見つめる。

「大丈夫、もう少しこうしていてくれないか？」

朱雀は美穂の目を手で覆い、再びつぶらせる。

そっだ、しっかりしなければ。

美穂が心配する。

朱雀がそう思ったそのとき、アレンの声が響いた。

「伏せろ！」

とっさに美穂をかばいながら伏せる。

鎌鼬：！

ビュンと音が鳴り、朱雀の後ろにあった木が真っ二つになった。

「走れ、物陰に隠れるぞ！」

アレンの後を朱雀はついて走る。

走っている間でも、周りの木や建物は切り刻まれている。

幸い朱雀たちは当たらずに、突破することができた。

物陰に隠れながら、アレンは呟いた。

「あいつは全然本気じゃない…。」

ええっ！

驚く朱雀にアレンは当然だというような口振りだ。

「黒鬼は一度に五つの魔術を発動、そして操れる。」

背筋がゾツとする。

こんな話聞いたことがない。
現に城の神官でも最高三つだと聞いている。
人間技じゃない…。

「でも例えできたとしても、体にかんりの負担がかかるんじゃないのか？」

集中力や体力がもつとは考えにくかった。

「あいつの場合例外だな。普通の人間ではなくなっから、体もそれに対応できるようになっただろう。」

アレンは冷静に分析している。

よく平常心を保ってられるなと朱雀は感心した。

会話できているが、このときも黒鬼の魔術は発動していた。

町に爆音が響いていた。

見つかっていないらしく、向こうの方で音がしていた。

その間、少し話すことができたのだが…。

とうとう見つかってしまったらしい。

狭い路地に隠れていたが、爆風で引きずり出されてしまった。

そこに人影が現れる。

黒鬼…か…？

朱雀は顔を上げた。

黒鬼ではなかった。

そして複数いた。

そいつらは鎌や鉈を持ってゆらゆらと近づいてくる。

この町の住民だ…！

よく見ると目に光はなく、血の気もない。
死人だ…。

それもかなり前に亡くなっている。
腐敗して、骨が所々見えていた。

そいつらは走り出して、襲ってきた！

朱雀は美穂をしっかりと抱えながら、攻撃をかわす。

いきなり動きが激しくなったのを感じて、美穂が叫んだ。

「朱雀何かあったの?!」

「よく掴まってくれ。」

朱雀はそれだけ言うと、無言になる。

美穂は心配になったが、目を開ける勇気がなかった。

朱雀は襲いかかる敵を次々に倒していく。

アレンは余裕の表情だ。

「黒鬼はこんな攻撃を仕掛けてどうしようというんだ?」

朱雀はなぎ倒しながら言う。

「俺たちの力量を計っているのかもな。」

アレンはチツと舌打ちをした。

「どんどん敵はわいてくる。」

今は余裕の朱雀たちも、疲れは溜まる。

一々相手をしていれば動きが鈍くなり、斬られるだろう。

「アレン、一回引くぞ!」

朱雀はひとまず逃げた方がいいと判断した。

「ああ、でも逃げる場所なんて無いぞ?」

前には敵、後ろは建物。

囲まれていた。

「後ろの建物を飛び越よう!」

アレンは建物を見て、顔をしかめた。
少し高すぎる。

いくら長身のアレンでも、飛び越えられないかもしれないかもしれなかった。

「俺が技で爆風を起こすから、タイミングよく風に乗ってくれ！」

朱雀はそう言って、技を発動させる。

爆風が起こった瞬間、アレンは飛んだ。

アレンの体は風に押し上げられ、飛び上がっていく。

無事に建物の上に着地できた。

朱雀も同じように飛び上がる。

しかし、あと少しというところで急降下していく…！

（やっぱり二人は無理か…！）

朱雀は差し伸べられたアレンの手を掴もうとしたが、間に合わず落ちていく。

「キヤーー！」

美穂は朱雀にしがみつく。

（くそっ！飛べ、飛んでくれ…！）

朱雀は手を伸ばし、心の中で叫んだ。

フワッ

朱雀の体は浮かんでいた。

風にそっと持ち上げられるように。

そして着地できた。

下を見ると敵が蠢いて、波のようになっている。

「お前魔術を使えるのか？」

アレンに聞かれて首を横に振る。

「使えない…はずだけど…？」

朱雀も今まで感じたことのない感覚だった。

アレンは魔術から出る独特な空気のようなものを、感じたような気がした。

しかし朱雀に魔術を使った形跡もなく、深く追求しなかった。

「黒鬼の居場所を探すぞ。」

朱雀と美穂はうなずき、美穂は目を開けた。

「美穂……？」

朱雀は離れる美穂を見た。

「頑張るって、決めたんだもん。」

美穂はうなずいた。

朱雀たちは走り出した。

黒鬼の元へ。

そう、罪を犯しながら苦しむ彼女の元へ。

ゴーストタウン（後書き）

プロフィール

日向 17歳

身長 160cm

目の色 赤茶

髪 オレンジで毛先に

いくほど赤

身分 妖狐

天真爛漫で能天気、意味通りとにかく明るい。

無神経な発言が玉に瑕。

なんだかんだで、中間思いのいい奴。

by 黒穂。

アジトへ(前書き)

やっと書けました。

バトルに入ってきて、どう表現していいのが難しいです。

ちゃんと伝わってますかね？

わかりにくかったらごめんなさい…！

アジトへ

吹き荒れる風、飛び交う炎。

転げそうになりながらも、美穂は朱雀に手を引かれ走る。怖くないと言え、大分嘘になるだろう。

美穂の目尻に涙が溜まる。

できれば逃げ出したい。

でもこれは自分の問題なのだ。

本来は朱雀を巻き込まず、自分でケリをつけなきゃいけないこと。優しい朱雀はそれを手伝ってくれているのだ。

そう思うと美穂は残酷な運命も自分で見て、自分の足で歩かなければいけない気がした。

「美穂、いけるか？」

時々朱雀はそう気づかってくれる。

美穂はうなずくことしかできない。

朱雀の優しさが胸を締め付けた。

大きな橋にたどり着き、渡ろうとしたときだった。

ゴゴゴ...

そんな音がして、後ろを振り返る。

橋が崩れてきていた！

みんな全力で走る。

アレンは先頭を走っていた。

朱雀も走りの早さでは自信があったが、美穂がいる。

彼女に合わせて走る。

崩れていく石の橋。

もう少しで渡りきるところで美穂の足下が崩れ、転落してし

まった。

朱雀は美穂を間一髪のところまで掴んだ。

アレンが駆け寄り、美穂と落ちそうな朱雀を引き上げる。

なんとかここは突破できた。

でも、術者が見つからなければ無意味なことだ。

「何処にいるっていうんだ！」

朱雀は腹立たしくて叫んでしまっていた。

アレンはハアと呆れたようにため息をついた。

「じゃあ、お前が囿になれ。」

……
なんで？

「何でそうなる！？アレン、説明は最初から最後までした方がいいぞ……？」

アレンは面倒くさいと言いながらも、説明した。

「俺は魔力の流れを少しだが、感じる事ができる。だから攻撃がお前に集中している間に、魔力の流れを追ってあいつの居場所を探し当てる。」
なるほど。

朱雀はアレンの言いたいことがわかり、すっきりした。

「わかったよ、俺が囿になる。」

朱雀は立ち去ろうとした。

「あの朱雀、私もその……何でもない。」

美穂は何か言おうとしたが、うつむいて黙りこんだ。

朱雀は美穂の頭にポンと手を置き、行ってしまった。

アレンは美穂を引き寄せると、走りだした。

「アレンくん、わかる？」

美穂の言葉にアレンはイラついた。

「まだわかん。」

アレンは怒鳴ることはなかったが、目が苛立っていた。なかなか魔力の流れを感じる事ができないからだ。アレンは美穂に当たってしまったことに、少し後悔した。

一方、朱雀はなるべく目立ちやすい場所へ移動していた。アレンが集中して探せるようにしなければならぬ。だから自分を狙ってくれなくては困る。

朱雀は飛び上がった。

予想通り、朱雀目掛けて魔術が飛んでくる。

次々と攻撃をかわす。

空中戦なら得意だ。

でも、それだけではなかった。

体が微かに浮いているような気がする。

気のせいだと思いが……。

そんな考えを振り切り、集中する。

朱雀は建物の上に着地し、剣を抜く。

そして火の玉を両断する。

うまく気を引けたみたいで、どんどん火の玉が飛んでくる。

後はアレンが探したすまで、持ちこたえるだけだ。

アレンは集中させる、肌で魔力の流れを感じる。

その顔が怖くて美穂は固まっていた。

元々無愛想で、目付きが鋭いアレンが眉間にしわをよせていたからだ。

「アレンくん。」

アレンは無視する。

「黒鬼さんのこと好き？」

美穂は沈黙を破りたくて、こんなことを口走っていた。

アレンは思わず吹き出した。

「馬鹿、何を言い出すかと思えば。……そんな単純な感情でない。」

首をかしげる美穂をよそに、アレンはまた集中した。

黒鬼の姿を思い浮かべる。

見えた。

アレンは朱雀に合図を送ろうと、

光の玉を空に放った。

朱雀はアレンの合図に気づき、合流する。

「無事だったか。」

そう言ったアレンに当たり前だ、朱雀は笑った。アレンは煙幕を使い、少しの間時間稼ぎする。

その間に黒鬼の元へ急ぐ。

たどり着いたのは一際大きい屋敷だった。

「ここがアジト……。」

屋敷は大きかったが、思ったより古びていた。

この町はかなり前に占領されたのだろうか？

よく見るとこの町の建物はボロボロだ。

今まで逃げることに集中していたせいか、気づかなかった。

「ここに黒鬼さんが……。」

美穂は朱雀の服を掴んだ。

複雑な心中だった。

覚えていない姉がこうして人を殺し、自分を憎んでいる。記憶がない今の美穂には検討がつかず、まるで他人の問題を見るようだった。

朱雀は美穂と目を合わせてうなずいた。

「何も心配しなくていい、俺もアレンもついてるから。」
そう言つてまた前を向く。

美穂は自然に笑っていた。

目の前には大きな扉。

朱雀が開けようと、扉に手をかけた。

すると押してもないのに、扉はギィィと鳴って開いた。

まるで入つて来いと言っているかのように。

扉が開くと、一瞬、中から風が押し寄せた。

美穂はただ風に驚くだけだったが、朱雀とアレンは敏感に反応した。

殺気だ。

黒鬼は本気で朱雀たちを殺そうとしている。

魔術船の中で戦った時より、遥かに強いだろう。

朱雀はゾツとしたが、これ以上考えるのを止めた。

腕が落とされようと、足が刎ねられようと、命尽きるまで戦い抜く。

それで良いではないか。

朱雀は一步踏み出していた。

そして黒鬼との戦いが始まった。

アジトへ（後書き）

プロフィール

アレン 20歳

身長 約188cm

目の色 薄い青

髪 白髪で長い髪を

一つに束ねている

身分 鬼狩り

口数が少なく、無愛想。

少年期は奴隷として売られていたが、カムレイ家の令嬢アスカに買われ、良き相棒に。

クロサスを黒鬼と呼び、追っていくうちに愛情が芽生える。
愛情が恋なのかは不明。

プロフィールまだ少し続きます。

by 黒穂。

アジト内部

「ひゃっ!?!」

美穂の声が響く。

暗い屋敷内ではあまり見えない。

美穂の頭には蜘蛛の巣がついていた。

朱雀はそれを取って美穂に見せた。

「ただの蜘蛛の巣。」

美穂はハァーと安心した様に息を吐く。

「何だ、蜘蛛の巣かあ。」

美穂が怖がるのは不思議じゃなかった。

何故なら、屋敷は古びていて今にもゾンビが飛び出してきそうだ。

日向がここにいれば、きつと泣いていただろう。

想像してしまい、朱雀は肩を震わせて笑った。

日向は大の幽霊嫌いなのだ!

妖狐のくせに幽霊が怖いなんて、なんとも笑える話だ。

美穂の記憶が無くなる前、そんな日向を見て二人で笑ったことを朱雀は思い出した。

そして寂しくなる。

美穂にはそんな思い出は一切残ってない。

昔の話をして、あんなことがあった、こんなことがあった。

そんな会話はもう出来ないのだ。

寂しいと思うが、彼女が生きていてくれるだけで朱雀は良かった。

美穂が朱雀に抱きついてきた。

「...どうした?」

朱雀の言葉も届いていないかのように、震えている。

アレンは奥の階段を睨み付けている。

アレンは奥の階段を睨み付けている。

アレンは奥の階段を睨み付けている。

ウー…

朱雀にも聞こえた、唸る声。
ギシギシと階段から何かが降りてくる。

ウー…ウー…

唸る声は次第に近づいてくる。

足を引きずりながらそれは姿を現した。
目が赤く染まり、顔には血の気がない。

人間 だったものだ。

「本当にゾンビか?!」

朱雀は構える。

「黒鬼の血を飲まされている、それも大量に。」
アレンは剣を抜いた。

「つまり黒鬼のしもべ。いや、それ以下だ。」

アレンは来るぞと朱雀に目配りする。

朱雀は足を引きずるそれを見た。

黒鬼の道具…。

気が引けるが、相手はもう人じゃない。

朱雀は刃をそれに向けた。

美穂は朱雀の腕にしがみついていた。

朱雀も美穂の肩を掴み、襲ってくるのに備える。

相手は足を引きずっている。

攻撃速度はそんなに早くないだろう。

そう予測した瞬間、猛スピードで突進してきた!

朱雀は紙一重でよけた。

アレンはすかさず敵の背後を取った。

「油断するな。鬼の血を飲んだんだ、人間の常識は通用しない。」

アレンは振りかぶった。

敵はサツとかわし、また足を引きずる動作をする。その間に朱雀は衝撃波を敵に当てた。

敵は倒れて動かなくなった。

しかし、まだ生きている。

それもその筈、朱雀は手を抜いたのだ。

アレンは敵を冷やかな目で見下ろす。

そして、朱雀が止めには入るのを振り切って首を落とした。

「アレンそこまでしなくても…！」

朱雀の言葉にアレンは、さっきの敵を見るような目で朱雀を見た。

「馬鹿か？お前は。甘いんだ、敵を殺さないという考えが。」

「でも！」

言った朱雀の首元に刃を向ける。

「綺麗事だ。お前みたいな奴はいつか死ぬぞ！」

パシッ

アレンの頬が少し赤くなった。

「何だ女、お前には関係ないことだ。」

アレンは美穂に殴られたのだ。

「それ以上、朱雀を馬鹿にしなないで！」

アレンは舌打ちする。

「俺は忠告したまてだ。」

「何もかも忘れてしまった私を見捨てずに、友達って言うてくれた。そんな優しい朱雀がいい！人を殺してほしくない…！」

美穂はアレンを睨み付けた。

諦めたようにアレンは背を向ける。

「行くぞ、またあんなのが出てきてはたまらん。」

アレンは歩き出した。

「美穂、ごめん。」

美穂はうつん、と首を横に振った。

「アレンの言っていることも正しい。」

「何で？人を殺すことが正しいの…？」

朱雀が何故そんなことを言うのかわからず、困惑する。

朱雀は何も言わなくなった。

朱雀はジートのことを考えていた。

失踪事件の時、殺しておけば良かったか？

ジートは狂っていた。

人々に何もしないという保証はない。

もし、人を殺しているなら…自分のせいだ。

険悪な空気が漂っていた。

沈黙を打ち破ったのは 悪臭だった。

「この臭い…死体か。」

アレンが言つと美穂は朱雀の後ろに隠れる。

扉の向こうに死体がある。

「アレン違う所を通らないか？」

朱雀は美穂を気づかかって言った。アレンは朱雀を、小馬鹿にしたように笑う。

「俺は 殺気がない場所 を通ってきたんだ、気づかなかったのか？だから、この部屋を通るのが一番安全だ。」

朱雀が反論しようとしたとき、美穂が前へ歩み出た。

「わ、私は大丈夫。頑張れる、よ…。」

そして震える手は扉を引いた。

美穂が扉を開けると、メイドと執事らしき人がいた。

変わり果てた姿で

美穂は目を見開いて、ガタガタと全身震わした。朱雀は美穂の目をふさいだ。

目から涙が溢れていて、息が荒い。

しばらくして美穂は落ち着きを取り戻した。

「もう…大丈夫。」

目をふさいでいる朱雀のてを退けた。

もう一度現状を見て、れそうになった美穂を朱雀は支える。

「準備はいいか？」

朱雀はアレンを睨んだが、美穂は

「はい。」

と返事をした。

彼女は強くなるうと、もがいている様に見えた。

変わりたいと思うその気持ちも勇気なんだよ。

そう思った朱雀の心は暖かくなった。

一番立派な扉の前に立つ。

扉の向こうで殺気が渦巻いている。

この扉の向こうにきつと黒鬼はいるのだろう。

勢いよく扉を開ける。

そこには玉座に足を組んで腰かけ、そして笑う

黒鬼がいた。

アジト内部（後書き）

プロフィール

アスカ 22歳

身長 165cm

目の色 オレンジ

髪 二つにくくり、

赤毛。

身分 魔術船の国家

パイロット

カムレイ家のご令嬢で、アレンを奴隷の檻から救い出した張本人。
妹アヤカとアスカは双子。

黒血の鬼

「やっと来たか。」

低声で話し始める。

「日向は無事か?!」

朱雀は怒鳴った。

「そう怒るな、無事だ。」

黒鬼がパチンと指を鳴らした。

するとスーッと日向が映し出された。

ロープで縛られていて、ぐったりしていた。

「日向に何をしたの?!」

美穂が映像を見ながら言った。

「うるさいから黙らせたまでだ。」

そう言うと日向の映像を消した。

「黒鬼…。」

これはアレンだ。

「お前は…鬼狩りか、死に損なったくせにこのこと。」

黒鬼が剣を抜いた。

アレンと朱雀も剣を抜いて構える。

「まずは男二人からだ、皇女は後でゆっくり殺してやるぞ。」

そう言ったと思ったら、黒鬼の姿が消えた。

「くそっ!このままじゃ…!」

朱雀がそう言うと、アレンが呟いた。

「朱雀、黒鬼には癖がある。首を落とす瞬間、敵の背後でもう一度ステップを踏む。」

ステップ?

そのまま斬りかかればいいものを、無駄な動きだ。

(とにかく注意して聞いてみよう。)

朱雀は目をつぶった。

ヒュッヒュッと風の音がする。

その時だった。

タンッ タンッ

ステップ!

「そこだ!」

朱雀は振り向き剣を振った。

ギンッ

刃と刃が交わり、そして押し合う。

「! 貴様ア...!」

黒鬼は剣を止められたことに、かなり苛立っていた。

アレンは何故こんなことを、知っているのだろうか...?

もし死に損ないなら、黒鬼に手も足も出なかったはず。

アレンは弱くて負けたんじゃない。

(今まで手を抜いていたんだ...。)

もしくは知らず知らずのうちに。

朱雀は黒鬼を押し返してアレンを見た。

「アレン、お前...。戦えるのか?」

少しキツイ口調で言う。

「...?ああ。」

わかってなさそうな顔をして答えた。

次手を抜く素振りを見せたら、本気で殴ってやるぞ。
朱雀は密かに思い、そして次の攻撃に備えた。

美穂は朱雀が黒鬼を引き付けて入る隙に、日向の居場所を探していた。

早く助けて応急処置をしないと、映像の日向は血を流していた。

朱雀たちは心配だが、日向も心配だ。

部屋のあちこちを探す。

「何かしら…？」

美穂が見つけたのは倉庫のような部屋だった。
恐る恐る中に入る。

こつこつ所に監禁されている可能性が高い。

予想通り、日向は倒れていた。

「日向！」

美穂は駆け寄って、傷の具合を見る。

頭を打ち付けたのか、血を流している。

美穂はアスカが持たせてくれた、応急処置用の瓶を取り出して日向に飲ませた。

「う…美穂…？」

傷はふさがり、意識も取り戻した。

「良かった、酷い傷じゃなくて…！」

美穂は抱きついた。

「私は大丈夫よ。それより、朱雀たちの所に連れてって。」

日向は立ち上がり、ふさがった傷口を手で確認した。

「怪我してるのに大丈夫なの？」

日向はうなずいて、少し体を動かした。「平気よ、朱雀を助けなきゃね！」

日向と美穂は朱雀たちがいる部屋に向かった。

「大丈夫かな朱雀とアレンくん。」

「行ってみればわかるわよ。黒鬼にこの傷のお礼をしなきゃね…。」
日向は怒っているようで、目をキラつかせている。

「この部屋？」

日向は扉を指差す。

「うん。」

「…じゃあ。」

その声と共に日向は扉を蹴破った。

「さっきはよくもフルボコにしてくれたわね！

…？」日向は膝

をつく朱雀とアレンの姿を見た。

「マジでやられてんじゃん…！？」

日向を見た黒鬼は飛び掛かってきた！

バンツ！

と音が鳴り、日向は蹴り飛ばされていた。

「人質がウロウロするんじゃない。」

黒鬼は静かに言ったがかなり苛ついていた。

「いったくい！何すんのよ！」

日向は無事なようだった。

「日向！」

美穂は日向に近づく黒鬼の前に立った。

「退け。」

「嫌…！」

美穂は引かない。

「退けと言っている…聞こえないのか！」

黒鬼は美穂の首に手を掛けていた！

朱雀とアレンは黒鬼に斬りかかる。

黒鬼は手をかざし、何か呟いた。

朱雀とアレンは壁に叩きつけられる。

倒れて込みそうになったが、それもできなかった。

アレンは足を氷漬けにされて動けなくなっていた。

朱雀は手を氷で固定され、最悪なことに剣を落としてしまった！

「魔術か…。」

朱雀は手を壁から外そうと、グツと力を入れた。

鋭い氷の刃が動かす度に、刃物で切った時のような切傷を作った。無理に氷を壊そうと力をすれば、腕を落としかねない。

日向も駆けつけようとするものの、黒鬼に氷漬けにされてしまう。

そうしてる間にも美穂は黒鬼に攻め寄られていた。

「何で私がお前を憎んでいるか分かるか…？」

美穂は結晶を作り出し壁を作った。

しかしそれは、直ぐに壊されてしまう。

「そうだ、それだ。」

黒鬼は粉々になった結晶を指差した。

「これが何…？」

美穂は間合いを取りながら、黒鬼を見る。

「私にはそれが使えない、何故だか分かるか？」

知らない と美穂は首を振った。

「私の父親とお前の父親が違うからだ…！」

「そんな話聞いたことがない！」

朱雀が反論する。

アクア国の歴史を完璧に記憶している朱雀にも、聞いたことのない話だった。

「誰も話すわけなからう、アクア族に汚れた歴史があるなど。」

黒鬼は唇を噛んだ。

血が滴り落ちる程強く。

驚くことに、黒鬼の血は黒かった。

「人を殺すまでに飽きたらず、人を食ったか…。」
アレンの言葉に朱雀は衝撃を受けた。

「食べたのか人を…!?!」

黒鬼はユラリと朱雀の方へ振り向いた。

「……とんだ化け物だろ？ 私は。」

黒鬼はそう言つて笑つた。

とても辛そうに。

「黒鬼、もうこんなこと止めないか？」

朱雀は言つた、優しい口調で。

「止められるわけなかるう！私はこの日の為だけに、今まで生きてきた…!」

黒鬼から再び殺気の渦が巻き起こる。

そして美穂の肩を掴み、壁に押し付けた！

「直ぐ死ね！今死ね！お前が邪魔だああ…!」

黒鬼の力は明らかに暴走していた。

黒鬼から発せられた何かが朱雀たちを包み込み、頭の中で鮮やかな映像を見せた。

黒血の鬼（後書き）

こんにちは！

お久しぶりです。

黒鬼編はもう少し続きます。

楽しんでもらえれば幸いです。

それでは、次の機会に〜。

b y 黒穂。

追憶の記憶

それは追憶の記憶

「残念なことに、クロサス様にブイオ神の力は宿っていません。」
この事実がわかったのは、クロサスが7歳になった頃だった。
この頃になると徐々に力を使う練習をする。
クロサスは力を受け継いでいなかったのだ。
アクア国は代々皇女しか生まれず、結婚相手はブイオの加護を受け
た者しかいけなかった。
ブイオの加護。
要するにブイオに選ばれし者だ。

アクア国の皇女と、ブイオの加護を受けし者。
その二人の子が力を授かることができる。

しかし、クロサスは力を授かることはなかった。
クロサスは母が他の男と交際して、できた子供なのだ。
当然美穂も疑われたが、美穂は力を授かっていた。

「サラ様！どういうことですかな！？」

クロサスと美穂の母サラは、城の者から罵声を浴びせられていた。

「……誰との子でも、私の子供に間違いありません！」
クロサスを抱き抱え、サラは叫んだ。

「汚らわしい…！こんなこと、前代未聞だ！」

「私はやましいことはしてません！私は本気で愛していたのです…
！」

母が何故泣き叫ぶのかわからず、クロサスは震えた。

そうしているうちに、処分が決まった。

現皇女サラは、城に幽閉。

クロススは永久追放に決まった。

「お姉ちゃん、どうしたの？」

何も知らない美穂はいつもと変わらなかった。

「もうマリリンに会えなくなっちゃう。」

クロススは呟いた。

「どうして？」

「どうしても。」

幼い美穂はふうふうと言つて立ち去つた。

クロススにもよくわからない事を、美穂にわかる訳がない。

わかっている妹がうらやましかつた。

何で自分だけこんな目にあわなければならぬのか、それは次第に憎しみに変わつていった。

いつだってそうだ。

クロススが皇女にならなければいけないと、辛い英才教育を受けている時、美穂は次女だから、そこまで教育を受けなかった。

男に負けてはいけない。

城の者は毎日クロススにそう言い聞かせた。

止めてくれ…！

もうたくさんだ！

クロススは毎日頭を抱えて眠り、悪夢によつて起こされる。

そんな毎日が続いた時、こんな事態だ。

心が弱っていたクロススは、誰かを恨まずにはいられなかった。

「永久追放か…。」

母親に会えないのは寂しいが、第一皇女として生きることなくなる。

苦痛が解放される。

クロススは幼いながらこんなことを考えた。

7歳の少女がこんな大人びた事を言うなんて、庶民から見ればおかしいかもしれない。

しかし、ここは城。

そして自分は王族。

当たり前なのだ。

王族の子供はさつさと、幼い頃に自立させられる。

寂しい話だ。

親に甘えることもできないなんて。

クロススはため息をついて支度をする。

今使っているこの部屋を、妹に明け渡さないといけないからだ。

今度はクロススの代わりに、美穂が皇女になるからだ。

「支度はできたのか?!」

怒鳴り声。

これは大臣のジエドルドだ。

こいつはつくづく嫌な男だ。

出世のことしか頭に無い。

クロススたちを道具みたいに扱う野郎だ。

「…できました。」

そう返事をする、ジエドルドは乱暴に掴み馬車に乗せた。

「何処へ追放されるんですか…?」

「お前は売られるんだよ。」

顔色一つ変えず、冷たい声で言った。

「売られるって…?」

クロススは寒気がした。

「お前みたいな汚れた奴は家畜以下の生活がお似合いだ。」
ジエドルドは馬車を走らせた。

最後の望みは、母サラが事態に気付いてくれることだった。

その頃城では、騒ぎが起きていた。

事故。

クロサスが乗った馬車が、谷に転落したという報告が届いたのだ。そして皇女サラはショックで寝込んでしまった。

その後も生存確認ができず、クロサスは死亡したとされた。

クロサスは牢獄の中で信じていた。

きつと助けにくると。

毎日虐待の日々、辛かったがそのことを思うと、耐える事ができた。

1年、2年と待っていても助けに来る様子はない。売買される日々。

おかしいと思い始めたとき、事件は起こった。

雪が降り積もる夜。

牢屋で眠るクロサスに人影が近づいていた。

クロサスは足音に起こされた。

（また殴られるのだろうか…。

）

いつものことだ、クロサスはもう怖くなかった。

しかし、今日は変だ。

奴隸主たちは何か持っていた。

それは、拷問に使うような道具だ…。

クロサスは逃げようとした。

が、鎖で遠くまで逃げられない。

押さえつけられ、まず爪を剥がされた。
ギヤツと声を上げたクロサスの腹部や、顔を殴る。

殺される、殺される

殺される！

クロサスは奴隷主を押し退けた。
その際、道具が右目に当たって目から血が流れ出した。
痛みより、恐怖が体を支配する。
奴隷主たちはナイフを出し、殺しに来る。
腕や足を斬られて、追い詰められた。

この時、クロサスは強く願った。

力が欲しい…！

体の中で何かが弾けた。

クロサスはナイフを奪い、次々と腹を裂いていく。
気が狂ったかのように、声を上げながら。

「あ…ああ…」

気が付くと死体が転がっている。

「私が殺した…？」

クロサスはうずくまって泣いた。

「どうして…どうして誰も助けくれなかったの！」
殺したくなかった。

殺したりなんか
殺したりなんか

ほんとはこんなことしたくなかった。

追憶の記憶（後書き）

遅くなりました。

体育祭がありました。疲れはてて、倒れてました。文章がわかりにくければごめんなさい。

では、また頑張ります！

b y 黒穂。

黒鬼

部屋は狂気で満ち溢れていた。

美穂は逃げ回る。

それを追う黒鬼。

朱雀腕は氷を壊そうとし続けたため、血を流していた。

「黒鬼！昔あったことは確かに酷いものだ、だからといって美穂は関係ないだろう！？」

朱雀の言葉に、黒鬼は獣の様に牙を剥いた。

「お前に何がわかる！！アクアの血筋は皆殺しにしてやる！」

「わからないさ」

アレンが口を開いた。

「わからないから、お前のことを知りたい。そう思うんだ。」

「はっ！綺麗事だ！」黒鬼はとうとう美穂を捕らえた。

押し倒し、切っ先を喉元に向ける。

美穂は恐怖で震えていた。

「お前を殺して、アクアの血筋も皆殺す！」

そして振り上げられる剣。

朱雀にはそれがスローモーションで進行しているように見えた。

止める…。

止めてくれ！

美穂を殺さないでくれ！

俺の大切なものを、奪わないでくれ…！

心はそう叫んだ。

振り下ろされる剣。

「止めてくれ！」

朱雀は腕にグツと力を入れて、思いつきり引っ張った！

肉が裂け、骨に当たる。
骨に当たり、やっと氷が壊れた。
そして落ちていた剣を拾い、黒鬼の喉元目掛けて剣を突いた！

一瞬部屋の中の時間が止まったかの様に、静まり返った。

「何故殺さない？」

最初に口を開いたのは、黒鬼だった。

朱雀の剣は、黒鬼の首寸前で止まっていた。

「……。」

答えない朱雀。

「今ので殺せただろ。何で殺さなかった！」

「お前を殺したくない。」

それに、本当のお前と戦いたい。」

本当の黒鬼。

憎しみで突き動かされるのではなく、本来の力で戦いたい。

そう朱雀は黒鬼に言ったのだ。

「……よからう。」

黒鬼は朱雀の申し出を受けた。

彼女の戦士としての誇りが、まだ残っている証拠だった。

「……真剣勝負だ、憎しみの感情は忘れよう。」

だがな、お前のその右手はもう使えまい。」

黒鬼の目が変わった。

黄色い瞳は強い光を宿している。

アレンが言っていた、黒鬼本来の目だ。

「右手は無理でも左手がある。」
朱雀は布で骨まで裂けた傷口を塞いだ。
長期戦は無理だろう。
出血が酷い。
立っでいられるのも、あと少しだ。

互いに剣を構える。

そして一度剣を交える。

これが決闘の挨拶みたいなものだ。

闘技場などでもこうする。

そして二人は一步下がり、もう一度剣を交えた。

今度は全力で！

ぶつかった反動で二人は弾かれる。

力がほぼ互角なことを示していた。

黒鬼は消えた。

だが焦ることはない。

タンッ タンッ

この音が聞こえたら、斬りかかってくる合図だ！

ギンと剣が衝突する。

「お前にもうこれは通用しないか。」

黒鬼はフツと笑った。

「残念ながら。」

朱雀は押し返した。

互角の戦いが続く。

戦いが繰り広げられているとき、アレンたちにも動きがあった。
「こつちへ来い。」

まだ震えが止まらず、座り込んでいた美穂にアレンが声をかけた。
美穂はアレンに近づく。

「お前の結晶でこの氷を壊せ。」

確かに結晶をぶつければ、壊れるかもしれない。
しかし、それは危険だった。

氷が勢いよく弾けて、大怪我しかねない。

「でも…」

その事を考えると、美穂もうなずけない。

「いいから早くしろ。」

俺は大丈夫だ。」

…はい。」

美穂は手を前に出し、力を込める。
空気中の水分が固まり、結晶になった。
それを氷にぶつけた。

パンツと音がして、美穂は目をつぶった。
そろりと目を開けてアレンに駆け寄った。

「アレンくん…!」

アレンの足や顔はズタズタに切り裂かれていた。

「大丈夫だ。」

誰がどう見ても、大丈夫ではない。

「アレンくん、聞いてもいい?」

「うつつうしいら、さっさと言え。」

美穂はアレンの横に座り込んだ。

「どうして黒鬼さんを助けてあげたいって思ったの?」
少し沈黙し、口を開く。

「放っておけなかった、他人事とは思えなくて…。」

美穂はよくわからず、首をかしげた。

(やっぱり難しい。)

そう思うと同時にゴソツと鈍い音が響く。

「朱雀！」

朱雀は壁に押さえつけられていた。

「私が勝ったら、マリンを殺させてもらう。」

黒鬼は力を込めながら言う。

「俺が勝ったら、もうこんなこと止める…！」

朱雀が押し返す。

両者一步も引かず、そしてもう立っているのがやっとだ。

次の一撃で、勝負は決まる。

美穂が止めに入ろうとしたとき、一瞬、二人の姿が見えなくなった。

足を踏み込む早さは黒鬼が上。

早さでは劣るが、技の威力は朱雀も負けてない！

刃が交わり。

そして一方が折れる。

黒鬼の体は弧を描き、地面に倒れ込んだ。

衝撃はいつまで経っても、黒鬼を襲うことはなかった。

「お前…。」

黒鬼の目にはアレンの顔が写っていた。

「お前は負けた。」

黒鬼腕で目を覆った。

「ああ…。」

溢れた涙はまでは隠せない。

「もう頑張らなくていい、勝たなくていいんだ。」

普段あまり話さない彼が、こんなにも話している光景を美穂と日向は見つめる。

「私は間違っていたのかな。」

「確かに人を殺めたのは罪だ。でも、君をそうさせたのは城の奴らだ。」

朱雀が深い傷を負っている腕を押さえながら、近づいてきた。

「お前： どうして私の攻撃を見切れた？」

黒鬼は負けたことが今までなかったから、わかる訳もない。

「攻撃直前のステップ、これでタイミングを計らせてもらった。」

「ステップ…。」

黒鬼はわかってない、無意識にやっていたのだ。

「どつちかの足が悪いんじゃないか？」

朱雀の言葉に黒鬼はアツという顔をした。

アレンに受け止められていた体を起こし、ズボンを捲る。

左足の皮膚は変色していた。

打撲傷の後だ。

「それに、片目だけじゃバランスもあまりとれてないだろ？」

黒鬼の顔にしては大きすぎる眼帯。

頬のあたりまで隠れている。

黒鬼は眼帯も外して見せた。

眼帯をしていた右半分の顔の皮膚がただれている。

目もなかった。

黒鬼はアレンに振り返った。

「醜いだろ？」

「別に。」

アレンは驚くこともしなかった。

少し間が空いて、黒鬼が言う。

「マリン、こちらへ。」

美穂は申し訳なさそうに、黒鬼に近づいた。

黒鬼の顔や足を見て、涙が溢れる。

「何でなくのだ？」

黒鬼は戸惑う、美穂が泣くとは思わなかったから。

「苦しくって…。こんな酷いよ、何で私の お姉ちゃん だけこんな目に合わなきゃいけないの…？」

「マリン…。」

「何にもしてないのに…。私だけ何で今まで、何の痛みなく生きてきたんだろう。」

美穂は黒鬼の古傷に触れた。

「ごめんね、ごめんね…！私、何にもできなくて…。」

「もういい、マリン。もういいんだ。」

黒鬼は美穂を抱き寄せた。

二人は今までの痛みを分かち合うように、泣き続けた。

黒鬼（後書き）

黒鬼編、楽しんでもらえたでしょうか？

これから黒鬼も、アレンたちに支えられながら、しばらくの間魔術船に乗り込みます。

黒鬼の性格、実は可愛いんです。

by 黒穂。

戦争の始まり

眩しい…。

眩しい？

あれ、俺はいつ寝たんだ？

美穂は、黒鬼は、アレンはどうなったんだ…？

「ここは…？」

目を開けると覚えのある天井。

口には酸素マスクがはめられ、点滴を受けている。

右手は…包帯が巻かれていた。

「美穂さん、意識が戻りました！」

白衣を来た男性が美穂を起こす。

美穂はハツとして飛び起き、朱雀の視界へ入ってきた。

「朱雀…。」

「美穂…ずっと居てくれたのか？」

美穂はうなずいて、笑った。

「良かった。」

朱雀は起き上がろうとしたが、体に力が入らない。

「寝てろ。」

「アレン…大丈夫か？」

アレンはドアの所に、松葉杖をついて立っていた。

「お前が言うな。」

朱雀が一番重症だった。

あの後大量出血で倒れたのだ。

命は助かったものの、しばらく安静にしなくてはならなかった。

「日向は…？」

「買い出し。」

「口数少ないな。」

アレンに向かって言う。

「そうか。」

「黒鬼には話せるんだな。」

朱雀は悪気はなかったのだが、アレンは敵を見るような目で朱雀を見つめた。

いや、睨んだ。

「ご、ごめん。」

「別に。」

アレンは見た目は冷静だが、怒っていた。

「静にできんのか、馬鹿者が。」

割って入ってきたのは、黒鬼だった。

「黒鬼…何で…」

ここに？

そう聞きたかったのだが、思い出した。

アレンは鬼狩りで、鬼を保護するのが仕事だったことを。

「私に聞きたいことがあるだろうか？」

ある。

だが、なるべく聞きたくない。

朱雀の中でその答えはある程度出ていた。

自分の検討違いならいい、もし本当だったら？

「美穂にかけられたブイオの呪い、解く方法はあるか…？」

朱雀は世界中の書物を読んだ、しかしそれらしいものは未だ見つからない。

「私の力でやってみよう。」

黒鬼は美穂に手をかざした。

黒鬼が発した光は美穂を包み込んだ。

しかし直ぐに消えてしまう。

「…！」

「どうだ…？」

恐る恐る聞く。

「……駄目だ。完全に体と融合してしまっている。」
つまり、治す術は存在しないのだ。

「じゃあ美穂は……」

朱雀がうつむきながら言う。

「ああ、死なせたくないなら……旅を続けなければならぬ。」

美穂の呪いはブイオの七つの神殿全て行くと、解ける仕組みになっている。

大臣ジエドルドの言ったことは本当だったのだ！

「くそっ！儀式をやつて、

何も無いわけがない……！」

何かあるんだ。

朱雀は陰謀を感じずにはいられなかった。

「たつたいま……！」

そんなとき、日向が帰って来た。

朱雀はどうなったかと心配したが、腕や足に包帯を巻いているだけで、大怪我ではなかった。

「朱雀、あんたに手紙よ。」

日向に手渡された手紙、送り主は……

ノア・ノルオーク

城で動きがあつたら連絡すると言つた、朱雀の友人だ。

名前を見た瞬間、冷や汗がにじみ出る。

きつと悪い知らせだ。

そう思いながら、手紙を読んだ。

朱雀、旅は順調か？ こっちは動きがあつた。

あまり良い動きではない、戦争がまた始まるぞ。

この手紙を見た誰もが凍りついた。

昔、第一次大戦が起こった。

酷いものだったのだ。

その時から、奴隷制度が始まり、今も名残が残っている。

人が人を道具として使い、虐げてきた歴史があった。

虐殺戦争。

「また始まるのか…!？」

朱雀たちは前の戦争は知らない、でも親から聞かされていた。

戦争のことを。

「何…?」

美穂はとても不安そうに言った。

美穂は知らないのだ、記憶を失っているから…。

「…何でもない。」

朱雀はあえて何も言わなかった。

魔族の皇女美穂に政治や軍隊を動かす責任がかかってくるのだが、

今の美穂にはそれらを指揮をする能力はない。

それに、儀式がある。

美穂にこれ以上負担をかけたくはない。

「何でもないんだ。」

「うん…?」

黒鬼がこれでいいのかと、朱雀を見た。

「心配してくれてありがとう。」

「応言っておく。」

「べ、別にお前が心配なんじゃないぞ!」

黒鬼はフンと朱雀から目をそらした。

「照れてる!」

日向がプツと吹き出した。

「何だ?」

と、黒鬼。

「本当のことじゃん」

日向がまた火に油を注いだ。

黒鬼はチツと舌打ちして、もう一度朱雀を見た。

「明日、マリンを連れて神殿に行ってくる。」
「行ってくる？」

「待てよ、俺も行く。」

朱雀が起き上がろうとすると、身体中に激痛が走る。

「だから、私が連れて行ってくる。」

「あたしもいるからダイジョーブ！」

日向、お前の言葉じゃ説得力ないよ。

こんなこと言ったら、日向は必ず言い返してくるので、朱雀は黙って聞いていた。

「信用してくれ、私が殺したいのは大臣らと神官だ。特にジエドルド……！」

怒りの矛先がもう美穂に向いていないことを知って、朱雀はホツとした。

正直、信用できないことは多々ある。

まあ自分を本気で殺しに来た奴が、今は味方なのだから無理もない。

「信じるよ。あと、美穂 っと呼んであげてくれないか？」

「…何故だ？」

黒鬼は不思議そうに聞いた。

「昔言われたんだ、親の七光りみたいで嫌だつて。」

自分自身の力で何事も成し遂げたいと美穂は言ったのだ。

「わかった。美穂。」

そして美穂たちは神殿に行く準備をする。

朱雀はノアから届いた手紙をもう一度見た。

「ノア大丈夫かな……」

ジエドルドにスパイをしているのがバレたら、最悪極刑だ……！

今のジエドルドは殺ってしまうかもしれない。
気が狂ってしまっている。

気が狂う…。

朱雀はジートのことを思い出した。

ジートは何故おかしくなってしまったのだろうか。

心優しい好青年だったのに…。

虫も殺せない様な男が、失踪事件の時、人を殺めたのだ。

それも何人も。

朱雀は嫌な予感がしてならなかった。

嫌な予感を振り切る様に、朱雀はシーツを被り、眠りについた。

魔術船から一キロ離れた日が暮れた町に、影が一つ。

魔術船を見て笑いながら叫んだ。

「やっと見つけたぜ…朱雀…！」

この人物がどう関わり、朱雀たちの運命を狂わすのか。

今はまだ誰も知らない。

戦争の始まり（後書き）

こんにちは。

黒鬼が一時的に仲間に参加し、そしてまた新たに物語は動き出そう
としています。

開戦の報告や朱雀に迫る影…。

頑張って書いていきますので、応援よろしく願います。

by 黒鬼。

現れた影

「大丈夫か？」

黒鬼はおぶさつている美穂に具合を聞いた。

ここは第三のブイオの神殿。

先ほど到着したのだが、美穂は貧血で倒れてしまった。

美穂の体は儀式が全て終わるまで、衰弱し続けるのだ。

「…うん。」

とは言うものの、顔色は優れない。

やはり段々と、健康状態が保てなくなってきたているのだ。

「キヤー！ヤダ〜。」

日向は神殿の暗さに怖がっていた。

この神殿には、先に誰かが来た形跡があり、ロウソクの火も全て水をかけられて消されていた。

「黒鬼〜、明かりいい？」

「…まあいいだろう。私も居ることだし。」

黒鬼はなるべく敵に見つからないようにするため、明かりを灯さずにいたのだが…。

日向の叫び声の方が危険だと判断し、灯すことを許したのだった。

日向は返事を聞いて、即座に呪文を唱えた。

手のひらから、丸い光の球が出てきた。

「ふう〜、これでよし。あたしお化け苦手でああ。」

「あつそ。」

素っ気ない返事が返ってきた。

「…ム力つく。」

日向は怒った、というよりすねた。

美穂は日向と黒鬼の間にある険悪な空気に、居心地の悪さを感じた。
（何で二人とも怖い顔するんだろっ……。）
この先やっていけるか、心配な美穂だった。

その頃、魔術船に残った朱雀は、リハビリを実行している最中だった。

アスカとアレンは、別の鬼狩りの仕事に行っていた。
二人に静に寝てると言われたが、冗談ではない、自分が美穂を守る騎士なのだ。
いつまでも寝ているわけにはいかない。

負傷した右手に、剣を握らせる。
握った途端、手首に痛みを感じて落としてしまう。

「まだ無理か。」
剣を振れるとは最初から思っていない。
どんな程度か試しただけだ。
剣を持つことはできなかったが、走ったりできるぐらい体は回復していた。

痛いのは手首の傷だけ。
さすがに骨まで裂けていて、直ぐには治らない。
他の魔族は治癒術であつという間に、治せただろうが。
朱雀は魔術を受け付けない体質なのだ。

受け付けないといっても、体の外からの魔術攻撃は受けるが、毒属性や幻術などの体の中から弱らせるものや、洗脳するもの、操るものなどは、無効になる。
朱雀本人も全てを把握できないくらい、ややこしいのだ。

そろそろアレンたちが帰って来るので、部屋に戻っておこつと歩き出したとき

「朱雀」

聞き覚えのある声に振り向き、そしてその人物を見て目を見開いた。言葉が出ない。手が震えている。

その人物は笑っている、死んだような目で。

「ジート…！」

ジートはゆっくり近づいて来る。

「久しぶり、朱雀。俺のこと覚えてる？」

忘れるはずない。

お前を止めなかったことに、どれほど後悔したか。

「あ、あ…。」

「喋れなくなつたのかなあ？」

「…ジート、何で…？」

朱雀の肩に手を置いた。

「何で殺した。そう言いたいんだろ？」

決まってる、ブイオ様復活の為だ！」

ジートは剣を抜いた。

「止める、ジート…！友達だろ、俺たち！」

戦いたくなかった。

「お前のそういう所が嫌いなんだよ、朱雀…。」

昔っからそうだよなあ、偽善者！」

「違う！！俺は本当にお前のことを…！」
友達だと思っっているんだ！

朱雀の思いも虚しく、
ジートは剣を振り上げた。

朱雀の体は動かない。
振り下ろそうとしたとき、衝撃波がジートを襲った。

「朱雀君！」

アスカの声。

アレンたちが帰って来たのだ。

さっきの衝撃波はアレンの攻撃だ。

いつの間にか、ジートはまた姿をくらませてしまった。

「朱雀君、朱雀君！何があつたの？」

アスカは放心状態の朱雀の体をゆすった。

「何にも…」

朱雀はやつと口を開いた。

「え？」

「何にもなかった。」

「朱雀君…。」

朱雀はアレンとアスカに背を向けて、部屋に戻ろうとした。

「お前には仲間がいる。」

アレンの声がした。

「それだけ忘れなければいい。」

朱雀はアレンの言葉を聞くと、部屋に戻った。

ありがとう。

その言葉ぐらいアレンに言えば良かったと、少し後悔した。
それにしても

「偽善者、か。」
心が痛む。

友達からそんなふうに、思われていたなんて…。

ハッと気がつけば、もう日が暮れていた。

あのまま寝てしまっていたのだ。

美穂は無事、儀式を終えただろうか？

心配で部屋から出ようとしたが、笑顔でいられる自信がない。
美穂を困らせてしまつかもしれない。

そんなことを考えていると、ノックの音がした。

「朱雀？」

美穂の声だ。

「…儀式無事終わったんだね、体の具合はどう？」
ドアを開けずに返事をする。

「平気。それより何かあった？」

「何で？」

朱雀は聞いた。

「アレン君に今日あったことを聞いた。」

アレンの奴、言いやがった！

朱雀はため息をついた。

「襲われるなんて…どうしたの？」

美穂に聞かれると、全てを話してしまいたくなる。

「友達に…偽善者だって言われた。」

「朱雀…？」

朱雀はポツリ、ポツリと話し始めた。

「そいつ…気が弱くて、ドジばかりして。」

騎士団長にいつも怒られてる様な奴だった。」

「うん。」

「俺はそんなそいつを、放っておけなくて世話をやいていた。」
「…うん。」

美穂は何も言わず聞いていてくれた。

「偽善者って思ってたなんて、知らなかった…。
俺は…そうなのかな？」

ただ自分に酔っていたかっただけなのかな…？
言い終わると、朱雀は何も言わなくなった。

「朱雀。大丈夫だよ、友達にはきつと届いてるよ。
朱雀の気持ち。」

それから自分を嫌いにならないで？

私はそんな朱雀が大好きだから…。」

美穂がそう言い終わると、ドアが開いて
朱雀が出てきた。

「ありがとう。」

ちゃんとこの言葉を言う為に。

「うん、どういたしまして。」

すると何か思い出した様に、美穂が話し出した。

「あのね、明日付き合っしてほしいの。」

「うん、いいけど。」

美穂の目が輝いた。

「ありがとう！」

シートに会った時、怖かった。

心が冷たく、鋭いもので刺された感覚に陥った。

しかし君の声を聞いただけで、暖かくなっていった。

また君に救われた。

現れた影（後書き）

こんにちは。

友達関係は難しいですね。

私は恋愛をしたことないので、友達関係よりも恋愛関係の方が、難しいです。

小説ばかり読む人なので。

小説と言えば…

皆様はどんな感じの小説を、好んで読んでますか？

私はやっぱりファンタジーですね

デートで

とある町。

朱雀と美穂は来ていた。

小さな町で、アクア国城下町より活気もない。

でも美穂はそれでも良かった。

見たことのないものが、美穂にはまだまだたくさんあった。
新鮮な気分。

朱雀と一緒にというのが一番嬉しい。

黒鬼との戦いで倒れた時、死んでしまったのかと思った。

彼は生きて、また自分に笑ってくれた。

それだけで幸せなのだ。

「好きなのかな」

朱雀のこと…。

「ん、何が？」

美穂は口に出してしまっていた。

「私！ままま、町にい、行くの好きなのかなって！」

焦って自分でも何を言っているのか、わからなくなっていた。

「多分好きだよ、美穂は。ずっとお城育ちだったから。」

朱雀は笑わずにちゃんと答えてくれた。

「だからこんなに楽しいのね。」

心の中でホッと息をついた。

「朱雀この店見たいから、ちょっと待っていてくれる？」

美穂が指差したのは、女の子が着る洋服や、靴などを置いている店
だった。

「うん、待ってるよ。」

さすがに一緒に入るわけにもいかず、朱雀は待つことにした。

「美穂も普通の女の子だな。」

微笑ましく、そして嬉しかった。

店に入って、自分で自分の好きなものを買う。

そんな当たり前のことを、させてあげたいと朱雀は騎士団に居た頃から思っていた。

王族の身の回りのものは、全て家来が揃えるのだ。

つまらないではないか、そんな生活。

だから良かったと思う。

この旅も辛いことばかりではない。

こんな時代だからこそ、ほんの当たり前のことが凄く幸せに感じる。

「朱雀お待たせ。」

紙袋を抱えて、店から出てきた。

「何買ったの？」

「えっと、着替え。旅してるとすぐ汚れちゃうから。」

そういえば。

朱雀は自分の服を見た。

「…。」

あ、後で美穂に服を選ぶのを手伝ってもらおう。

すっかり忘れていた、自分の容姿のことを…。

コートを羽織っているので町人たちは気づかないが、問題はその下。

ポロポロの血塗れだ…！

アレンが羽織って行けと言った訳がわかった。

口数少な過ぎる！

服が見れたもんじゃないことを教えてくれ…！

「わーん！」

朱雀は誰かの泣き声にハツとした。

風船が木に引つかかっていた。

そして、美穂が木に登ろうとしていた！

「わあー！？」

朱雀は大声を出しながら、駆け寄る。

「美穂、何やっているんだ！俺が取ってあげるから！」

美穂は枝に足をかけて、手を伸ばしている。

「もう…ちよっと！」

朱雀の予想通り、美穂は足を滑らせて落ちてきた。

朱雀は美穂を受け止め、冷や汗を拭う。

美穂が木登りなど、出来るはずない。

体が衰弱していつているのだから、体力も人並み以下だ。

もし落ちたら…それこそ大怪我だ！

朱雀は美穂を座らせて、木を登る。

枝が元々少ない木で、もう少しが届かない。

「もう少し…。」

手をいくら伸ばしても、ほんの少し届かない。

そして思った。

（少し浮いてくれれば、届くのに。）

そのとき、またあの感覚が体を包んだ。

優しい風が朱雀を包み込む感じ…。

気付けば、浮いていた。

そして風船を掴むことが出来た。

そのまま朱雀を包んだ風は、朱雀を下に下ろすとフツと消えてしまった。

泣いている子供に風船を渡してやる。

「お兄ちゃん、ありがとー！」

そう言っつて、子供は駆けて行った。

「朱雀。」

美穂が名前を呼んだ。

朱雀は黙って振り向き、美穂を見る。
怖い顔をしていた。

美穂はこんな顔をした朱雀を、初めて見た。

「ずざっ……」

「何で無茶なことを？」

真剣な眼差し。

「大丈夫だと思っつて。」

危機感の欠片もない返事。

まるで自分が置かれてる状況を、理解していない感じ。

何かあつてからでは遅い。

もう少しきちんと説明しておくべきだった。「もし俺が来るのが遅かったら、美穂は大怪我してたんだぞ？」

美穂が次に口を開こうとしたとき、朱雀が美穂を引き寄せていた。

抱きしめられて、困惑する美穂。

「朱雀、どうしたの……？」

顔が見えない。

(怒っているの……?)

美穂は不安になった。

朱雀が怒るなんて、一度もなかった。

「……怖いんだ。」

朱雀が言葉を発した。

美穂は聞き逃さないように、耳を傾ける。

「また君を守れなかつたらって思うと、怖いんだ……！
俺のせいで……俺のせいで……！」

美穂は儀式にかけられ、記憶を失った。

朱雀は美穂を放そうとしない。
気付くと、朱雀の手は震えていた。
ジートと再会した時の様に。

「朱雀のせいじゃないわ。」

「…ごめんね、朱雀。」

美穂も朱雀を抱きしめる。

「ごめん、いきなりこんな…びつくりしただろ？」

少しして、朱雀は顔を上げた。

「うん、少しだけ。」

少し怖かった。

「気が付いたら、こんなことを…。」

朱雀はため息をついた。

（きつと朱雀は不安なんだ。）

美穂は思った。

朱雀は一人で、たった一人でいろんなことを背負っている。

美穂や日向を守ったり、城の動きを常に気にしながら旅をする。

戦いの大半は、朱雀が負担しているし、ジートのことで頭を抱えている。

強くて真面目な性格。

それ故に、朱雀はいつも一人不安と戦い続ける。

そして、死とも隣り合わせ…。

美穂は朱雀に甘えていたのだと、後悔した。

さつきも、

きつと朱雀が助けてくれる。

そんな思いが心の片隅に、あったのかもしれない。

強くならなくては。

そう、強くなりたい。

大切な人が、自分のことで傷つかないように…。

「ごめんね。」

「うん、怪我しなくて良かったよ。」

朱雀はいつもの優しい顔に戻っていた。

「行こう、朱雀。」

美穂は朱雀の腕を引く。

「何処へ？」

朱雀はきよとんと、していた。

「朱雀の服を買いに行くの。」

朱雀は赤面した。

美穂も気が付いていたのだ。

ガツクリ肩を落とす。

さつき美穂に抱き着いたことといい、カッコ悪い姿ばかりさらしている。

「うん、ありがとう…。」

複雑な思いで、返事をした。

そして二人は歩き始める。

美穂は嬉しかった。

朱雀のことを知れたような気がしたから。

デートで（後書き）

遅くなりまして、申し訳ないです…。

朱雀たちは現在、世界を二分にしている壁へと進んでいます。
段々と治安が悪くなる中で、また新たな刺客が…。

次回からも引き続き、お楽しみ下さい。

by 黒穂。

狐の村

「という訳だ。」

アレンが言う。

「訳わかんないぞ。」

朱雀は腕を組んで、首をかしげる。

そう、いきなり

「旅から抜ける。」

と言われても、意味がわからない。

「アレン、きちんと言いなさい！」

アスカがアレンの頭を殴った。

「痛っ！……わかったから、殴るな。」

アレンが痛って言った……。

余程痛いパンチだったのだろう。

痛いと言っているアレンを見て、段々アスカが怖くなってきた……！

アレンはアスカに睨まれながら、事情を話す。

まとめればこうだ。

町がなくなり、村や里だけになってきた。

魔術船ではこれ以上進めない。

（道が細くなっているからだ。）

それに、鬼狩りの仕事がある。

黒鬼もアレンたちを手伝うため、メンバーから外れる。

要するに、

また三人だけで旅をすることになったのだ。

「メンバーから抜けると言っても、何かあったら連絡して？ 駆けつけるわ。」

アスカは微笑んだ。

「お世話になりました。」

朱雀は少し寂しい気持ちになった。

「あの。私、強くなれるように頑張ります。」

美穂の言葉にアスカは短刀を渡す。

「あの、これ……」

「お守りよ。きっと役に立つ時が来るわ。」

短刀には宝石の様なものが嵌め込まれていて、魔力で光っていた。

「いいな〜。こっちにも何かちょうだいよ！」日向がアスカに突っかかる。

「だ〜め。」

「ケチ！……まあ、色々世話になったわね。」

何だかんだ言っても、日向も寂しいのだ。

「さっさと行け、うっとうしい。……無理するなよ……。」

アレンは素直じゃない。

船を降りる。

「また歩きかあ〜」

日向がだるそうに言う。

「でも景色見れて、楽しいよ?」

美穂は楽しそうだ。

「美穂!」

船を降りたとき、黒鬼の声がした。

「黒鬼ちゃん!？」美穂は 黒鬼ちゃん と呼んでいる。「心配なんかしてないぞ!でも一応……あの……その……頑張れよ……?」
言った黒鬼の顔が赤くなる。

「うん、ありがとう!」

美穂は手を振った。

名残惜しいが、そろそろ行かなければ。

「さあ、行こうか。」

朱雀が声をかけた。

「うん。」

美穂はそう言って、歩き始めた。

「また三人だけになったわね。次、何処行く予定？」

日向が腕組みしながら聞いた。

「そうだなあ。村に寄ってから神殿へ行こうか。」確か小さな村があつたはず。

少し世界の境の話の話を聞こう。

境の向こうにも、神殿はあるのだ。

隔てている壁がどんなものか、知っているかもしれない。

「村あゝ？」

日向は不満そうだ。

店もベッドも無いと、そう言いたそうだ。

「仕方がないだろ、村があるだけましだ。」

朱雀は呆れた。

どこまでわがままなのだろう、この女狐。

「まったく、美穂は文句一つ言わないのに。」

朱雀がそう言って美穂を見ると、辛そうだった。

「どうした？気分が悪いのか？」

美穂は何も言わないが、顔色が悪い。

「美穂おいで。」

朱雀は背中に乗るように言う。

朱雀の背中にもたれると、美穂はぐったりとしてしまった。

「ムフフ…お熱いこと…」

日向がいやらしい目で、こちらを見てくる。

「うるさい…！」

美穂が大変なときに、何を言っているのだろう。この狐。冷やかされて、少しムツとした。

そんなこんなで、村に着いた。

そして、驚いたことがある。

それは…

皆、猫

いや、違う違う。

狐耳だ！

「もしかして、日向の故郷…？」

見つけたな！

という感じで日向を見た。

「あつれ〜、こんなだったっけ？」

しかし当の本人、感動せず。

「と、とりあえず。」

美穂を休ませてやらないと。」

自分と日向の温度差を感じながら、村に足を踏み入れる。

さすがにヒーマ族の世界に近いだけあって、村人たちは着物を羽織っている。着物はヒューマ族独特の衣装だ。

着物に描かれている模様はどれも、こっちの世界には無いものばかりで、何かわからないが…。

朱雀はとても好きだった。

何と言うか、見ていて落ち着くのだ。

こうやってヒューマ族のことを良く言うから、騎士団の時にやられたのかもしれない。

虐め…まではいかないが、嫌がらせを受けていたのは確かだ。

魔族というよりは、ヒューマ族に近いかもしれない。

可能はある。

ヒューマ族の世界に行ったら、何かわかるかもしれない。
少し期待してみる。

「お前、日向か!？」

突如大声がして、びっくりする。

振り向くと何やら長老と思われる、爺さんが立っていた。
目を見開いて…!

「何あの爺さん、怖！」

「失礼だろ、日向！」

日向の言葉に冷や汗が流れる。

「ワシじゃ! 楓じゃ!」

日向は首をかしげている。

「それよりあなた、この子休ませる場所貸して。」

長老と思われる人に、あなたって言った!

朱雀は礼儀知らずの日向に、呆れた。

呆れ返った!

「い、良いじゃろう。」

誰かこの者たちに部屋を。」

いい人で良かった!

結局、村長の楓さん?のおかげで、美穂を休ませることができた。

それに、用事が済むまで部屋を貸してくれると言っ。

「日向、ワシのこと覚えてないか？」

村長（楓さん）が言っ。

「ない。」

きっぱり言い過ぎだ!

「まあこの村から出ていったのは、子供の頃だったからのぉ〜」
村長が寂しげに言っ。

「何で日向は幼くして、この村から出たんですか？」

朱雀は気が付くと聞いていた。

「ある事件があつたのじゃ…」

ある事件…？

こんなのだかそんな村に、一体何が？

「殺されたの。」

日向が口を開いた。

「佐月が奴らに…！」

日向は怒鳴った。

「覚えておつたか…ワシらのことを忘れても、幼なじみの名前はやはり忘れられまい。」

幼なじみ…。

「日向にもそんな人が…。」

日向はフンとそっぽを向く。

「日向はそのシヨックで、暴走し…森を焼きはらつたのじゃ。」

「それでは日向は…」

「処罰が下る前に村から出て行ってしまったのじゃ…」

何で今まで日向は、このことを話さなかったんだ…。

しかも長老の存在を、完全に忘れている。

「もう奴らは死んだと思つてる、もういいの。」

そう言いながらも、目には憎しみの炎が揺らめいていた。

こんな日向を見たのは初めてだ。

日向と初めて会つたのは、美穂と城の近くにあつた森の中で遊んでいた時だ。

行き倒れしている所を、朱雀と美穂が連れて帰って手当したのだ。

実際のところ、日向のことは何にも知らなかった。

美穂も聞かなかったし、朱雀も向こうが何も言わないのに、下手に干渉するつもりはなかった。

「日向…」

朱雀は何だか申し訳なくなった。

日向の心の影に、気付いてあげられなかった。

「ごめんな…」

「何で朱雀が謝んの？」

日向は笑った。

いつもの様に。

「痛っ！！」

突然美穂が叫んだ。

体には紋章が浮かび上がっている。

これは…

ブイオの紋章…！

そんな状態の美穂を見たとき、

朱雀の体にも異変が怒った。

「あ…ああ！！」

自分の体から湧き出る殺気。

誰かの声が、美穂を殺せと言っている。

朱雀の頭は割れそうだ。

必死に体を抑え込む。

美穂の紋章が消えた時、朱雀も落ち着いていた。

今のはなんだった？

一瞬の出来事だった。

「来たみたいじゃな…。」
村長が言う。

「何…が？」

いや、正確には

“誰が”だ。

「陣が来たんじゃない…！また誰か犠牲になる！」

また新たな戦いが、幕開けたことを

朱雀はうつすら気が付いていた。

狐の村（後書き）

（黒穂in広島）

著者の黒穂です。

今広島に来ています！

お盆なので、里帰りです。

海を見ていると、何だか創作意欲が湧いてきます！

今回の狐の村から、日向を中心とした話が続きます。

あえて言うなら、妖狐編です。

もし日向を好きな方がいらっしやれば、楽しんでもらええると思います。

P.S.

キャラへのファンレター、いただけると嬉しいです。

動き出した闇（前書き）

刻一刻と闇は朱雀たちに迫る。

動き出した闇

「陣…?」

聞き覚えのない名前。

「陣!?!」

日向が叫ぶ。

「陣…?。」

「日向の幼なじみを殺した奴じゃ…。」

何でそんな奴がここに?

朱雀は剣を持って外に出ようとした。

「待てい!」

村長が呼び止める。

「何です?!犠牲者が出るんですよ、一刻の有余もありません!」

そう死人が出るのだ。

朱雀が敵う相手かどうかわからないが、時間稼ぎにはなる。

「手を出さんでくれ…!」村長はそれでも行かしてくれない。

「どうして!」

「奴に逆らえば、この村自体、滅ぼされる。

ブイオを信仰している者もな!」

で、ことは…ブイオを信仰していない人が、殺されているのか…!

「俺、やっぱり…」

行きます、と言おうとしたとき

「退いて!」

日向が扉の前に立っている村長を、蹴り飛ばした!

「おい!」

朱雀の言葉も無視して、一人家から飛び出した。

「村長さん、大丈夫ですか!?!」

かなり痛そうだ…。

お気の毒に…。

「ワシはいい、日向を追うんじゃ!」

村長の表情は険しかった。

「はい、美穂をお願いします!」

朱雀はそう言い残して、日向を追った。

村に悲鳴が響き渡る。

日向の声ではない、犠牲者が出たのだ。

村は恐ろしい程に静まり返っていた。

「日向!日向何処だ!」

日向はこうと決めれば、誰が何と言おうと聞かない。

「日向、あいつ何処行った…?」

「あんだ、自分が何したかわかってんの?!」

日向の声が聞こえる。

「あっちか!」

もしかして一人で戦うつもりか?

無茶するなど、叫びたい。

ドガッ

「うわあ!」

何かとぶつかった。

「痛い!」

何かと思えば日向だ!

頭から血を流している。

意識があるので大丈夫だと思うが…。

「日向待て!待てよ!」

また走って行きそうな日向を、朱雀は押さえ込む。

「嫌よ!やっと敵討ちできるのよ?!そうしなきゃ、佐月が報われ

ないわ！」

「お前が死んだら、何にもならないだろう！」

「だって、だって……」

そう言ったきり、日向はしゃがみ込んで動かなくなった。

「ここで待っていてくれ。」

朱雀は日向が飛んで来た方へ走り出した。

行かない方がいいのかと思いつつ、朱雀の中にある正義感が体を動かしていた。

バイオを信仰してないからといって、殺す必要なんてないのだ。

“人を殺めることは例えどんな理由があろうとも、許されないことだ！”

血の臭いがする。

陣と言う人物に、朱雀は確実に近づこうとしていた。

破壊された家、もくもくと煙が上がっている。

その中に、人影が見えた。

朱雀は近づき、剣を構える。

煙の中から人物が徐々に見えだした……。

その人物と目が合い、朱雀はハツとした。

ジートの目の様に、目に光が無く……まるで死人の様だ……。

顔や体は血を浴びて、真っ赤に染まっていた。

「テメー何の様だ……。」

いきなり陣と思われる男は、話し出した。

「お前、この村の人をどうして襲うんだ！」

朱雀が言くと、陣は笑った。

「楽しいからだよ…。」

それに、バイオを信仰していない奴は、殺しも良いって“言われた”んだ。」

言われた…？

誰かが指示をしたというのだろうか？

「もしかして…アクア国大臣、ジエドルドか？」奴しかない。

朱雀はそう思った。

「違がう。俺たちは、

“カオス”に言われたんだ。」

「カオスだつて…！」

まさかジエドルドの息子が絡んでいたなんて！

カオスはバイオの加護を受けていた。

ということは、美穂の婚約者なのだ。

「あいつ…！」

前々から変な奴だと思っていたが、まさか裏で操っていたとは！

「それより、相手の能力も知らずに来る馬鹿が…。」

俺に勝てると思ったのかよ…！」陣の手から、何かが放たれた！

「うわ…！」

朱雀はぶっ飛ばされて、すかさず着地した。「俺に逆らったこと、

後悔させてやる…！」

斬りかかろうと、前を向いた時には陣は消えていた…。

「さっきの能力…。」

何も見えなかったのだ。

気が付いたら、朱雀に当たっていた。

でも攻撃のダメージは、無いに等しい…？

ブシュッ

朱雀は腕を見た。

血がでている。

さっきまで、傷一つなかったのだ。

「あいつの能力か…。」

毒かもしれない。

体の中から、皮膚を攻撃されている感じがする。

朱雀は膝をつく。

全身がかなり痛みだしてきた…。

「毒なら…早く解毒しないと…。」

こうしている間にも、血液は流れ出ている。

「朱雀殿。」

声の方向を見ると、村長が立っていた。

「飲みなされ。」

村長は小瓶を朱雀に手渡す。

「これは…」

「いいから飲みなされ。」

朱雀は小瓶の中に入った液体を飲む。

…出血が止まった。

「…ありがとうございます。」

解毒剤か何かだろうか？

「ワシの家に帰って来なさい。」

傷の手当てをしないとな。」

村長の家で治療を受ける。

日向は…あれからずっと、すねている。

美穂は、朱雀が陣に会っている間に起きたらしい。

朱雀の怪我を見て、慌てていた。

「私が寝ている間に、なにかあったの…?!」

何にも無いと朱雀が誤魔化そうとしても、美穂は納得しなかった。
するはずもなかった。

「誰にこんな酷いことをされたの？」

仕方がないので全てを話した。

「…そんなことが。」

美穂は何故か落ち込んでいた。

「どうした…？」

どうしてそんな顔をするのだろう。

「何で朱雀が辛いときに、いつも私が傍に居ないんだろうって…。」

そんなことを…。

「気にしなくていいよ。」

それに…笑ってて。

そっちの方が傷も早く治る。」

美穂は笑顔をつくる。

笑っていて欲しかった。

美穂が暗い顔を見ると、こっちまで暗い気分になるから。

「よし、手当てが済みましたぞ。」

村長が手当の終わりを告げた。

「ありがとうございます。」

あの…彼の能力とは？」

ゴホン

村長は咳をして、話し始める。

怖い話をするかのような顔だ。

「能力の正体は…バイオの結晶を水蒸気に変えてお主の体に侵入させた。」

「バイオの結晶を…？」

毒かと思っていた朱雀は難しい顔をした。

「そうじゃお主はそれを体内に打ち込まれ、水蒸気だったものが、鋭い個体に変化した。」

つまり変化したことにより、体の中から皮膚を破り出血した。

「ブイオの結晶を使えるのは、美穂とカオスだけだと思っていたが…。」

カオスは加護を受けているから使えるのだ。

だが陣は違う。

加護を複数の人間が受けるなんてことはない。

「カオスって人が関係してないかな？」

美穂が口を開く。

「それって…」「不正な儀式を行なったとか…。」

美穂の口からこんな言葉を聞くとは…。

朱雀は驚いた。

今まで何の意見も言わなかった美穂が、自ら問題を解決しようとしていた。

「不正な儀式…。」

やはりおかしい。

ジエドルド。

ではなくカオスが、何かを握っている気がした。

その頃城では動きがあった。

「我が忠実なる下部ジートよ…。」

カオスがアクア城の玉座に座っていた。

「はい、カオス様。」

ジートは光の無い目でカオスを見つめる。

カオスにの目にも、光は無い…。

「陣は捨て所詮捨て駒、あの朱雀とかいう騎士に敗れるだろう。」

あの騎士も本来の力が覚醒しつつある…。」

カオスの顔が一瞬曇ったような気がした。

「はい。」

ジートは淡々と応える。

「あの騎士、お前が殺れ。」

残酷なカオスの言葉。

親友を殺せと言ったのだ。

「御意。」

ジートはもはや、何も感じないただの操り人形になっていた。

「ジート、何で…!」

このやり取りを見ていた人物が一人…。

朱雀とジートの親友。

ノア・ノルオークだった。

動き出した闇（後書き）

陣が現れたということで、新たな編に突入です。

日の狐編です。

日向の過去、そして恋も…。

ちなみに佐月は男の子です。

美穂も強くなろうと戦いますので、応援よろしくお願いします！

b y 黒穂。

一度限りの賭け

「ねえ朱雀、ずっと友達でいてくれる？」
幼い美穂は朱雀に言った。

これは朱雀の記憶。

「うん、ずっと友達だ。」

何の迷いも無く、そう答える。

朱雀は美穂の後ろを見た。

後ろの人物を見たのだ。

着物を身にまとい、黒髪の少女。

朱雀は身震いした、何故かわからないが。

けれど敵という感じはしない、どちらかと言うと味方という感じなのだ。

これは朱雀の体が訴えていた。

根拠は無いが、この少女を自分は知っていた。

(彼女を殺しなさい…その心が本気になる前に。)

黒髪の少女の声は朱雀の頭の中に入って来た。

(嫌だ、どうして友達を…殺さなきゃいけないんだ!!!)

朱雀はその気迫で頭の中から少女の声を追い出した。

そして少女が立っていた場所をもう一度見ると、その少女はもう居なくなっていた…。

!!

朱雀は目を開けた。

冷や汗が流れる。

何年前の出来事だろうか。

最近よくこの夢を見る。

…あの少女を知っている。

けれど、どうしても思い出せないのだ。

思い出そうとする度、体が異様に震えた。

思い出すのを拒絶しているかの様に。

残酷な真実を受け止めたくない、拒絶をしているのかもしれない。

朱雀はため息をして、体を起こした。

今はそんなこと、どうでもいい。

今の問題は陣だ。

そっちをまずどうにかしないと…。

朝方なので朱雀以外に、まだ誰も起きてなかった。

凄く早くに起きてしまったようだ、変な夢のせいだ。

眠る美穂を見る。

美穂も汗をかいていた。

そしてうなされている。

彼女は今では部屋を飛び出すということをしなくなったが、今でもうなされる。

やはりトラウマはそう簡単に消えないのだ。

大臣ジエドルドはともかく。

信じていたメイドや兵士に追い詰められ、沢山の手が自分に伸びて来たら、誰だつて怖い。

ましてや家臣に裏切られたのだ！

こんなにも辛いことはないだろう…。

美穂は家臣たちを、家族の様に接していた。

その分、シヨックも大きかっただろう。

うなされる美穂を見て、何かしてやりたかった。

でも何も出来ない。

自分に出来るのは、謝罪と美穂を全力で守ることだ。
朱雀は美穂が記憶を失ったのも、うなされるのも全て自分のせいだ
と黙っていた。

美穂は優しい、だから朱雀のせいではないと、言ってくれる。
しかし、朱雀は自分を許せない。

正義感の強い朱雀は、許すことが出来ずにいた。

「朱雀殿、起きておられましたか。」
振り向くと村長の楓がいた。

「起こしてしまいましたか？」

朱雀は申し訳なく言う。

「いえいえ、ワシはいつもこれぐらいの時間に起きますのじゃ。」
すると、村長は朱雀に話があると、手招きした。

「話とは？」

朱雀が聞く。

「陣の魔術のことで、説明をしようかと思つての。」

「バイオの能力はバイオの結晶だったはずだが…？」

「他にあるのですか？」

「バイオの結晶は儀式で得たものじゃ、生まれつきの能力ではない。」

「やはり不正な儀式が行われたのか…。」

「奴の生まれ持った魔術は、火炎系じゃ。」

この魔術で陣は、バイオの結晶を蒸発させ、水蒸気にして相手の体
に侵入させるのじゃ…。」
なるほど。

やっとすっきりした。

「わかりました、ありがとございます。」

そう言った朱雀は、一つ疑問点を見つけた。

「あの、俺に飲ませてくれたあの小瓶の中は何だったんですか？」
バイオの結晶を抑える薬があるなら、是非とも教えてほしい。

儀式の時、美穂の痛みが治まるかもしれない。

「他の神の力が入っておった。」

他の神？

他に神はいるだろうが、バイオの様な力を持った神がいるだろうか？

「神ですか…？」

「そうじゃ、^{しじん}“四神”という。」

アクア国には伝わってない宗教だろうか？

それともヒューマ族が信仰している神だろうか？

「四神はこの世界全てを守って下さっている神じゃ。」

「この世ですか？」

そんな神がいたのか…。

「そうじゃ。」

北、南、西、東

にそれぞれ神がいるのじゃ。

その神々を四神という。」

四人の神…。

バイオとはまた違った雰囲気だ。

バイオの考えは間違っているし、元々人なのだ。

人が悟りを開き何を語ろうとも、神にはなれないのだ。

何故なら、人は完全ではないのだ。

どちらかと言うと、強大な力を持った魔物と言った方が正しいのかもしれない。

どう考えてもバイオの教えは、人の道を外れている。

「四人の力をお主に少量流した。」

そうすることで、バイオ神の力と四神の力が中和して、体に無害な物質になったのじゃ。」

力を力で相殺したのか。

「では陣に襲われた人もこれがあれば…」

少し希望が見えた。

「無理じゃ、昔はバイオ神に依存した者をそれで助けられた。」

今は四神に分けてもらっていた力がもう底をつき始めてきとる…。」
「だったらまた分けてもらえば！」

「四神は今何故か力を失っているし、消息もわからぬ。」
希望の光がまた消えた。

「じゃあどうすれば…！」

これでは、太刀打ち出来ない！

「まだ奴に勝つ見込みはある。」

先に言ってくれー！

「あるんですか！？」

村長はうなずく。

「残りの四神の力全て使って、奴のバイオの力を封印する。

“一度限りの賭け”じゃ。」

一度限りの賭けー？！

「成功するんですかね？」

「何を言っておる、お主が引き受けてくれるのではないのか？」
こつちがやることになってしまっていた。

「お、俺ですか?!…はあ、わかりましたよ。」

朱雀は仕方なく引き受けてしまった。

「よしそうと決まれば、戦いの準備じゃ！」

そう言つて村長は駆け足で、何処かに行つてしまった。

「大丈夫だろうか…？」

不安が積もる。

封印の件にしても、

村長の件にしても…。

別に村長が嫌いな訳ではない、ただ思い込みがやたらに激しくて困っているだけだ。

バイオの力も脅威だが、魔術の使えない朱雀にとっては、火炎系の

陣の魔術も一歩間違わなくても

死に至るのだ…！

自分を守る術を、見つけておかないと…。

朱雀は焦るばかりだった。

一度限りの賭け（後書き）

こんにちは。

一度限りの賭けということで、朱雀は凄く焦ってますね。

作者も更新が遅くなると焦ってきます…。

焦って誤字・脱字があるかもしれない。

この先もあるかもしれません。

バイオをビオと書き間違えてるのを発見しましたごめんなさい！

by 黒穂。

剣を持った皇女

「これでよし、じゃ」

。。。

「あの、村長さん。

これって…。」

朱雀は着せられた装備を見た。

「戦闘服じゃが？」

「ごつ過ぎる！」

こんな重たい鎧で戦えない！

「俺がいつも着ている服でいいですよ！」

「ダメじゃ！！」

村長は防御力が低すぎると言う。

「せめて騎士団の服で勘弁してください…。」

朱雀は大男ではないし、逆に言えばあまり背も高くない。

村長が着せた鎧は大きなもので、30？はありそうな程だ。

「騎士団の服か、ううむ…それなら良からう。」

騎士団の服もマントやら何やらで、朱雀はあまり気に入ってなかった。

いつも着ている服の方が、動きやすい。

まあ騎士団の服で了解がでたのだ、今回はこれで行くしかあるまい。

朱雀が着替え終わった頃、日向の怒鳴り声が聞こえた。

「何なのよお！装備ぐらい自分で決めさせなさいよっ！！」

ドガッ

朱雀は目を背けた。

日向が村長をまた思い切り蹴り飛ばしたのだ！！

痛そうで見えてられない。

「ぐはっ！日向、少しはワシの言うことを聞け！」
無事な様だ。

「嫌。

それに、美穂がこんな重い盾持てるわけないでしょ！？」

もう少し気を配りなさいよ！事情はわかってんでしょ！？」

村長はそう言われても、まだ引き下がらない。

「いやしかし…！」

バンッ

日向がテーブルを叩く。

そして

「あんだ、なめてんの？」

っと冷徹な言葉。

日向の目にはうつすら殺意が揺らめいていた。

(本気でうざがってるよ…日向の奴。)

朱雀はあえて何も言わないことにした。

八つ当たりされては、迷惑だ。

「あの、私はこの短剣でいいです。」

美穂が静かに言った。

短剣？

(まさか…。)

朱雀は美穂に近寄った。

「朱雀？」

「戦うつもりなのか？」

美穂はしっかりと、うなずいた。

「信用できないか？」

美穂は自分で判断出来るようになってきて、自分ののことも信用で

きなくなってしまったのかもしれない…。

朱雀は不安になった。

「違う…。」

「俺、頑張るから！」

守ってみせる、だから戦うなんて…。」

言わないでほしい。

美穂の体は、旅を始めた頃よりも衰弱している。

戦いの先には死が待っている。

運が良くても、大怪我は免れない。

「違うわ！」

朱雀のことは信用してる、何にもわからない私を助けてここまで一緒に来てくれた。

でも…どうしていつも私だけ無傷なの？」

「美穂…。」

彼女の目には涙が溜まっていたが、まっすぐ朱雀を見つめたままだ。

「私も一緒に戦いたいの、お願い私も戦わして！」

足手まといにはならないようにするから…！」

そうか。

こんな思いで、美穂は旅をしてきたのか。

美穂が味わっていたのは、朱雀や日向には感じることの無い

孤独感だった。

「…わかった。

俺と一緒に戦おう。

俺の背中、美穂に預けたから。」

そう言うと美穂は嬉しそうに

「はい！」

と言った。

朱雀は言ってしまったとばかりに頭を抱えた。

私は朱雀に後ろを任された。
嬉しかった。
とても。

正直、相手にしてもらえないと思っていた。

朱雀には内緒だけど、剣の練習もした。

教えてくれたのは、黒鬼ちゃんだった。

険は重くて、手のひらが荒れた。

黒鬼ちゃんは女の子なのに、重い剣を軽々振る。

苦労したのがわかる。

こんなに痛くて重いの中から。

「やはり、私の妹だな…スジがいい。」

黒鬼ちゃんはそう言った。

スジとは何かわからなかった、でも褒められているのがわかって嬉しかった。

黒鬼ちゃんが言うには、初めて剣を振るっただけには上出来なのだそうです。

私は昔、剣の練習をしていたのではないか。

そう言われた。

そう言われてみると、微かに手にマメの後がある。

一時期練習をしていたのかもしれない。

何の為に？

きっと今の私と同じ気持ちだったのだろう。

今の私は朱雀たちの為に。

そして昔の私は、国や私たち王族を守る人々の為に。

私が剣を持つことで何か変わるわけでもない、ただ皆の痛み・苦しみを私に分けて欲しかった。

その心の荷物を、一人で抱えて欲しくなかった。

「美穂、くれぐれも無茶しないでくれよ？」

「うん。」

美穂はそう言ったものの、きっと無茶をするだろうと朱雀は思った。昔からそうだった、何でも自分でしようとする。

助けを呼ぼうとしないし、困ったものだった。

昔の記憶が無くても、美穂は美穂。

性格は同じなのだ。

(注意しておこう…。)

朱雀は密かにそう決めた。

「あの村長さん、陣の居場所おおよそわかっているんですね？」

「…わかっている」

「本当ですか？」

(何だろこの間…怪しい?)

「わかるとるわ！絶対居るとは限らんがのお…。」

「はあ…。それでもいいから、教えて下さい。」

村長は地図を持ち出してきた。

「ここじゃ。」

神殿じゃないかあー！

村長が指さしたのは、第四のバイオの神殿だった。

当たり前といえば当たり前だ。

バイオの手下なのだ。

一言でまとめると。

実際にはカオスに操られているのだが…。

ともかく行くしかない！

当たって碎けるだ！

砕けるのはダメだけど…！（砕ける＝死）

朱雀たちは村長の家を出た。

一人は使命感に駆られ。

一人は共に戦うと意気込み。

一人は幼なじみの仇をとろうと、していたのだった。

剣を持った皇女（後書き）

段々物語が進んできました！

ここからが盛り上がる所だと、私は感じています。
美穂も戦いに参加させたことですし。

HPでは短編小説を書こうかと。

私はどれだけ小説が好きなんですかね…。

とりあえず、そっちもよろしく願います。

by 黒穂。

狐と電気男（前書き）

これまでのあらすじ

朱雀たち一行は鬼狩りのアレンたちと別れ、第四の神殿に向かうことに。

道中村に立ち寄った。

そこは何と日向の故郷だったのだ。

そこで新たな敵が来襲。

戦いは第四の神殿で幕を開けたのだった。

狐と電気男

陣が神殿に居ると聞いて、今まさに神殿の入口。
??

「神殿にこんなデカイ扉あったか？」

これまでの神殿には確かになかった。

「なかつたわよ、多分。」

「なかつたよ、多分。」

美穂も日向も多分がついている。

（覚えてないな、二人とも。）

「しかしどうやって開ける？」

かなり重そうだ。

試しに押ししてみようと、朱雀の手が扉に触れた。

ゴゴゴゴ...

開いた...

どうやら

「歓迎されてるみたいだ。」

朱雀は苦笑いした。

「そうね！」

待ってなさい、私が殺ってやるう！」

日向から殺意が...

「怖くない、怖くない...」

美穂が呪文のように繰り返す。

朱雀は先頭に立って、中に入る。
すると... パツと明るくなった。

「何だ!?」

「お前らを死へと誘ってやる!」

金髪の男…陣ではない。

「お前は…」

「俺に勝とうなんて思うなよー!」

やけにテンションが高い男。

「人の話を聞け!」

ようやく朱雀は発言できた。

「一人だ!」

はあ?

この男…聞いてない。

「何がだ!」

「俺と戦えるのは一人だけ、後の二人は先に進みな!」

(総当たり戦か!)

厄介なことになった…!)

「あんたら二人は先に行きなさいよ、ここは私が引き受けるわ!」

日向が朱雀と美穂の背中を押す。

「日向…」

「いいのよ!こんなザコ、私で十分よ。」

朱雀は美穂を連れて、次の部屋の入口をまたぐ。
すると

ゴゴゴゴ…

と鳴り、扉がしまった。

もう後戻りできない。

「無事でいるよ…。」

「ふう〜行つたわね。」

日向は背伸びした。

「お前はここで死ぬんだ、俺に殺されてな！」

「うっさいわ！何回も同じこというな！」

日向は構える。

武器は持ち合わせていない、体重と魔術を組み合わせた戦闘方。

「…気の強い女だぜ。」

俺にそんな口きいた女、お前が初めてだ！」

(来るか…！)

「俺は季色きいろよろしくな…！」

季色の体が発光する！

バチバチッ

「何…電気？」

季色の体から放たれた光は、日向を包む。

「名前を聞いたかったんだが、サヨナラだ！」

日向の姿が光に包まれた！

「あっははは！女あ、逝つちまったか！」

勝利の表情を浮かべる季色。

「あたしの名前は日向…！」

季色の背後から声がする。

「何…！」

季色は回避しようとして試みる。

しかし

「ムカつくんだよ、お前…！」

掛け声と共に

日向の拳が顔にジャストヒット！

「ぐはぁ…！」

季色は床に叩きつけられた。

「お前が死ね！」

日向は呪いの言葉を呟きながら、倒れた季色を蹴る。

「てめえ！」

ガシッ

「何すんのよ！」

季色が日向の足首を掴んだために、バランスを崩して倒れた。

「ム力つくんだよ！」

「あたしこそ！」

日向が季色に頭突きをかました！

「痛てえーな！この妖怪狐！」

「あんたが、押し倒してるから悪いんでしょ！？」

季色は自分の状況を見て、赤面した。

(この男…)

「あんた、年いくつ？」

「な、何だいきなり！？」

「あたし17歳よ。」

「おまつ…17って嘘だろ？」

季色は嘘だという目でみた。

「嘘って何よ！？」

季色を突き飛ばす。

「子供っぽい。」

「言うなあ！」

(人がちよつとだけ気にしていることを…！)

「俺は15だ。」

。。。

沈黙が続く。

「はああ！？15？」

美穂よりも一つ年下だっというの！？」

衝撃の事実？だ。

「驚き過ぎなんだよ！」

電撃がまた日向を襲う。

「痛い！」

何すんのよ！」

日向も火の玉を投げつける。

ジリッ

季色の髪が少し燃えた。

「…自慢の髪を。」

何しやがんだ！

それにお前とやってんのは、戦いじゃねえ！」

ただのお遊びだ！

季色は吐き捨てた。

「青い頭の奴と、らればよかったぜ…。」

（殺意はもうないわね。大成功！

相手のやる気を奪おう作戦！）

日向はとてもずる賢かった…。

「楽しんで勝てるってこのことよね」

思わず口に出してしまった。

「聞いたぞ！」

てめえ、殺つてやる！」

（しまった…！）

「や、殺つてごらんなさいよ…！」

季色は勢いよく日向に走ってくる。

本気で怒っているようだった。

「イヤー！来ないでえー！」

「待て！クソババア！」

日向と季色の低レベルな争いが始まったのであった…。

「ん？」

美穂は立ち止まる。

「どうした？」

「何でもない…。」

日向の笑い声が聞こえた気がしたのだ。

（そんなわけない、戦闘中に。）

「次の扉だ。」

朱雀と美穂の前には再び扉。

（神殿に扉なんか無かったはず…。）

納得いかない所もあるが、これからどうするかが問題だ。

総当たり戦なんて、こっちが不利だ！

日向は自分で何とかするだろうが、美穂が一人で戦えるわけがない！

（次の敵を二人で倒してから行くか…？）

扉が開く。

考える時間も与えてくれないみたいだ。

「こんにちは。」

「さあどつちと戦おう？」

少年はニッコリと笑った。

狐と電気男（後書き）

日向と季色の馬鹿な戦いです。

戦いと言つより、喧嘩ですね。

季色くんは、今回限りの登場ではないです。
名脇役ということだ…。

次回は長い戦いにするつもりです！

by 黒穂。

思いは強く

「さあどっちが僕と戦ってくれるの？」
笑いながら問いかける少年？

少年に見えるが、目付きは子供の無邪気さがなかった。

（ひとまず二人で戦うか…！）

朱雀が思ったそのとき、地面が盛り上った。

朱雀は美穂の方を持ち、それを避ける。

盛り上った地面から、勢いよく石の柱が突き出した！

こんな攻撃を受けたら、ひとたまりもない！

次々と石の柱が突き出し、朱雀と美穂を追い詰めた。

朱雀の背中に壁が当たる、よく見ると入ってきた扉の向かいにあった扉だった。

（しめた…！）

扉の向こうに行けば、この攻撃から逃れられる！

「どっちかが僕と戦って、どっちかが陣の元へ行かないと…」

村をそのうちの一人が襲いに行っちゃうよ？」

・・・。

「嘘だろ…。」

総当たりにした上に、陣ら三人を戦って足止めしなければいけないとは！

つまり。こいつを倒すために、二人で戦えば陣が村を襲いに行くし、陣と戦ったとしてもこいつが村を襲いに行く…。

完全に追い詰められてしまったのだ！

「どつすれば…！」

ドンッ

朱雀は不意をつかれて、押された。

「えっ…！」

扉の向こうへ突き飛ばされ、扉が閉まった！
突き飛ばしたのは、美穂だった…。

朱雀は扉を叩く。

「どうしてだ…美穂！」

壁の向こうへと怒鳴る。

「ごめんなさい、勝手なことして…。

ここは私が戦うから。」

壁の向こうから微かに美穂の声が聞こえた。

「二人で戦おうって！」

(そう約束したじゃないか…！)

「だから私は朱雀の背中を預かりました。

だから朱雀は、陣の所へ行ってください。」

「美穂…！」

「村の人たちを助けたいの、お願い！

陣を倒せるの朱雀しかいないんだから！」

美穂の言葉を聞き、朱雀は走り出した。

歯を食い縛りながら、全力で駆けた。

足音が遠のいていく…。

どうやら朱雀は行ったようだ。

「君が戦うの？」

可哀想だけど、楽しませてもらうよ。」

美穂は震える手で、短剣を持った。

「君みたいなお嬢様、戦ったことないんじゃないの？」

ま、面白いけどね。

どこまで出来るかな？」

美穂の足下が盛り上った。

すかさず飛び退いて、攻撃を回避する。

「僕は水色、よろしく〜！」

また攻撃。

今度は地割れだ！

美穂は結晶を作り、足場を作った。

「君、その結晶…！」

なあんだ、皇女様だったんだ！

だったら、殺しちゃいけないね。

殺すことはできなくても、歩けなくするぐらい良いよね〜！」

美穂は身構えた。

恐怖で体が思ったように動かなかった。

石の柱を避けたときも、結晶で足場を作ったときも、ギリギリだった…。

た…。

（怖い…。）

一人になった途端、不安になった。

朱雀にあんな大口を叩いたのだ、後には引けない！

水色が飛びかかってきた！

名前と同じ水色の髪が揺れている。

美穂は後ろへ飛び、何とか避けた！

しかし

水色から放たれた攻撃が、頭に少し当たった。

ガシユツ！

美穂は倒れた。

頭から血が出ている。

大した怪我ではない。

美穂はすかさず起き上がって、水色から離れた。水色がもう一度同じ技を放った。

美穂は結晶を作り、それを当てて相殺する。

「ふう〜んこれぐらいはできるかあ…。」

美穂は辛くなってきた。

体力が普通の女性よりも低下しているためだ。「皇女様さあ、儀式中で体力低下してるのに結晶、あまり使わない方がいいよ?」

この少年何を知っているのだろうか…?

「何で…?」

「結晶つてさ、自分の体の水分を固めて出来たものなんだよね。だから、調子が悪い時に使い過ぎたら

脱水で死んじゃうよ?」

初めて聞いたが、美穂はあまり驚かなかった。

先程から、気分が悪い。

危険なのだろうが、止めるつもりはなかった。

美穂にはこの能力しかないのだ。

美穂は、結晶を作り投げつける。

ひょいと回避する水色。

「だから止めた方が良いつて、陣が倒れたことがあったから僕知ってるし。」

君殺したら駄目だつて言われてるし、死なれたら僕が怒られちゃう。

「美穂が死ねば、そこで儀式は中止になってしまうからだ。」

「皇女様がここでじつとしていれば、何もしないよ。」

僕は村を襲いに行くし。」

「止めて!」

シュツ

「…それでも、戦うんだ…。」
水色は怖い顔になる。

水色の頬に一筋、血が流れる。

「僕の顔、どうしてくれるの…?」

怒りが場の空気を変えていく…。

「傷付けてくれちゃってさー!!」

水色が手を掲げると部屋の構造が変わった!

「驚いた?僕の能力。」

そうさ、この神殿の構造も僕が変えたのさ!」

迷路のようになった部屋。

「…!」

これでは…

「君の結晶が当たらなくなるよね。」

美穂が考えた通りのことを言った。

迷路のように壁が沢山でき、壁の高さは高い。

美穂が結晶を放つても、壁に当たって碎ける。

水色が壁の上に居ようものなら、届かない。

相手は部屋を自由自在に操る、美穂は袋のネズミだ!

「えいつ!」

結晶を放つ。

水色には壁に邪魔されて当たらない。

「僕は君を許さないからね…。」

追い詰めて、最後は殺してあげるよ。」

水色は石の刺のようなものを放つ。

美穂は結晶を作り、また相殺する…。

結晶の色がおかしい…。

真っ赤な結晶。

美穂は一目でわかった。

自分の 血 だ…！

体の水分が急激に低下し、血を結晶に変え始めたのだ！

（もう限界なの…？）

このまま能力を使い続ければ、間違いなく命はないだろう…。

美穂は短剣だけで戦わなければ、ならなくなつた。

（大丈夫、アスカさんから貰つた剣だもの…！）

「皇女様辛そうだからさあ、楽にしてあげるよ！」

水色が剣を抜き、走り出した…！

恐怖で目の前が真っ白になる。

美穂は目を閉じた。

私は美穂、だそうだ。

名前も覚えてない、自分が誰だかわからない。

怖い。

起きたら私は寝ていた、手を握られて。

手を握っていた男の人は、悲しい目をしていて。

朱雀だった。

鮮明に思い出せる、あの日のこと。

あの日からのこと。

皆私に親切にしてくれた、優しくいろんなことを教えてくれた。守ってくれた…。

皆、私を庇って怪我をする。

黒鬼ちゃんとの戦いで、私を助ける為に
朱雀は右手首に大怪我を負った。
朱雀が死んでしまうかと思った。
私のせいで…。

皆に怪我をさせるのも、負担を掛けるのも
もう嫌…！

だから

だから私は…

美穂が目を開けると水色が迫っていた！

美穂が短剣を握りしめたそのとき、短剣についていた宝石が光った

…！

光が宝石から放たれ、水色を包み込む…。

水色は光に捕らわれながらも、剣を降り下ろす！

美穂の肩がザックリ斬られたが、美穂はかまわず短剣を握りしめる。

短剣の光でとうとう動けなくなった水色。

「くそっ…何だよこの光！」

必死に抵抗するが、びくともしない。

「ごめんなさい。」

美穂は呟き、切っ先を水色に向ける。

そして水色に突き刺した。

血は出ない、水色は麻酔を射たれたように
意識がない。

美穂は短剣を抱きしめ、倒れ込んだ…。

目の前が今度は真っ暗になっていく。

そして意識は途切れたのだった

朱雀。

…一瞬美穂の声が聞こえたような気がした。
無事だろうか…。

朱雀は不安を振り切り、陣の元へと走り出した。

思いは強く（後書き）

結構頑張っ書きました。

えっと、どうでしたか？

彼女は強くなったと私は思います。

強い思い、人を守りたいと思う心は強い。

私はそう考えながら、今回書きました。

次回は陣戦です！

さあ、朱雀くんは成し遂げることができるとでしょうか？

覚醒

俺はなんて無力何だ！

打開策も思いつかず…！

美穂を危ない目に合わせて…。

何がしたいんだよ。

本当に自分は何がしたいんだ。

騎士団に居た時も、そうだった。

自分には何も無い。

ノアのように飛び抜けて強いわけでもなく、ジートのように戦略を
考えられるわけでもない。

親友二人は自分にはない才能がある。

だけど俺には？

美穂は優しいと言ってくれた。

でも、優しさだけでは何もできないではないか…。

朱雀は自分の着ている騎士団服を見た。

「自信がないか？騎士としての自信が。」

朱雀は見上げる。

柱の上に人影。

陣だ…！

「お前には関係ない。」

それより。お前の悪事、見過ごせない！」

朱雀は剣を抜く。

「正義感だけでもものを言うなよ、口だけ野郎！」

朱雀と陣が叫んで瞬間、刃と刃がぶつかった！

全力で押し合う。

朱雀と陣の足下が、ミシミシとひび割れていく…。

「なかなか…やるなこの口だけ野郎。」

「…お前もな、この極悪人。」

朱雀は素早く間合いをとる。

しかし、その間合いを無視して陣は突っ込んでくるのだ！

（なんて無茶苦茶な！）

朱雀は心の中で叫んだ。

間合いとは、ものともとのへだたり。

それを越えると相手のテリトリーになるのだ。

つまり朱雀は間合いをとり、陣を足止めするつもりだったのだ。

朱雀はすかさず斬りつけようとした。

陣は避けられないはず

だった。

「忘れたのかよ」

陣の声がスローモーションに聞こえる。

時間が過ぎるのがやけに遅い…。

「俺には、これがある。」

途端に朱雀は激痛を感じて、後ろに遠のいた！

激痛がする部分を押さえていた手を見る。

血がべっとりついていて…！

朱雀の腹部には何かで刺された後があった。

検討はすぐついた。

美穂と同じ

バイオの結晶だ！！

「…お前も、使えるんだったな！」

朱雀は咳き込んだ。

口を押さえた手に、血がついた。

どうやら傷は深いらしい…。

それもそうだ。

あの至近距離で、刺されたのだ。

「当たり前だ。

やっぱりお前は口だけ野郎だな。」

陣は呆れたように言った。

「そんなんで、よく騎士団に入れたよな！」

罵る声。

悔しかった。

朱雀は遊んでいたわけではないのだ。

努力して努力して、やっと入れた騎士団。

それを侮辱されたのだ…！

朱雀の血の滲む努力を、命をかけた決意を！

「確かに俺は、強くない。

でも、自分の大切な人も守れないくらい

落ちぶれてはないつもりだ…！」

朱雀は剣を持ち、立ち上がった。

その時だった。

ゴゴゴゴ…

部屋の構造が変わっていく…。

「何だ…?!」

そこはいつもの神殿だった。

「水色がやられた、か…。」

どうやら術者が倒れたことで、魔術が解けたらしい。

「水色つて、美穂と戦った？」

「そうだと陣はうなずいた。」

「美穂は勝ったのか…！」

「いや、違うな。」

希望の光が消えた。

「どういうことだ…！」

「相討つた、とでも言おうか。」

相討ち…。

美穂も死んだと陣は言ったのだ。

「嘘…だろ…。」

「嘘ではない、あの女の気配も共に消えている。」

その言葉に、目の前が暗くなる。

死んだ？

違うよな？

何かの間違いだろ？

確かに美穂の気配がない…。

「俺は…」

何一つ守れやしなない。

美穂が死んだ、死んだのは俺が守らなかったから…。

誰が殺した？

自分か？

いや違う。

殺したのは

陣たちだ…！！

「…よくも。」

よくも俺の大切な人を！！！！」

朱雀を取り巻く空気が変わった…！！

「お前…！！」

陣は朱雀を見て驚愕する。

目の色が赤くなっていき、髪の色も紺青色から真っ赤に染められたのだ！

「覚醒したのか…？」

陣は唾を飲み込む。

まさか“あの力”がここで、覚醒するとは思ってもしなかったこと。

しかし朱雀の力は暴走していた！

「よくも…よくもー！！」

朱雀は無差別の攻撃を繰り出す。

その一つ一つが威力はあるが、大降りだった。

陣はひたすら避けた。

今の朱雀に理性などない、怒りや絶望感に支配されている。

陣は肩と足に傷を負った。

その代わりに朱雀を押さえ込むことができた。

「制御できないんじゃない、無力に等しい。」

後々面倒だ、始末するか。」

陣は手のひらを朱雀の頭に押し付けた。

（朱雀…。）

朱雀の頭の中で声が響く。

「誰だ、美穂か？」

俺を迎えに来たのか？」

（だからあの時、本気になってしまつと忠告したのに…。
困つた子。）

それは美穂ではなかった。

「誰だ…!？」

（私は貴方の味方です。

恐ることはありません。）

「誰だと聞いているんだ…。」

（貴方は私を知っています。

しかし貴方は自ら記憶を消した。
運命に背く為に…。

だから時がくればわかるはず。）

記憶を自ら消した

それも運命に背く為に…。

訳がわからない。

朱雀は頭を抱えた。

（ひとつ、いいかしら？）

朱雀は何だとはかりに顔を上げる。

（あの皇女様は死んでないわよ。
微かに息がある。）

「本当…に…?」

朱雀は失つた希望を取り戻した。

（ただし、早く行かなければ。

死んでしまうわ。）

そうだ、陣との戦いの途中だったのだ!

しかし何故今、意識が心の中にあるのだろう。

朱雀は自分に起こつた出来事を把握していなかった。

（行きなさい。
貴方なりの強さを持って。）

朱雀の目はやっとものを映した。

目の前に陣がいて

「始末しておくか。」

技を繰り出そうとしていた！

朱雀は馬乗りになっている陣を突き飛ばす。

朱雀の目と髪の色が元に戻っている。

陣は後ろに下がった。

「正気に戻ったか、この口だけ！」

陣は傷ついた肩を擦りながら言う。

「一気に決着をつける。

美穂が待つてるからな！」

朱雀は剣を構えた。

決着をつけるために。

仲間を助けに行くために。

朱雀は自分が覚醒した“あの力”の存在をこの時まだ知らなかった。

この時気付いていて、自覚していたのなら

近い未来に起こる悲劇は

避けられたのかもしれない。

覚醒（後書き）

こんにちは。

朱雀が覚醒する話しなんです、表現が難しい所もあって…結構遅くなっちゃいました。

一番難しいと感じたのは、間合いの説明です。

どう書いたら伝わるだろうと、何回も書き直しました；
うまく伝わってるといいんですけど。

by 黒穂。

哀れな手下

明らかに違う朱雀の気。

“あの力”ではない。
でも強い気を感じる。

陣は朱雀の何かが変わった、そう感じてうかつに攻撃を仕掛けられないでいた。

「どうした？早く決着をつけるぞ。」

それとも怖いのか？」

朱雀の言葉も自信に満ちていた。

「はっ！俺が怖がるかよ…！」

どこからその自信が湧いてくるのか、陣には理解できなかった。

（くそっ、さつきまではただの口だけ野郎だったはずだ…！

何なんだ？あの空気…！）

朱雀は全く動かなくなった陣に、攻撃を仕掛ける。

剣を勢いよく降り下ろし、風を起こす。

いつもやっている足止めの技だ。

しかし、いつもと威力が違った。

足止めするどころか、鎌鼬の様に陣を斬りつける！

朱雀は戸惑った。

（こんな技じゃなかったはずだ…。）

威力が増している。

朱雀が困惑していると、陣が風圧を利用してそのまま飛び上がった。いた。

空中で陣は朱雀目掛けて、結晶の刃を雨のように降らせてきた！

朱雀は回避を試みたが、逃げられそうではない。

さっきの鎌鼬を結晶の雨にぶつける。

ズバツ

それでも結晶は朱雀の顔や腕などに、傷を付けた。陣も全力で戦っているようだ。

朱雀はふと気づき、腹部に手を当てる。

…出血が止まっていたのだ。

(あんな深い傷だったのに…。)

あの声の主が血を止めてくれたのだろうか？

「どこ見てる！」

よそ見すんじゃねー！」

陣は柱の上に立っていて、火の玉を落としてきている！

朱雀は避けたが、

なんと地面にぶつかった火の玉が、今度は火の粉となって下から朱雀を襲った！

悲鳴に似た声を上げ、朱雀は膝をついた。

シュー

と音をたてて、火の粉が当たった所は

真っ赤になって、皮膚が爛れた。

火炎の術、陣の本当の能力だ。

(油断した…避けきれると思ったのに。)

朱雀は柱の上にいる陣を見る。

陣に攻撃が当たらなければ、こちらに勝機はない。

かと言って、柱を壊せば、砂ぼこりが朱雀の視界をさえぎって陣に、一撃必殺のチャンスを与えてしまう…。

朱雀は立ち上がった。

足に激痛が走る。

左足が特に重症だった。

火の粉をまともに受けたのだ。

だから走ることも、もうできない…！

（魔術が使えたら、浮遊術で飛べるのに…！
せめて飛べたら！）

フワッ

「何だ…！？」

体が軽くなっていく。

徐々に浮いていくのがわかる。

前にもこんなことが何度かあった。

ゴーストタウンの時。

町で風船を取ってあげた時。

感覚が一緒だった。

（俺は魔族なのか…？）

それなら説明はつく。

単に浮遊術を使えるようになったまでだ。

それとは違うような気がしてならなかったが、あえてそう思っておこう。

今は陣を倒すことだけを考えた方がよさそうだ！

陣は驚きはしなかった。

（“あの力”が覚醒したんだ。

こんなのはほんのお遊び程度でしかない。）

陣は結晶を作ろうとしたが止めた。

脱水症状で倒れては、負けてしまう。

結晶よりも無駄に魔術を使う火炎の術を使うことにした。

脱水で倒れるより、疲労が溜まった方が
百倍ましだった。

火の玉が飛んでくる。

初めは飛ぶことに慣れていなくて、危ない場面が沢山あったが…。
慣れてしまえば、地上で避けるよりも楽なことに気付いた。

地上だと、火の玉を避ければ次に火の粉に襲われる。

それに比べて空中は、火の粉が当たらない。

それだけで凄く楽になった。

いつ落ちるかと思うと怖かったが…。

ついに攻撃ができる位置まで来た。

剣を振り上げ、一気に斬りかかる！

さすがに陣も受け止めてくる。

(しぶとい奴だ…。)

そのとき、陣の腕が傷を負った。

それは朱雀が剣振り下ろした時にできたかぜが、また鎌鼬になった
のだ！

朱雀はとっさに剣をしまった。

何故なら。

「何故だ…、何で…手を抜く！」

そう言った陣はあちこちが裂け、血を流していた。

剣をしまったのは、殺すつもりはないからだ。

これ以上やれば、陣は死んでしまうだろう。

「陣…、カオスの手下なんてもうやめろ。」

朱雀は手を差し伸べた。

宙に浮いているため、フワフワと体が動く。

「俺は、カオスの…手下じゃねー！！！」

陣は朱雀に火の玉を投げつける。
朱雀は避けきれた。

しかし、陣が体制を崩し、柱から落ちてしまったのだ！
朱雀は急降下して陣の手を掴んだ。

安心したのもつかの間、朱雀を包み込んでいた風が消えてしまった！

ドスンッ

下に結局落ちてしまったが、しりもち程度で済んだ。

「じゃあ、バイオの手下から抜けろ！」

バイオであろうが、カオスであろうがやってることは一緒だろ！」

朱雀は陣の肩を持ち揺さぶった。

「俺は、世界をバイオ様と変えるんだ！」

そうだ、変えるんだ！」

陣は狂ったように笑い始めた。

「お前は少しバイオから離れた方がいい。

そして、この世界からも…。」

朱雀は村長から貰った四神の力を、陣の周りに撒いた。

「お前、それは…！」

陣が気付いた時にはもう、朱雀がことを起こした後だった。

「口だけ野郎にやられるとは…最後に教えてやる。」

お前らが今更あがこうとも、何も変わりやしねーよ！」

この先に待つのは“世界の終りだ！”」

そう叫んで消えていく陣を朱雀は悲しい目で見ていた。

「少しの間眠っていてくれ…。」

皆が笑い会える、世界にしてみせる。

だから、その日まで。」

背を向け、朱雀は走り出した。

待っている仲間の元へ。

哀れな手下（後書き）

哀れな手下はようやくブイオの呪縛から逃れることができた。
封印という悲しい結末で…。

朱雀は誓う、皆が笑い会える、優しく平等な世界にしてみせると。

次回もお楽しみに。

b y 黒穂。

騒がしい色

朱雀は走った。

美穂のいる部屋へと。

こんなにも、騎士団の服が走りにくいものだったか。

一刻も早く、美穂の側へ行きたかった。

（飛べないかな？）

朱雀は走りながら、全身に力をいれてみたりした。

何も起きなかった…。

自分が使いたいと思った時に限って、浮遊術は使えないものだ。

全力疾走し続けて、どれくらい経っただろう？

やっと美穂のいる部屋にたどり着いた。

駆け寄って、抱き抱える。

まず目につくのは、頭の出血。

これは思ったほど、傷は深くない。

次に、朱雀は美穂の口から泡が出ていることに気が付いた。

（これはまずい…！）

父親は医者。

朱雀もそれなりの知識はあった。

口から泡…これは、脱水の症状だ！

危険な常態。

水分を与えなくてはいけない。

しかし、神殿に水があるはずもない。

帰っている有余もない。

（何か、何かないのか…?!）

(その子をバイオの祭壇へ…。)

またこの声…。

「お前、誰だ…?」

(そんなことより、早くしなさい!)

「わ、わかった!」

朱雀は従ってみることにした。

今はこれしか方法がない。

祭壇へ美穂を寝かせる。

美穂の体が宙に浮き、光が体の中に入っていく。

朱雀が知る限りだが、美穂は痛に苦しむはずだった。

しかし、祭壇に再び寝かされた美穂は

回復していったのだ!

「どうということだ…?」

(バイオの力を受け入れられる体になったのでしょうか。)

儀式を何回かやるうちに、バイオの力が本格的に美穂の力になりつ

つあった。

そうなつて、何の得になるというのだ。

大臣ジエドルドをはじめ、その息子カオス。

そして従う神官たち。

何を企んでいるのやら…。

美穂の儀式が全て終わつたら、ジエドルドたちに問いただそうと

朱雀は思う。

完全に回復した美穂は、すやすや眠っている。

「本当に無事で良かった…。」

朱雀は美穂を背負つて、また走り出した。

日向を迎えに行くのだ。

日向は多分大丈夫だろうが、大怪我をしている可能性も否定できな

い。

日向が戦っている部屋は案外近い場所にあった。

「日向！」

心配する朱雀が目にしたものは…。

「来ないで変態〜！」

「誰が変態だ、このクソ狐！」

絶対捕まえて殴り殺してやる！」

完璧に遊んでいた。

「そこまでだ、二人とも。」

朱雀の言葉が聞こえてないのか、それとも聞いてないのか…騒ぎが治まる気配がない。

「日向！遊んでないで帰るぞ！」

朱雀は怒鳴ってそそくさと出て行ってしまった。それもそのはず。

美穂が戦っている間、日向は遊んでいたも同然。遊んでいる暇があったら、美穂を助けて欲しかった。

怒っている朱雀の後ろ姿を見て、日向は頭を抱えた。

「怒らせちゃた〜。」

後が面倒なんだよねー朱雀って。」

日向はその背中を追いかけた。

「逃げるのかー！？

お前の敗けだぞー！？」「はいはい、あなたの勝ちで良いわ。じゃね〜。」

季色がひき止めるも日向は行ってしまった。

……。

季色の中で何かがモヤモヤしている。

真剣勝負ができなかったからか？

適当に勝ち負けを決められたからか？

どれも違った。

怒りの感情ではない、どちらかというと、寂しさ？的な感覚だった。

とりあえず、季色は水色を見に行った。

水色は力を殆ど奪われていたが、命に別状ない。

力も少し休めば回復する程度だった。

「おい、水色。」

水色を揺する。

「なあに……？ご飯？」

起きたと思えばうわごとを言った。

「俺たち、敗けたぞ……。」

季色が唸るように言った。

それを聞き、水色は目を見開いた。

「陣が、敗けたんだね……？」

「ああ。」

水色は落胆した。

それは季色も同じだった。

今まで陣に従って生きてきた。

彼がいなければ何をどう過ごせばいいか、わからないのだ。

帰る場所もなければ、家族もいないのだから。

季色には自分の行く末よりも、気になることがあった。

それは妖狐のあの女、だ。

「水色……俺おかしんだ。」

あの狐女がいなくなつた時から、苦しいんだよ……。

もしかしてあの狐女に何か魔術をかけられたのか？」

突然の季色の発言に、水色は吹いた。

「あははは！」

お腹を抱えて、笑いこける水色。

涙を目に溜めながら、大笑いしている水色に、季色はイライラした。

「馬鹿にすんな！」

魔術をかけられたことがそんなに恥か！」

「違っよ、季色〜。」

君はまだ知らなかったんだね。」

意味深な水色の発言。

「な、何だよ…？」

恐る恐る聞いてみることにした。

「君は…」

（君は？）

「あの狐ちゃんに…」

（狐女に…？）

「恋をしたんだよ！」

（恋をしたのか。）

……………。

「何かおかしくないか…って、ちょっと待て！」

こゝ、恋だー!？」

水色の話しをようやく理解し、悲鳴にも似た声を上げた。

「ざけんな！何であの狐女に恋なんか！」

恋って意味知ってるか!？」

好きになっただってことだぞ!？」

錯乱状態に陥ってしまった様子の季色。

「知ってるよ〜。」

君よりもずっとずーっと知ってると思うな

季色兄さん」

季はそこで倒れてしまったのだった。

「ねえ朱雀。」

返事がない。

「ごめんって、私も遊びが過ぎたわ！」

朱雀は振り向いて、ため息をついた。

「次、ふざけたら殴るから。」

それだけ言って朱雀はまた前を向いた。

日向は面倒だと、顔をしかめた。

朱雀は真面目なので、昔からいい加減な日向とケンカが絶えなかった。

真面目で頑張れば、頑張る程、空回りしている朱雀。

大雑把なノアの方が何事も、よっぽど上手くこなせている。

日向はそう昔から思っていた。

そう考えれば朱雀は損しているし、辛いというものだ。

朱雀は日向を許したくても、彼自信の正義感でそうはいかない。

ノアならさつさと許して、それで終わりだが、朱雀の場合はずっと不満を抱えたままになる。

そこが朱雀の辛い所だった。

村長の家に着くと、まるで勇者を見るような出迎えだった。

「朱雀殿〜！ようやってくださった！」

あの陣を倒すとは！」

朱雀の背中をバシバシと叩く。

反対に朱雀はあまり喜ぶ気になれなかった。

と言うのも、朱雀は陣が自ら封印されようとしていたにしか、見えなかったのだ。

ブイオの結構を蒸発させ、朱雀の体に侵入させる…。

その手を陣は使わなかった。
それをすれば勝てたかもしれない。
なのに陣はそうしなかった。

まるでブイオの呪縛から、逃れようとしている様に朱雀は見えた。

朱雀はハツとして身構えた。

誰か村長の家に向かっている。

村のものではない。

もっところ…

「た、たのもー！」

子供で、ばか正直な感じ。

（たのもー？）

朱雀は扉を開ける。

そこには黄色い髪の少年が。

季色だった。

「その…あの狐居るか？」

一瞬で日向の客であることがわかり、朱雀は日向を呼んだ。

「何よ、かつたるい。」

愚痴を言いながら日向が奥から出てきた。

季色と目が合う。

「あー！あんたあ何しに来たのよ!？」

「いや、あの、その…。」

顔を赤らめる季色。

こっそり様子を見ていた朱雀は、まさかと目を疑った。

誰でもわかる、日向に恋心を抱いていると。

しかもまだ季色本人は気付いてない。

「さつきは…その、ごめん。

言い過ぎた。

じゃあ、それだけだから!」

季色はそう言っていると、走り去ってしまった。
そして、後から来た水色。
朱雀はとっさに構える。

何故なら、美穂を殺そうとした奴だからだ！

「僕もう何もしないから。」

水色はもう敵ではないと、朱雀に笑いかけた。

「季色、君のこと好きになっちゃったみたいなんだよね。」

季が居ないのをいいことに、水色は思いつきり暴露している。

「はあ？あたし、年上がいいの！

嫌よあんな子供。」

日向は冗談じゃないと首を横に振った。

「季色絶対に諦めない奴だから。」

こうと決めたら、突き進むタイプだし。」

日向はゾツとした顔をして、朱雀にこう叫んだ。

「絶対明日出発ー！！」

日向は逃げるつもりなのだ。

「…了解。」

朱雀が渋々了解したことで
明日出発することになった。

その時だった。

「朱雀君！」

突然の声。

居るはずのない人物。

「アスカさん！？」

アスカが水色と日向を押し退けて、朱雀の元へと走ってきた。

「どうしてここに？」「そんなことは後！

大変なの、今すぐ一緒に来て！」

「一体何があったというのか…。」

「ノア君が…」

「ノア君が瀕死状態なの！」

騒がしい色（後書き）

小説家になろうリニューアル、ということまで…やっと更新できました。

ここから話は急展開していきます。

次回は朱雀にとって、そして美穂たちにとって決して忘れることのできない出来事が起こってしまいます。

それでは次回楽しんで見てくださると嬉しいです。

by 黒穂。

狙われた命

ノアが瀕死

朱雀は目眩がした。

ノアはかなりの騎士だ、簡単にやられる男ではない。

「嘘ですよね、アスカさん…？」

アスカに問いかけるも、何も言わない。

しかし、目が告げていた。

本当 なんだと…。

「今すぐ一緒に町まで来て。」

アスカの呼び掛けに、朱雀は頷いた。

そして疑問が一つ。

どうやってここまで来たのだろうか？

魔術船は大き過ぎて、この村に繋がる道は通れないはず。

と、いうことは…

（馬か、馬に乗って来たのか…？）

俺も馬に乗って町まで行くのか…?!）

冷や汗を流した。

朱雀は、馬に乗れないのだ。

騎士団入団したばかりの頃、馬に乗る実習みたいなものがあった。

朱雀はまだ幼かったから、わくわくしていた。

しかし、それもつかの間。

馬は朱雀が乗ると暴れ馬に変わり、朱雀は何度も落馬した。

酷い時は、腕の骨が折れた…。

朱雀は思い出して、寒気がした。

「アスカさん、馬は：嫌です。」

頼み込むように言った朱雀にアスカは笑った。

「大丈夫、私も馬は苦手だから。」

アスカが少し広い場所を指差した。

そこには、小さな魔術船が！

「私、動物より機械相手の方が好きだから。」

そう言っつてウインクした。

「アスカさん：！」

朱雀はアスカにもものすごく感謝した。

(馬はこりごりだ：：。)

日向は真っ先に魔術船に乗り込んだ。

季色から本気で逃げる気なのだ：。

そんなに逃げなくてもいいのにと、朱雀は思う。

片思いの気持ちは痛いほどわかるのだ。

朱雀は眠る美穂を抱えて乗り込む。

村長さんが長居させようとしてきたが、丁重にお断りする。

何たってノアの一大事、それどころではない。

「朱雀様ー！ありがとうございますー！！」

声を揃えて叫ぶ村人たちに、軽く会釈をして朱雀たちは村を後にした。

小型魔術船は思ったより中は広く、そして早かった。

「美穂ちゃん落ちたらいけないから、しっかり抱えててね。」

そう言われて朱雀は美穂を抱えていた。

よっぽど疲れたのか、美穂は全然起きない。

それもそうだろう、初めて一人で戦ったのだ。

不安や恐怖があっただろう。

だから起こさずに寝かしておこうと、朱雀は思った。

「アスカさん、ノアの怪我の状態は…？」

アスカは険しい顔をした。

「かなり酷いわ。」

急所は何とか外れてるけど、凄い出血…。」

ノアをそこまで追い詰められる相手…。」

そんな奴が何でノアを狙ったのだろうか？

「あの何でノアがアスカさんたちに、保護されたんでしょうか？

ノアはアクア国に居たはずです。」

アスカたちがアクア国に行ったとは思えない。

「それが…。私たちが居た町まで逃げて来たみたいなの。」

逃げてきたと聞いて朱雀は驚いた。

そんな怪我をしているのに、逃げきれるとは…！

「恐るべしノア…。」

朱雀は苦笑した。

「ほんとと、しぶとい男ね。」日向は鼻で笑った。

そんな日向に朱雀はムカついたが、あえて何も言わなかった。

ケンカをする気分ではない。

「朱雀くん、もう着くわよ。」

「早いですね！」

30分くらいしかまだ経っていない。

「当たり前よ。最高級の魔術船だし、私は国家パイロットだからね。」

さすが国家パイロットの資格を持つだけある。

魔術船の操縦はお手のものだ。

「あれは…」

空からでもわかる。

あの大きな船は、アスカの大型魔術船だ！

アレンの姿も見える。

待っててくれたのかと朱雀は手を振った。

魔術船は着陸し、朱雀はすぐさまアレンに駆け寄った。

「ノアは!？」

「そう焦るな、状態はかなり安定した。」

良かったと、朱雀は肩の力がどつと抜けた。

「ありがとう、アレン……。」

「別に、俺が治療したわけじゃない。」

アレンは魔術船に入って行った。

「さあ、朱雀くんたちも中へ。」

アスカにそう言われて、魔術船の中に入った。

懐かしい船内。

つい最近までここで生活していたのだ。

アスカがある部屋を指差した。

ここにノアがいるのだ。

なるべく静かに入り、傍に行く。

「ノア……？」

「何だよ朱雀。」

ノアは包帯だらけだったが、ぴんぴんしていた。

「やられたかと思ったぞ。」

「これでも俺は小隊長に選ばれたんだぞ。」

拳どうしを軽くぶつけた。

ノアはその実力から、最近小隊長に昇格したようだ。

「で、その小隊長をこなにした奴は誰だ？」

朱雀の問いかけに、押し黙るノア。

かなり言いにくそうだ。

「シヨック受けるなよ？」

朱雀は頷いた。

今更シヨックを受けることなど、殆どない。

「俺を殺ろうとしたのは……シートだ。」

朱雀は顔をしかめる。

「俺はカオスとジートが話しているのを、盗み見たんだ。

朱雀、ジートはお前を殺す気だ…！」

きつと盗み見ているのを見つかって、殺されかけたのだろう。

「あの気の弱かったジートがここまで、バイオに変えられるとはな…。」

ノアはため息をついた。

「ジートはもう、バイオの配下なのか…？」

朱雀は信じられずにいた。

「そうだ。あいつはもう敵だよ、朱雀。」

ノアはそうやってすぐに割り切る。

たとえそれが親友だったとしても。

「まだわからないじゃないか、ノア。」

「朱雀。そんなこと言っていると大切なものを奪われるぞ？
例えば…。」

「朱雀？」

ノアが例を上げようとしたとき、美穂が入って来た。

「皇女様とか。」

ノアが言った。

朱雀は黙り込んだ。

「朱雀、ノア君大丈夫？」

美穂は心配そうにノアを見た。

「どうしてここが？」

「起きたらいなくて、探してたら声がしたから。」

美穂はすっかり良くなったようだった。

「これはこれは、皇女様！。俺はもう大丈夫ですよ。」

「何が、大丈夫なの？」

アスカの登場に、ノアは笑ってごまかしていた。

アスカによると、さつき意識をとりもどしたばかりらしい。

何気なく話しをしているように見えるが、ノアは無理をしていた。

「ちよつとだけだから、ね、アスカさん。」

そう言いくるめられて出ていったアスカ。

その後ろ姿が完全に見えなくなったのを見計らい

「ふう〜ああゆうタイプ苦手なんだよね〜。」

ノアが一息ついた。

「アスカさんは良い人ですよ？」

不思議そうに言ってくる。

「う〜ん、何て説明すればいいかなあ。

純粹皇女である意味大変そうだな！」

朱雀頷いた。

全くその通りだ。

「ノア、そろそろ寝ろよ。

俺たちはもうしばらくここにいるから。」

「おうよ。」

そう言葉を交わして、美穂を連れて部屋を出た。

「よかった。」

「うん、よかったね。」

「へっ!？」

朱雀は無意識によかったと言ったようだ。

「俺何か言った…?」

「何でもない。」

にこやかに笑う美穂。

(変なことは言っていないみたいだ…。)

朱雀はほっとした。

「帰ったぞ…。」

低い声。

黒鬼だった。

「久しぶり、黒鬼。」

どこに行つてたんだ？」

「見回り。ジートとかいう奴が追つて来るかもしれないしな。」

黒鬼はノアの為に見回りをしていてくれたみたいだ。

「ありがとう、黒鬼。」

本当に良い奴になったと朱雀は思う。

「べ、別にあいつの為じゃない。」

ジートとかいう男に来られるのが、嫌なだけだ！」

（前から思つてたけど、照れてるよな？）

そう思うと朱雀は吹き出してしまった。

「何を笑っている！」

…まあいい、お前美穂と一緒に買い出しに行つてこい。」

買うものを書いた紙を渡される。

（多くないか…？）

「くれぐれも美穂には持たせるな。」

わかつたなら、とつとと行け。」

そんなこんなで、魔術船を追い出されてしまった。

「絶対嫌がらせだろう…？」

「心配しなくても、私も持つてあげるから。」

美穂に手を引かれ、渋々町へ行く。

この後起こる、最悪のシナリオを

朱雀はまだ知らなかった。

狙われた命（後書き）

日向の話を書くと言ってましたが、話の流れ上番外編として改めて書くことにしました。

申し訳ございません。

次回から急展開していきます。

なので、一区切りした時に書きたいと思います。

b y 黒穂。

血に染まる手

人殺しはどんな理由であれ
決して許されないことだ

町を美穂に手を引かれながら歩く。

賑やかな町で、出店が多い。

店が多く立ち並ぶから、路地裏も多かった。

路地裏は入り組んでいるため、朱雀は避けて通った。

迷いそうだったし、それに人目につかない。

それに、今日は曇っているため、一層路地裏が暗い

。そんな場所で、何かあっても困る。

朱雀は買い物リストを見る。

ズラリと並んだ商品名。

一番厄介なのが、魔術船の燃料だった。

魔術船は大きすぎるため、町の中にある給油所に入れないのだ。

（王都は大きな都市なので、入れる。）

なので旅の途中に少しずつ、継ぎ足していくしかないのだ。

少しずつといっても、大きなタンク5個分だ！

一回の買い出しだけでは到底無理だった。

（黒鬼、覚えとけよ…！）

「あれ何？」

美穂が指を指した。

ナイフをくるくる回しているピエロ。

「ああ、大道芸だよ。」

美穂は目を白黒させている。

大道芸を見たことも、覚えていないのだ。

美穂は過去に何回か、城に招いた大道芸を見たことがあった。初めて見た時と、同じ反応をしている。

美穂があまりにも楽しそうなので、少し見ていくことにした。華麗に舞うピエロたち。

朱雀もいつの間にか夢中で見ていた。

そんなときだった。

「路地裏に來い。」

耳元で呟かれた言葉。

一瞬周りの音がなくなり、その声だけになった。

そう錯覚するくらい、朱雀は驚き、体が強張った。

後ろを振り向く。

しかし誰もいない。

確かにあの声は

ジートだった。

彼が何もせずに朱雀を、誘き寄せようとはしないであろう。

朱雀はハツとして、隣を見た。

誰も居ない。

周りを見回すが、どこにも見当たらない。

「やられた…！」

美穂の姿はどこにもない。

恐らくジートの仕業だろう。

朱雀は、ノアの言った言葉を思い出した。

大切な者を奪われるぞ。

ジートをもっと早く、敵として注意するべきだったかもしれない…！

朱雀は走りだした。

自分のせいで、美穂がまた傷つこうとしている。

自分が死んで美穂が助かるなら、命を捧げてもいいとさえ朱雀は思った。

路地裏に足を踏み入れる。

これで何度目だろうか。

微かに血の臭いがする…。

(ここだ…。)

探し回り、やっと見つけることができた。

「ジート、来たぞ！

殺したければ、俺を殺せ！」

響き渡る声。

「朱雀、来たか…。」

奥の方で、声がした。

朱雀は声のする方へと、走った。

暗い路地の奥に着くと、そこには笑うジート。

そして、刃を突き付けられている美穂の姿があった。
美穂の頬に一筋の切傷。

「…！」

「これはこれは、陣を見事倒した剣豪・朱雀殿。」

ジートは嘲笑した。

「ふざけるな！美穂を返してくれ！」

「俺を殺せば！」

殺せば、皇女は助かるぞ？」

ジートの問いかけに、朱雀は首を振った。

「人殺しは許されない、それにお前を殺すなんて…！」

朱雀にはできない。

ジートは親友の一人であり、弟みたいな存在だった。

そんな彼を前に、殺すどころか、剣も抜けない。

「クソ野郎が…！」

そういう所が嫌いなんだよ朱雀！

騎士団に居た頃から俺を見下しやがって…！」

ジートは朱雀に剣を向けた。

「俺の言動や行動で、お前が傷ついていた。

申し訳なく思っている、だから俺はお前に切っ先を向けるつもりは

ない。」

「それが気に食わないって言うてんだ…！」

ジートは朱雀に斬りかかった。

朱雀は避ける。

「俺が弱いから、お前は手を抜いくのか！？」

昔から本気で俺と戦わないのは、俺を見下しているからだろっ…！」

「ジート…！」

朱雀は剣を鞘にしまった状態で、ジートの刃を受け止めた。

「剣を抜けよ朱雀…。」

ジートは瞳は悲しく揺らめいていた。

「…一つ教えてやる。」

お前の仲間にアスカという女がいるな。

そいつの妹は俺が殺した。」

突如ジートが、呟き始めた。

「本当…なのか？」

惑わそうとしているだけかもしれない。

「お前らと別れた後、一人で俺の所に来た。その時殺した。」

アヤカが話していた、変人とはジートのことだったのだ！

朱雀の目に憎しみが揺らめきだした。

「何でだよ…どうして、アヤカさんを！」朱雀は、押し返す。

「あの女が、ブイオ神を批判する者の一人だったからだ。」

ジートは笑っている。

異常なほどに…。

そんなとき、朱雀はジートの背中越しにある光景を見た。

美穂がアスカに貰った短剣を構えていた。

美穂は怒りに震えていた。

アスカの身内を殺されたこと。

以上に、人を殺すのを楽しんでいるジートに憎しみを抱いたのだ。

しかし、今のジートは何をするかわからない。

下手に攻撃すれば、命の保証などない。

「美穂、待て！」

朱雀が叫んだ時には遅く、美穂はジートに刃を突き立てる。

朱雀はまたスローモーションで見える。

攻撃しようとしている美穂の背後に、ジートは居たのだ…！

「さようなら。」

皇女様。」

ジートが振りかぶる。

本当に殺す気なのだ…！

朱雀の中で何かが切れた

目の前が真っ白になり、そして…

世界は赤に染まった。

手に持つ剣の重み。

荒れる息。

震える手。

血を浴びた。

自分の血ではない。

辺りを見回す。

美穂が倒れている。

彼女の血ではない。

気絶しているだけだ。

前を見る。

倒れている人物が、口から血を吐いた。

血の気が引く。

朱雀は起こっている深刻な事態に気付き、その人物に駆け寄った。

「ジート！！」

そう腹を斬り裂かれ、血を吐いていたのはジートだったのだ…！
朱雀はゆっくりジートを座らせる。

「す…ぞく…くん。」

優しいジートの声。

さっきまでの彼ではなかった。

「待ってる、すぐ医者を…！」

立ち上がるうとした朱雀の腕をジートが掴み、弱々しく首を振った。

「僕は…も…う助から…ない。」

ジートの目には、光が宿っていた。

「そんなこと言わないでくれ…！」

朱雀は必死に彼の腹を押さえる。

「僕は…たく…さん殺した。」

当…然の報い…。」

ジートの瞳から涙が。

「あり…がとう、バイオの…呪縛か…ら救って…くれて…。」

最…後まで…と…もだち…って…言…って…くれ…て…。」

ジートの体は力を無くし、ジートは

涙を流しながら、息を引き取った。

朱雀は自分の手を見る。

彼の血で染まった手。

罪で汚れた手。

ジートはバイオの呪縛に苦しんでいたに違いない。

そんな彼を自分は斬り捨てた。

最後にありがとうと言った、あの優しいジートの顔を思い出す。

「俺がジートを“殺した”んだ…
友達を俺は…！」

朱雀は壁に頭を打ち付けた。
頭から血が流れる。

ぽつぽつと雨が降り出してきた。

鉛色の空を見上げ。

朱雀は絶叫した。

血に染まる手（後書き）

雨に打たれ、血は流されていく
しかし罪は消えることはない
これからもずっと

永遠に…。

b y 黒穂。

ジート

「まって〜！」

三人の足音がする。

大人たちはそれを微笑みながら見ていた。

「ジート遅いぞ！」

ムツとしてノアが言う。

「ご、ごめんね…。」

この気の弱い少年こそジートなのだ。

「ノア、もう少しスピードを落とさないか？ジートが可愛そうだ。」

これは朱雀。

皆14になっただばかりであった。

来年、15になれば騎士団に入団できる。

その訓練をしていた。

騎士団に入団した者は勇気と力ある者として、皆に尊敬される。

一言でいえば、男の中の男になれるのだ！

「ちえっ、わかったよ。」

ノアは活発で、運動神経が良い。

「ごめんね…。」

ジートは大人しいが、頭が良い。

「気にするなよ。」

朱雀は、飛び抜けて出来るものがない。

そんな三人組だった。

ゴンツゴンツ

木の棒と棒とがぶつかり合う鈍い音。

「はあっ！」

カンツという音と共に、木の棒が飛ぶ。

「うわあ！」

木の棒を飛ばされ、ジートは尻餅をついた。

「大丈夫か？」

朱雀が手を差し伸べる。

「う、うん。」

三人で剣の練習をしていた。

「ジートオ〜もっと思いきりやれって、言ってるだろっがぁ！」

二人に剣を教えるのは、勿論ノア。

かなりのスパルタだ…！

ジートは頭を叩かれた。

目には涙が浮かんでいる。

「それから、朱雀！」

お前も手加減すんじゃねえ！」

「口が悪いぞ、ノア…。」

ジートがそのやり取りを、寂しそうに見ていたことに朱雀は気が付いていなかった。

1年が経ち、ノアのスパルタのおかげで見事、騎士団に入ることができた。

ジートはその成績から、第1番隊へ

(エリート部隊だ)

朱雀は15番隊へ

(一般部隊)

ジートは知能から、指令隊へ

(戦略などを考えて、指示をする特集部隊)

それぞれ配属された。

ジートの主な仕事は、戦闘。

敵国を攻めたり、城の外での仕事が多い。

朱雀の部隊は主に城内の警備。

朱雀は美穂の部屋の前担当だ。
その為、美穂と仲良くなったのだ。

ジートの部隊は戦闘は殆どせず、堅苦しい会議にずっと出席していた。

それぞれの仕事に慣れ始めた時だった。

会議の帰り

ジートは朱雀の姿が見え、駆け寄った。

「朱雀くん！あ…し、失礼しました…！」

勢いよく彼を呼んだがいいが、隣に皇女美穂の姿が。

「いいえ。」

そんなにかしこまらなくても良いのよ？」

皇女様に会うのはこれが初めてだったジートは、胸を撫で下ろした。

（怖い人じゃなくて良かった…。）

遠くから姿は見たことがあるものの、どんな方なのかわからなかったのだ。

（皇女様と朱雀、楽しそうに話してたなあ…。）

「何か用か？」

ビクッ！

ぼーっとしていたジートはビククリして、飛び上がった。

「い、いやいや何でもないよ！」

久しぶりに見かけたから、声かけたただけだから！

じゃあ朱雀頑張ってるね、皇女様もお元気で…！」

ジートは走って行ってしまった…。

「どうしたんだ？ジート。」

朱雀は首を傾げた。

「面白い方ね。」
美穂はクスツと笑った。

「思わず逃げて来ちゃった…。」
楽しそうに話す朱雀と皇女様。

(じゃましちやいけないうね。ノアくんの所へ行こう。)
ジートはノアの所へ向かった。

ノアを見つけたが、団長と何やら怖い顔をして話し込んでいる。
ジートはため息をついて、トボトボ歩き始めた。

朱雀もノアも自分の仕事で忙しいし、ここによく馴染んでいる。

ジートは隊で友達もできず、馴染めていなかった。

仕事の合間に朱雀とノアに会いに行くことが、唯一の楽しみだった。

「騎士団なんかに入団しなきゃよかった…。」

ジートは俯きながら呟いた。

ボンツ

頭に何かぶつかった。

「??？」

ジートは頭を押さえて前を見る。

「騎士団に入団しなきゃよかったなんて、言わないで。」

髪が真っ黒で大きな本を持った女の子。

「君は…同じ部隊の…。」

「カノンよ、よろしくジートくん。」

また花音は、ジートの頭にボンツと本を 当てた。

「痛っ、何するんだよ。」

ジートは頭を擦りながら言う。

「友達になろうっ?」

「…へっ?」

ジートは驚いて、ぽかんとしていた。

「私も友達いなかったの、だからよろしく。」
握手しようと、手を差し伸べてきた。
ジートは嬉しくて、握手をしようとす。

しかし、カノンの腕が目についた。

「ちよつと見せて。」

「えつ、何!？」

ジートはカノンの腕にある痣を、じつと見た。

「今治すから。」

そう言ったジートの手から暖かい光が。

「治療術が使えるの…?」

カノンは驚いていた。

「うん、ちよつとただけだけど。」

このくらいなら、治せる。」

治療術は術式が難しく、使えるようになるにはかなりの知識が必要なのだ。

「じゃあ、再生理論とかわかるの!？」

カノンの目は輝いている。

「う、うん。まあ…ね。」

そんな彼女にジートはたじたじた。

「改めてよろしく、ジート!」

「よろしく。」

こうしてジートに新しい友達ができた。

彼女と出会ったことで、ジートの運命の歯車が狂ってしまったのか
もしれない…。

友達になり、共に過ごしていくうちに、ジートは彼女に恋心を抱くようになった。

彼女はいつも笑ってて、励ましてくれる。

ジートはずっと一緒に居たかった。

ただ、それだけだった。

それだけの願いだっただのに。

「ジート!!!」

朱雀の声。

「どうしたの？そんなに血相かいて。」

「カノンって子知ってるよな?!」

朱雀は真っ青な顔をしていた。

「うん、同じ隊の友達だけど...。」

カノンは今日は外で小隊を指令する、仕事に出かけていた。

「まさか...何かあったの...?」

「事情は後で話す、来てくれ!」

ジートは朱雀に連れられて、医務室へ。

入った途端、ジートは叫んだ。

「カノン!!!」

呼ばれた彼女は虚ろで、顔色が悪い。

そして、虫の息だった...。

話を聞くと、彼女は撃たれたという。

「先生、助かりますよね...!?!」

しかし医者も、何も言わない。

「先生!」

「最善は尽くしましたが、彼女は助かりません...。」

ジートは、座り込んだ。

「せめて最後は貴方が傍に居てあげて下さい…。」
医者は朱雀を連れ、医務室を出た。

「死なせるもんか…！」

ジートは、手に気を集中させ、治癒術を使い始めた。
涙が溢れてくる。

治癒術を使っても、彼女の顔色が一向に良くなるらないのだ。

「ジート」

彼女の小さな声。

「ジート…大好きよ。」

彼女の手を握る。

「僕も君が好きだ…治ったら、いろんな場所に二人で行こう。」

「楽しみ…にしているね。」

彼女は微笑んだ。

そして、幸せな顔をして

彼女は永遠の眠りについた…。

「カノン…？」

ジートは彼女を揺さぶる。

しかし、彼女が目覚めることはない。

冷たくなっていく手。

ジートは目の前が真っ暗になった。

「嘘だ…カノンが死ぬわけない！」

嘘だ…！！」

たった一発の凶弾で、彼女は死んだ。

何故、戦争なんて起こるのだろう。

騎士団など要らない、平和な世界だったなら、彼女は生きることができたであろう。

悲しみに暮れるジート。
その後ろから迫る人影。

「ジートくんだね？」

それはカオスだった。

「……………」

ジートは俯いたまま、何も言わない。

「彼女が死んだのはこの世界のせい。

そう思わないか？」

その言葉に、ジートは顔を上げた。

「争いもない、欲望もない無の世界を……一緒に創らないか？」

差し伸べられた手。

ジートはその手をとった。

手をとった瞬間から、彼はバイオの呪縛にかかったのであった……。

「あり……がとう、バイオの……呪縛か……ら救って……くれて……。

最……後まで……と……もだち……って……言……って……くれ……て……。」「

ジートはそう言って目を瞑る。

人を自分は呪縛されていからといえ、殺したのだ。

殺してしまった人や朱雀に、何て詫びればいい？

ごめんなさい、城のメイドさんや執事さん。

ごめんなさい、アヤカさん。

ごめんなさい、ノア、朱雀。
みんな…。

僕はもう死ぬ。

きつと永遠に苦しみながら、この世をさまよおうのだから。

冷たかった体が暖かくなっていく。

「ジート。」

その声は、忘れはしないカノンの声。

「どうして…？」

ジートは目を見開く。

「よく、一人で頑張ったね…。」

カノンはジートを抱きしめる。

「貴方は、ずっと心の中で泣いていた。

人を殺したくないって泣いていた。」

ジートの目から涙が溢れる。

ジートの体をバイオが操っていたに等しかった。

辛かった。

誰にも助けを呼べずに、心の中で

ジートは苦しんでいた。

「貴方が悪いんじゃない。

ほら、行こう？」

皆が待つてるよ。」

見上げると、そこには自分が殺してきた人々が。

みんな笑って、ジートを呼んでいる。

「皆…僕は皆の人生を奪った。

だから…僕はそっちに行けない…。」

「ジートくんが悪いのではないわ。貴方は私たち以上に、生きながら苦しんだ。

だから、もう頑張らなくていい。

ブイオが貴方に着せた罪に、もう……苦しまなくていい。」

アヤカがそう言い、ジートの手を引く。

手を引かれ。

ジートは涙を流しながら、暖かい日だまりの中へ歩みだした。

神様どうか朱雀たちに幸せな未来を。

そう願いながら。

ジート（後書き）

ジートがどうして狂ってしまったのか。
過去をさらっと書きました。

そして、ジートが死んで天に召されるところも書きたいと思い、書きました。

ジートは確かに殺した。

しかしそれは、彼が望んでいないこと。

バイオが彼に着せた罪なのだ。

それを皆はわかって、ジートを導き。

神は、彼を天に召したのだろう。

優しく、純粋な

ジートはやっと

苦痛から、バイオの呪縛から

解き放されたのであった…。

by 黒穂。

心の叫び

「う…ん。」

ゆっくりと目を開けた。

真っ暗な目の前。

そして酷く寒い。

雨が降っているようだ。

自分がどのような状況に置かれているのか、全くわからない。

水溜まりの上に寝ているのか、背中が冷たい。
濡れた手を視界に入れる。

赤い…？

目に入ってきたのは、赤に染まる手。

そして、生々しいあの鉄の臭い。

ハツとして体を起こす。

自分が寝ていたのは、水溜まりではなかった。

血溜まりの上だった…。

自分の血ではない。

怪我をしていないのだから。

震えながら、辺りを見回す。

壁に寄りかかり、座っている青年を見つけた。

その青年は知っている、朱雀の友人。

シートだ。

シートを揺するが、反応がない。

彼の手首に、手を当てる。

脈は…ない。

既に絶命していた。

自分が寝ていた血溜まりは、ジートの血であったことがわかる。
美穂は、体が震えた。

どうして彼が死んでいるのかわからない。
怖い…。

視線を前に向けると、もう人物が。

見慣れた紺青の髪。

朱雀だ。

「朱雀。」

美穂はほっとして、彼の名前を呼ぶ。

「……。」

しかし背を向け立っている彼からは、返事が返ってこない。

「朱雀…？」

「殺したんだ」

朱雀はやつと言葉を発した。

が、信じられない言葉だった…。

「え？」

「殺したんだよ、俺がジートを…!!」

美穂は信じられなかった。

「嘘…朱雀がそんな…」

美穂は脱力した。

朱雀の剣や手は赤に染まり、血を浴びている。

隠しようもない真実だった…。

「俺がジートを、友達を殺したんだよ…。」

朱雀はそう言うと、路地裏から立ち去ってしまった。

美穂は一人取り残された。

「朱雀…！」

体が震える。

寒さからか、不安からか。

それとも

恐怖からか。

「美穂！」

聞き慣れた声。

走ってくるのは実の姉、黒鬼だった。

「黒鬼ちゃん…！」

美穂は、黒鬼の姿を見ると涙が溢れてきた。

黒鬼は何も聞かずに、美穂を抱きしめた。

「状況は…代々想像がつかぬ。」

後から来たアレンが、路地裏を見回して言う。

「朱雀が…朱雀が居なくなっちゃう…！」

美穂は泣き崩れてしまった。

魔術船に戻ってきた黒鬼たち。

冷たくなったジートをベッドに寝かせる。

あのまま放っておくわけにはいかないし、亡骸はやっぱりきちんと葬ってやりたい。

美穂はアスカに身体中についた血を、拭いてもらっていた。

「もう大丈夫よ、怖かったわね。」

美穂はまだ体が震えている。

「どうしよう…朱雀が戻ってこなかったら…！」

また美穂の瞳から涙が溢れた。

「大丈夫よ、黒鬼ちゃんが探しに行っただし。」

それに…朱雀君が今一番辛いんだから、美穂ちゃんが支えないと。貴女だけなのよ？

朱雀君を支えられるのは。」

アスカが背中を摩りながら、優しく言い聞かせた。

「そう…ですよね。」

もう泣きません。」

アスカはフツと笑った。
なんて素直な子なんだろうと。

同時にアスカは、美穂を悲しい目で見ていた。
背中を拭いていると、彼女が衰弱していつてるのが、よくわかる。
痩せている背中を見ると、アスカは辛くてたまらなかった。

「ほら着いたぞ。」

黒鬼の声。

朱雀を連れ、帰って来たのだ。

アスカは美穂の服を整えてから、朱雀の所へ走った。

「朱雀君！」

アスカは、朱雀を抱きしめた。

「アスカさん……。」

「……さ、早く着替えてらっしゃい。」

話はそれから聞くわ。」

朱雀が着替えに行ってから、アスカは黒鬼と話し込んだ。

「朱雀君どう？」

「かなり精神的にきてるな……。」

黒鬼はため息をついた。

「アレン君が言ったことは本当かしら。」

朱雀がジートを殺したことだ。

「本当だろう、他に説明がつかない。」

これが真実なのだ。

朱雀は服を着替え終わり、部屋から出てきた。

虚ろな目の朱雀。

「アスカさん…俺、ジートを…」

朱雀は俯き、拳に力を入れる。

「朱雀くん。」

何があつたとしても、帰つてらっしゃい！」

アスカは怒っている。

朱雀が人を殺めたことではなく、違つことに。

「貴方が望んだ結果ではないでしょう？」

もつと自分を大切にしてい！」

「アスカさん…。」

顔を上げた朱雀にアスカは微笑んだ。

「額の怪我、ちゃんと手当しときなさいね。」

それと美穂ちゃんに会つてあげて。」

“美穂”

その名前を聞いたとき。

朱雀の心は痛んだ。

美穂に…彼女に会つたら何て言えばいいだろう。

「はい…。」

そう言つて美穂の部屋へと向かつた。

静まり返る船内を歩いて、美穂の居る部屋の前まで来た。

ノックをしようとしたが、朱雀は止めてしまった。

扉の前に立ち尽くす。

いくら考えても、美穂にかける言葉が見つからない。

そんなときだった。

「朱雀、そこに居るの？」

目の前の扉が開き、美穂が顔を出す。

「美穂…。」

彼女の顔を見ることができない。

「お部屋でお話しましょ。」

そう言われて部屋に入ると、日向が居た。

朱雀の顔を見るなり、部屋を出ようとする。

「あたし、またあんたに酷いこと言いそうだから。」

すれ違いざまに言われた言葉。

日向なりに気を使ってているのだろう。

あまり気を使ってほしくないと、朱雀は思っているのだが。

「朱雀、私は…」

「俺が怖い？」

朱雀の言葉が、美穂の言葉を遮った。

「怖くないよ、貴方は私を守ってくれたんでしょ？」

朱雀は言葉が出ない。

きつと怖がつていると、思ったから。

「貴方の罪は私も背負う、だから…ね？」

そう言っただけで差し伸べられた手。

朱雀は手を伸ばす。

しかし、また朱雀に殺意が起こる。

そして…

パシッ！

美穂の手を払いのけた。

美穂は驚き、朱雀を見つめている。

朱雀自身、何故こんなことをしたのかわからない。

「ごめん美穂！…ごめん。」

朱雀はその場から、走り去ってしまった…。

「朱雀…！」

後ろから美穂の声が聞こえても、止まることはなかった。

風が吹くラウンジに朱雀は居た。

柵を握りしめ、外を見つめる。

何故あんなことをしたのだろう。

時々起こる美穂への殺意…。

大好きな人なのに。

大切な人なのに。

守りたい人なのに…！

彼女は人殺しの自分を受け入れると言った。

それなのに…。

「朱雀。」

後ろから美穂の声。

振り向くと、心配そうな顔をしていた。

「ごめん…俺、何であんなことしたのか…。」

「そんなこといいのよ、気にしてない。」

それより朱雀、我慢してない…？

朱雀は首を振った。

「私には無理している様に見えるの…。」

言いたいことあるなら言っつて、私が聞いているから。」

そう言っつて、微笑む美穂。

朱雀は押し殺していた感情がぼつぼつと、溢れ出ていた。

美穂に背を向けて、朱雀は話し始める。

話すというより、朱雀の心の叫びだった。

「人殺しはどんな理由であれ、許されないことだ。」

でも、

俺はジートを殺した。

殺したんだ！」

朱雀は柵を思いきり殴った。

「親友だったのに…！」

朱雀は泣き崩れていた。

美穂は声を出して泣く朱雀に、歩み寄った。

彼の背中に寄り添い、彼女もまた涙した。

「辛いよね、苦しいよね…。」

ごめんね、こんな思いを一人で背負わして…。

ありがとう、それでも生きていてくれて。」

しばらくの間、

二人は寄り添い泣いた。

言い様のない

痛みと

苦しみに

押し潰されそうになりながら

朱雀はそれでも、生きていこうと思っ

一緒に泣いてくれた美穂の為に

心の叫び（後書き）

前回と今回は、朱雀の苦しみを表すのに苦労しました。
もし自分が友達を殺してしまっただら？
そう考えながら、執筆しました。

by 黒穂。

壁の向こうへ

アスカの目が潤む。

頭を下げる朱雀を、見下ろす形になっている。
朱雀が何故頭を下げているのかというと、
アスカの妹アヤカをジートは殺した。
それを詫びているのだ、彼の代わりに。

アヤカは涙を拭い、頷いた。
「頭を上げて。」

朱雀君、“ジート君”。
貴方たちのせいではないわ。」

頭をゆっくり上げる朱雀。

そして、ジート。

アスカは朱雀の隣に、ジートが見えた。

「アスカさん……。」

朱雀もジートが共に詫びているのを感じていた。

「アヤカの亡骸は何処に？」

「海……です。」

朱雀は頭に浮かんだ言葉を呟いた。

ジートが朱雀に伝えているみたいなのだ。

「そう……よかった。」

あの子が好きな海で。」

海はそう遠くない場所にある。

ジートが短期間で行くにも、おかしくない距離だった。

「アスカさん、どうして……？怒らないんですか？」

アスカは泣かなかった。

それに怒りもしない。

「あなたたちに怒っても仕方ないわ。

悪いのはあなたたちの、心を踏みにじるブイオよ。」

朱雀は再び頭を下げる。

少し体が軽くなった気がした。

(またな、ジート…。)

朱雀はジートが安心して、向こうに逝けたんだと思った。

「さて、最後にジート君に会ってあげて。」

朱雀はアスカに連れられて、個室に移る。

ジートの亡骸の前に、目を逸らしてしまいそうになる。

現実から逃げちゃ駄目だ。

朱雀はジートの顔を見る。

友達に斬られたというのに、なんて穏やかな顔をしているのだろうか
と思った。

「見て、朱雀君。」

アスカはジートの服を少し脱がした。

朱雀は息を飲んだ。

ジートの体には、朱雀に斬られた傷以外にも無数の傷が…。
前にアヤカが言っていたことを思い出す。

自虐趣味のある変態

やはりジートのことだった。

「ブイオはジートを洗脳して、こんなこともさせてたのか…！」
ダンツと壁を叩く。

それでも、怒りは治まることはない。

「怒っても仕方ないだろ？」

ノアが杖をつきながら入ってきた。
続いて美穂と日向が入ってくる。

「だって…」

「まあ聞けつて、しよっぜ作戦会議。」

朱雀は首を傾げた。

バサッ

音を立てて、地図が広がった。

「問題があんだ、いろいろとな。」

皇女様を死なせないために、壁の向こうの神殿に向かわないといけない。
「ない。」

残る神殿は、世界を分けている壁の向こうにあるのだ。

「それがどうかしたのか？」

朱雀は何か問題があるのか、とノアを見た。

「覚えてるか？戦争が始まること。」

朱雀は顔をしかめた。

「明日ヒューマ族の侵入を防ぐために、壁を強化するらしい。」

強化されたら、突破は不可能だ。」

「そんな！」

朱雀は地図が広げられている机に、バンツと手をついた。

今からではとても間に合わない。

「そこでだ。」

壁が一部強化されない部分がある。」

朱雀はハッとして、再びノアを見る。

「騎士団の突入口…！」

「正解。そこから突破する。」

それなら上手くすれば、大丈夫だ。

朱雀はほつと、肩の力を抜いた。

「問題はここからなんだよな。」
「まだあるか!？」

朱雀も日向も、アレンでさえも頭を抱えた。

「こ、今度は何だ…?」

「いやぁ壁を突破するときに、結構な衝撃があるんだよな。」
先に言え!

美穂以外、ノアを睨んだ。

「ほら、壁つて魔術でてきてるじゃん。」

壁の中は魔術の渦だから、さ。」

お気楽に言うノア。

朱雀はキレかかっていた。

朱雀や日向はどうかになる、問題は美穂だ!

衰弱している体には、突破は無理なのだ。

「ノア: いい加減なことを!」

朱雀は剣術の練習に使う木の棒を拾い、ノアに降り下ろした。

ノアは杖でガードする。

「受け止めるなノア!」

「怪我人だつっの!」

それはもう、友達同士のケンカになっていた。

「朱雀、ノア君。」

美穂の声にピタリと止まる。

「私は大丈夫。」

だから、ノア君が言った通り突破しよう?」

朱雀とノアは顔を見合わせ、渋々頷いた。

「それでも何か対策をしないと。」

アスカはアレンに視線を送った。

何か良い案はないかと聞いているのだ。

「対策、できなくはない。ただし、朱雀に負担がかかるがな。」
さすがアレンと、皆頷いた。

「朱雀、どうやらお前は、魔術とは別の力を宿しているようだ。
皇女を抱えたまま、その力を放出し続けておけ。」

魔術以外の力で、魔術を相殺しながら突破するというものだった。
相殺できるだけの、力がいるのだが…。

「力の使い方がわからないんだ…。」

朱雀は手にぐつと力を込めたが、何も起きない。

「3日だ、3日間お前の特訓をする。」

そうアレンが言う。

それ以上長引けば、何もかも手遅れになりかねない。

「…わかった。」

3日間で完全に力を使いこなせなければならない。
できない、では済まないのだ。

「私たちもなるべく協力する、無理しないでね朱雀君。」

こうして、朱雀の特訓が始まった。

アレンと黒鬼が主に、特訓の相手をした。

アレンと剣を交えて、戦うことで力を引き出し。

黒鬼に精神統一による力の引き出し方を叩き込まれた。

そして特訓の最終日。

「はっ！」

朱雀は手に力を込める。

赤い光の玉のようなものができる。

今度は全身に力を込めて、体を力で覆おうとした。

しかし、直前でパンツと弾けてしまうのだ。

「なんで…できないんだ…！」

朱雀は一人頭を抱えた。

寝る間も惜しんで特訓、特訓。

それでもできない。

朱雀は焦り、苛立ち始めていたのだ。

「よっ、朱雀。」

朱雀は声の方を見る。

「ノア、か…。」

それは杖をついたノアだった。

「何の用だ？」

「冷たいんじゃないの？」

悩んでるみたいだから、アドバイスにな。」

ノアは口の端を吊り上げた。

いつものノアの笑い方だ。

「余計なお世話だ。」

何でもできるお前にわかるわけ…。」

「朱雀…。俺が何もしないで、できてると思ってるのか？」

いつもより声のトーンが低い。

そして真剣な眼差しで、手を差し出した。

ノアは朱雀に手のひらを見せる。

朱雀はそれを見て驚いた。

ノアの手のひらには、深い傷が刻まれていたのだ。

それは来る日も来る日も、練習をかかさなかった手だった。

「ごめん…。知らなかった。」

「いいさ。アドバイス、聞いてくれるよな？」

「もちろん。」

ノアは返事を聞くと頷いた。

「お前は力が入り過ぎてる、もっと力を抜け。」

「えっ？」

思いもよらない返事に、拍子抜けしてしまった。

「お前はいつも力み過ぎてるんだよ。」

完璧に、絶対に、とか考えないでやってみるよ、上手くできると思うぜ？」

確かに朱雀は真面目で、何でも必死になりすぎてしまう。

しかしそれをどうにかして、できるものなのかと朱雀は疑問に思った。

「やってみる、なるべく嬉しいこととかを考えると？」

こうなればいいと思ってることでもいい。」

楽しいことを思い浮かべろ。

ノアの言う通りに、目を瞑り想像してみる。

思い浮かんだのは、美穂の顔。

初めて会った時から、一番大切な人。

これからも守っていききたい。

そして、ずっと一緒に居たい。

ポウ…

朱雀は体に異変が起こり、目を開けた。体を赤い光が包み込んでいた。

「できた…！」

朱雀は自然と笑顔になる。

「それでいい。それでいいんだ朱雀！」

ノアは微笑んだ。

「ノア…。」

朱雀はノアのこんな笑顔を初めて見た。

「俺はいつも何考えて練習してるか、知ってるか？」

ノアがにこやかに言う。

「何って…大切な人のこと？」

ノアは違うと首を振った。

「晩飯何かな…って思ってる。」

朱雀は転けそうになった。

軽すぎる…！

こんなこと考えながら、剣を振るってたのかと朱雀はため息をついた。

戦いの最中にそんなこと考えるなんて…

やっぱりノアは天才だった。

「なあ朱雀、お前俺の質問に大切な人とかって言ったよなあ？」

確かに言った。

そのどこが面白いのだろう？

「お前が大切な人のことを考えたから、俺にそんなことを言ったんだろ？」

また皇女様のこと考えてたんだな！」

「…！！」

ズバリと当てられ、

朱雀は赤面した。

こうして3日は過ぎ

壁を突破する時が来たのだった。

壁の向こうへ（後書き）

次から壁の向こうの話になっていくのですが、その前に番外編を書こうと思います。

読んでくれている方々、ありがとうございます。
これからもよろしく願います。

by 黒穂。

番外編？（前書き）

朱雀たちと別れた後のアレンと黒鬼の話。

番外編？

朱雀たちと別れた後、アレンは鬼狩りの仕事に取りかかった。

鬼による被害が多数報告されていたのだ。

黒鬼はというと、ゴーストタウンで後始末をしていた。

自分の血を飲まされ、狂気に吞まれた者たちを楽にしてやるのだ。

黒鬼は死体を葬ってやり、兵士たちに指名手配されるべきは自分だと告白したのだった。

黒鬼はせめてもの償いに兵士に捕まろうかと考えたが、アレンが残って手伝ってくれた方が良いということで、魔術船に留まることになった。

ガツガツとアスカが作った料理を食べる。

もっと女らしくできないものかと、アレンは呆れた顔で黒鬼を見ていた。

ガシャン！

黒鬼は持つていたフォークを急に壁に投げつけた。

「う…ああ…！」

そのままうめき声を上げ、アレンに飛びかかる！

アレンは素早く黒鬼の腕を持ち、床に押さえつけた。

いつものことだった。

「離せ！離せー！！」

黒鬼は暴れる。

アレンはひたすら押さえつけていた。

何故暴れだしたかといえば、黒鬼は血が欲しいのだ。

今までずっと人間の血肉を食らってきたのだ、そう簡単に普通の人間と同じ生活に戻れないのだ。

アレンは昼間は鬼を狩り、夜は黒鬼を見張る生活が続いていた。昼間は理性がある黒鬼だが、夜になると狂気に取りつかれそうになるのだ。

深夜黒鬼の叫び声が聞こえる。

アレンは自分の部屋に居るのだが、ずっと起きていた。うなされるのも毎晩のことだ

これは黒鬼が誰にも頼れず独りで戦ってきた証拠だった。アレンは何も言わずに、ただ見守っていた。

朱雀たちと別れてから、何日か経った頃ある事件が起こった。

5人の男が倉庫で虐殺されていたのだ。

黒鬼の犯行とよくにている為、理性と狂気を持つ鬼だということがわかった。

「アレン、今回は私も協力しよう。」

このことを聞き付けた黒鬼が言う。

「お前はなるべくここに居ろ。」

「何故だ？私と同じ力量の鬼だぞ、私に負けたお前が勝てる相手ではない筈だ。」

アレンは何も言えなかった。

黒鬼が言っていることはもっともだった。

「だがな、不安定なお前を連れて行ってどうにかなられても困る。」アレンの言い分も、正しい。

黒鬼が途中で狂気に吞まれてしまったら、アレンはそれこそ最大のピンチだ！

ちっと舌打ちをして、黒鬼は出ていった。

何かと不満はあるだろうが、我慢してもらおうしかない。

「アレン君、黒鬼ちゃんにちゃんと本音をいわないと…。」
アスカが声をかける。

「本音？そんなものはない。あいつに言ったこと全て本心、あいつは足手まといになるだけだ。」

そう言つて、部屋に戻つていった。

アスカはため息をついて、操縦席に戻る。

2人の問題…というより、これはアレンの問題なのだ。

「アレン君がもっと素直なら、いいのだけれど。」

そしてアスカは、またため息をついた。

黒鬼は息を殺して隠れている。

敵はすぐそこにいるから、うかつに動けないでいた。

見た感じ、敵にあまり魔力の波動を感じられない。

（力はおそらく私より下か。）

その敵、事件を起こした鬼を見つめ黒鬼は確信した。

勝てる、と。

黒鬼は足に力を込めると、勢いよく床を蹴つてその鬼に飛びかかった！

空中で体制を変え、体を一回転させて、遠心力たっぷりの蹴りをその鬼に叩き付ける！

鬼は倒れ、動かない。

黒鬼がほっと息をついたまさに その時

後ろにその鬼の気配がしたのだ…！

黒鬼は背中を蹴られて、壁に激突する。

ぐらつく頭を押さえながら、その鬼を見た。

「最強の鬼と呼ばれた奴だつて聞いたから、どんな奴かと思えば…。」

こんなへぼ野郎だったとわな！」

甲高い声で笑いこける。

「さっきのは…お前の残像か？」

「そうさ。高速で移動することで、目の錯覚を起こさせる。」

目の前であざ笑う鬼は、唇は紫に染まり、皮膚の色も、所々赤や紫に変色している。

相当血を飲んだようだ。

それも、かつての黒鬼よりも大量に…。

(こいつはもはや人ではないな…。)

「黒鬼さんよお、血、ほしいだろ？」

鬼が手を差し伸べる。

黒鬼体は血を飲まないことで人間、ただの女に成り下がりはじめていた。

「そんなもの、もう必要ない！」

パシッと手を払う。

「そうかい、じゃあ。」

俺に食われな！」

鬼は怒りと、狂気に満ちた。

息を荒げひたすら走る。

こんなに息が荒れたのは何年ぶりだろう。

普通の人間が相手なら、とっくに撒けてる筈だ。

しかし相手は早い、しかもまだ本気で追ってきていないだろう。

黒鬼は鬼に背を向けて、ひたすら逃げていた。

鬼は痛めつけてから、殺そうとしているらしい。

「くそっ…！」

勝てない。

初めて味わうこの、敵わないという状況。

辺りを見回したが、何もない空間。

身を守るものや、仲間などいない。

アレンに黙って出てきたことを少し後悔した。

(今更後悔しても遅いな……)

やれるだけのことは、やってやろうと思ひ。

黒鬼はくるつと鬼に向き直り、魔力を込めた。

そして次の瞬間には、鬼に撃ち込んだ！

「……。痛ってー！顔に傷がついたじゃねーかあ！！」

鬼は頭を抱えて絶叫する。

黒鬼の攻撃は直前でギリギリ避けられ、頬に傷をつけただけだった。

「死ね！！」

鬼は爪を立て空を切った。

ズバツと生々しい音がし、黒鬼の体から血が吹き出した！

「ぐっ……！」

膝をついたが何とか持ちこたえる。

体のあちこちが裂けて、血が流れ出す。

「さすが元最強の鬼、急所は外したか。だが次はない、俺が最強の

鬼だ！！」

そう言った途端、フツと姿が消えた……。

自分はこれで死ぬのだろう。黒鬼は覚悟した。

未練などない。元々失うものなど何もないのだ。

クロサスという名を捨てた時から。

ただ……1つ心残りがある。ジェルド、カオスそしてバイオから、

美穂を妹を救ってやれないことだ……！！

一瞬敵が剣を振りかぶる姿が見えた。

次の瞬間には首を斬り落とすだろう。

黒鬼は目を閉じた。

数秒が数時間に感じらる。

すると頬に冷たい感触。

刃がすぐそこまで迫っているのだ。

しかしいつまで経っても痛みが襲ってこない。

もしかして、一瞬で首を落とされ、痛みを感じなかったのではないか？

黒鬼は恐る恐る目を開いた。

そして首元を見ると、鬼の刃が何者かの刃に阻まれていた。

黒鬼の目は途端に見開かれる。

その刃に見覚えがあつた。手入れされて、光を放つ刃。

アレンの剣だ！

「なっ…！」

「間に合ったか…。」

アレンは黒鬼の首元にある刃を退ける。

「勝手な真似はするな！」

アレンは黒鬼に向き直ると、そう怒鳴つた。

「勝手な真似だと？お前が足手まといだと言つたから、一人で来たんだ！」

黒鬼も怒鳴り返す。

「そのせいでお前を探すのに苦労した！」

「探さなければいいだろう！」

睨み合う二人。

アレンはフツと目を伏せた。

「…心配、したんだぞ。」

ボソリと呟かれた言葉に、黒鬼も目を伏せた。

「すまない。心配かけたな。」

この会話こそが2人の本心だつた。

「何を話してんだ、まとめてぶっ殺してやる!!」
飛びかかってきた鬼。

アレンは黒鬼に目配りした。
やれるか?の合図だ。

黒鬼は軽く頷き、身構えた。
傷口からは血が出て、元々弱かった片方の足が痛んだが、少しなら
戦える。

アレンは素早く剣で鬼の爪を防いだ。
ギン、ギンと剣を鳴らしながら、壮絶な戦いが繰り広げられる。

いきなりアレンは魔力を込め、それを爆発させたのだ!

「何だと!？」

鬼はバックステップで、爆風から逃れた。

「あいつ、自爆しやがった!!」

鬼はまだアレンのいた場所を見ていた。

その時、鬼の体に異変が起こった。

鬼の体を貫通する黒鬼の腕。

黒鬼の腕が鬼の体を貫いていた!

アレンは囷になったわけだが、手を少し火傷しただけだった。

「くそつ、油断した…!」

鬼は血を吐くと、痙攣し、白眼を向いて地面に落ちていった。

そして黒鬼は空中で意識を失い、目の前が真っ暗になった……。

真っ白な天井が見える。

「私は、死んだのか…?」

黒鬼はぼうつとしながら言った。

「いや、生きてる。」

隣にはアレンが。

ずっと付き添っていたのか、少し疲れた表情をしている。

魔術船の病院のようだ。

「……今回の戦いで、私は自分がどれほど無力なのか分かった。ただの女だ……！」

黒鬼は悔しそうに、拳を握った。

「そうだ。お前はただの人間で女だ、鬼なんて化物じゃない。」

黒鬼はえっ？という表情でアレンを見た。

「だから……頼ってくれていい。居場所がないなら俺の傍にいろ、どこにも行くな……。」

アレンがそう言うと、黒鬼はアレンの胸にしがみつく感じになっていた。

「お、おい！」

「辛かったんだ……。」

アレンは黒鬼を引き剥がそうとしていた手を止めた。

「城には帰れない、私の存在は抹消されている、そして私は人殺しだ。誰にもそんな言葉をかけてくれなかった、助けてくれなかった……！」

泣き出した黒鬼をアレンは無意識に抱きしめていた。

「お前が……アレンが許してくれるなら、ここに居たい……。」

「ここに居る。これからは俺がお前の盾になってやる。」

こっそり様子をうかがっていたアスカは、にっこりと微笑んだ。

番外編？（後書き）

アレンと黒鬼の話を一度書いておこうと思いましたが、皆様は、二人の関係をどのように感じたでしょうか？

ちなみに

私はこの二人大好きです。

b y 黒穂。

番外編？（前書き）

主に日向の過去です。

番外編？

「どうもすみませんでした。」
目の前で頭を下げている男を、まじまじと見つめる日向。
男というにはまだあどけなく、少年だった。

壁の突破を明日に控えた今日。

この頭を下げている少年、季色は日向を追いかけて来てしまったていた。

一行が見守る中、日向の沈黙が続く。

（一行と言ったが、主にアスカが興味津々だ。）

日向は頑固だし、怒ると手がつけれられない。

朱雀は季色を少しかわいそうだと思った。

「あのさあ」

沈黙の末、日向がようやく発言した。

季色の顔が僅かに強ばった。

「あんたが悪いと思ってないんだよね。」

「えっ」

季色は口を開けたまま固まってしまった。

日向が怒っていると思ったのだろう。

「だって陣が悪いじゃん、ていうか全部バイオのせいだし。」

日向は季色が悪いとはとても思えなかった。

佐月を殺したのは陣だ。季色はただ利用されただけ、季色も水色も一種の被害者なのだ。

そして陣は、バイオの呪縛によって動かされていた。

ジートのように。

「だから謝るくらいなら、バイオの呪縛をどうにかするの手伝って。」

「

「…おう！」

日向の言葉に季色は目を輝かせ、顔が真っ赤になっていた。

「話は済んだわ。朱雀君は特訓してらっしゃい。」

アスカは良かったと和みながら、朱雀に告げた。

壁を突破する特訓だ。

朱雀は頷き、アレンと共に出かけていった。

朱雀が特訓している間は、皆それぞれ仕事をしたりしていた。

ノアはアスカに監視の元、休養中。

美穂は黒鬼に王族や、社会、経済、歴史などの忘れてしまったことを習っていた。

水色は船内をうろつき回っている。

季色は日向の隣に居て。

日向はラウンジで、昔のことを思い出していた。

蘇る思い出。

それは佐月と過ごした楽しい日々だった、そして辛い日々だった。

「うわーん！」

大泣きしながら妖狐の少女は扉を叩く。

扉は少し開かれ、少年が顔を出した。

「どうしたの日向？」少年は少女よりも年上で、まるで妹を見るような目をした。

「楓じいが〜。」

「また大爺様か。気にしちや駄目だ、あの人は気遣いというものがない。」

少年は日向の頭を撫でてやった。

「ねえ佐月。」

「佐月お兄ちゃんだろ？」

佐月と呼ばれた少年は、いたずらっぽく笑った。

「だって幼なじみだもん。兄妹じゃないもん。」

「わかったよ、佐月でいいから。それで何か用かい？」

日向は手に持った鞆を手渡した。

「一緒に遊ぼう！」

佐月は日向と一緒に蹴鞠をして遊んだ。

ここは世界を分けている壁に近いため、向こうのものが残っている。例えば着物とか、鞆とか。

家々などもそうだ。

ここの村は、妖狐が住む村。

妖狐とは魔力とは別の力、妖気を多くもった狐で、妖気を多くもつと人間の姿に近づく。

耳と尻尾が妖狐の証だ。

家柄などは厳しく、特に村長の楓は恐れられていた。

そんな村長に日向はことごとく歯向かい、罰を与えられ泣いて佐月に駆け寄ってくるのだ。

蹴鞠をしていると、辺りがやけ静かなことを佐月気付いた。静か過ぎる。

村の妖狐たちの声も、鳥や動物の声が一切しない。

「佐月ー？」

日向が膨れっ面で佐月を呼ぶが、返事がない。

「日向、ちょっとここに隠れてて。」

「何？どこ行くの？」

日向にも佐月の不安が伝わっていた。

「大爺様を見てくるだけだから。」

「私も行くー！」

「駄目だ。来たらいけないよ、待っててね。」
そう言うと、佐月は日向を残し楓の元へと向かった。

「大爺様！大爺様！」

佐月は探し回った。

村の妖狐たちはどこにもいない。

村長も家にはいなかった。

「一体何処へ…。」

佐月は村の食料庫へ目を向けた。

木で出来た、小屋だ。

あそこは人通りが少ない。

「まさか食料庫に…？」

食料庫に近づき、ゆっくり扉を開けようとした。

しかし、固く閉ざされている。

「仕方ない。」

佐月は手に力を込めて、扉に触れた。

するとポツと音を立て、火がついてあっという間に扉を焼き払った。

「…何だあ？」

そこにいたのは見知らぬ男と、縛られている妖狐たち。

その男こそ、陣だ。

この頃はまだ少年であった。

「…お前何をしている？」

佐月は睨み付けた。

「処刑する奴を決めるところだ。」

処刑？何を言っているのだろうか？

佐月はわからなかった。

「お前はブイオ神を信仰するか？」

陣は縛った妖狐の男に問いかける。

ブイオ神とはある宗教の信仰神で、無を説いた人物だという。

「信仰だと？馬鹿を言うな、ブイオの教えとやらは間違っている！」
妖狐の男は言い放った。

「そうか。」

陣がそう言った瞬間、妖狐の男はもがき苦しみ絶命してしまったのだ……！

「……！？」

佐月は駆け寄り、男をゆする。

いくら呼びかけても反応はない。

「何で……」

陣は何かする素振りを見せなかった。

「お前もブイオ神を信仰しないのか？」

陣が村長に問いかける。

さつきとは違い、鋭い眼差しで。

「……っ！わ、ワシらは……信仰しとる……よ。」

「大爺様！」

佐月は叫んだ。

ブイオの教えが間違っていると、佐月たちに教えたのは村長だった。

「私も信仰してます！」

他の妖狐たちも叫び出した。

「ほら佐月、お前も言わんか……殺されるぞ！」

村長はボソリと呟いた。

「お前はどうかなんだ？」

陣が佐月に問いかける。

「俺は……」

命を取るか、正義を貫くか。

「俺は、信仰しない……！」

その返事と共に陣の目が見開いた。

来る！

佐月はとっさに、妖気を解放した。

陣の目に見えない攻撃は何とか防げたようだ。

「やるな、お前。」

佐月は強かった。

この時点ではまだ陣も子供、力量は互角だった。

佐月は村の為に負けられなかった、そして死ねなかった。待っている日向がいるから。

戦いは佐月が押していた。

このまま一気に勝負を決めよう、そう思った。

その時だった。

陣が笑ったのは。

「お前気付いてねえーんだなあ、後ろの小娘によお!!!」

まさか

佐月は後ろを見た。

日向が走って来ている。

ハッとした時にはもう遅かった。

陣が攻撃を放っていた。

日向に向けて!

「日向!!!」

佐月は日向を庇うように、抱き抱えた。

少し時間が経った。

「佐月？」

陣が去った後も、佐月は動かない。

日向に馬乗りになってしている状態なので、佐月の息が聞こえる。虫の息だった。

目も、かろうじて見えている程度だった。

「佐月…？」

「日向…無事で良かった…。」

佐月は口から血を流した。

「よく聞くんだった日向、もう兄ちゃんは…一緒にいてやれない…。」

「佐月いなくなっちゃうの？そんなの嫌だ…！」

日向の目から涙が溢れ出す。

「日向のこと…空から見てるから…。だから、泣かないで？どんな時も笑ってほしい。」

佐月は脱力し、倒れ込む。

そしてゆっくり目を閉じ、呼吸もなくなった。

「嫌、嫌、嫌…！」

日向は錯乱状態に陥った。

「嫌…！」

甲高い声を発して、日向は妖気を解放した。

暴走した力は炎へと変わり、森を覆った。

止まることはない炎、そして憎しみ。

佐月の戦いを妨害し、森を焼き払った日向は罰せられることになった。

しかし、日向は自ら村を去った。

憎いあの男を探すために。

旅をするうちに、色々情報を手に入れた。

あの男はある宗教の信仰者で、信仰しない者を次々に殺している」と。

アクア国の王位後継者がブイオの宗教に深く関与していること。

そしてかつてブイオは、そのアクア国の王族だったこと。

すなわちその王位継承者はブイオの子孫に当たるということ。

日向はある決意をした。

それは、その後継者を殺すこと。

そうしてしまえば、ブイオの血縁は消える。

日向はアクア国に向かった。

王都アクア国。

大きな町だ。

その町にそびえ立つ城。

その城に、日向は忍び込んでいた。

忍び込むのは、妖狐の日向には容易いことだった。

妖術を使えば、日向は小さな狐に変身できる。

その能力を使ったのだ。

最上階の一番奥に、それらしき部屋があった。

「まるで牢獄ね…。」

最上階には窓が一切なく、部屋には鍵が何個も掛けられていた。

日向は扉をそっと引いた。

開くわけがないと思っていたが、すんなり開いてしまった。

隙間から覗くと、自分と同じ歳くらいの女の子と、騎士の姿をした少年がいた。

女の子の服装は高価なものだった為、すぐに後継者だとわかった。

(騎士が来ていたから、開いていたのね…。)

日向は構えた。

あの騎士はまだ入団したばかりみたいだし、後ろから一気に狙えば後継者を殺せるだろうと思った。

日向は扉から素早く飛び出し、鋭い爪をその後継者の少女に突き立てた。

その瞬間、日向は手首を捕まれ床に押さえ込まれた。その一瞬、日向は見た。

騎士の少年の目が鋭くなり、黒い目が赤い光を放っていたのを。

「いったーい!!」

日向は思わず声を上げた。

「あつ、ごめん！痛かった?!」

紺青色の髪をした少年は、謝ってきた。

「痛いに決まってるでしょー!」日向は暗殺のことも忘れていた。

「ごめんね、体が反応してまったんだ。」

少年の雰囲気が変わった。

日向はそう感じた。

今は普通の少年だが、さっきはもっと強大な力を感じた。

「大丈夫ですか?」

手を差し伸べてきたのは、後継者の少女。

「私は美穂、よろしくね。」

その少女は笑顔だった。

この子を殺すなんてできない。

日向は直感的にそう思った。

これが美穂、朱雀との初めて会った瞬間だった。

「おい、日向。」

季色の声に、日向はハツとした。

いつの間にか色々思い出していたようだ。

「どうしたんだ？」

「ちょっと昔のこと思い出してただけ。」

日向は笑う。

季色も笑ったが、すぐに真剣な表情に戻った。

何故なら、日向が涙を流していた。

「あれ？」

日向は涙を拭う。

「何で泣いてるんだろ、あたし？佐月に笑っててっって言われたのに。」

日向は泣き出してしまった。

何年も泣いていなかった分、涙が止まらない。

季色は無言のまま、日向の手を握った。

初めて女の子の手を握った為、顔が赤くなる。

「俺は死なないから。」

そう一言だけ呟いた。

その横顔は、いつもより大人だった。

日向はそんな季色に、佐月の面影を重ねてしまう。

それでは駄目なのだ。

季色という男をまだ見れていないから。

「いつか貴方を見れるようになるまで、待っていてくれる？」

日向は呟いた。

貴方と初めて呼ばれたことに季色は、認めてくれたんだと感じた。

「いつまでも待ってる。日向が俺を見てくるまで、待っているから。」

日向は季色の手を握り返し、もう一度笑った。

どこまでも広がる青い空。

佐月がそっと笑った。

そんな空だった。

番外編？（後書き）

風邪を引いてしまいました、更新が遅くなってしまいました。
ごめんなさいっ！

上手く書けたか微妙な番外編ですが、読んでくれると嬉しいです。
この人物の過去などを書いてほしいというものがありません、できただけ分かりやすく書きますので遠慮なく感想より連絡ください。

番外編はこれでいったん終わり、次回から話を進めますね。

今回はとうとう壁を突破し、向こう側の世界へ朱雀たちは行きます。
壁の向こうで何が待ち受けているのか？

楽しみにしてくださいませる方がいれば、幸いです。

by 黒穂。

突破

「騎士たちにはあまり気付かれるな、面倒だ。」
ノアはそう指示をする。

朱雀さちは突破口付近に来ていた。

まだ辺りは朝靄がかかっている。

人影も少なく、突破するには絶好の機会。

しかし朱雀たちは動かなかった。

というより、動けなかった。

目の前には城にいた神官たちがいたからだ。

そもそも何故隠れる必要があるのか？というところ、朱雀と美穂は通してもらえないだろう。

壁の向こうにバイオの神殿があり、ジェドルドは7つの神殿を巡れと言ったからだ。

当然護衛に命じられた朱雀も通してもらえない。

しかし、アレンたちは違う。

全く関係ない、部外者なのだ。

アレンたちは通してもらえないだろう。

アレンたちには来てもらう必要があった。

ジェドルドが何かを企んでいる今、朱雀と美穂だけではどうにもできない。

仲間の助けが必要だった。

「このままでは良知が開かん。」

アレンは朱雀と美穂に耳打ちする。

「わかりました。」

美穂が不安そうに頷いた。

「皆、大丈夫なのか？」

朱雀がアレンたちに問いかけた。

「ああ。こいつらは俺が守ってみせる。」

アレンがゆっくり頷く。

アレンになら全てを任せられる。

「まっかせてちょうだいよ！」

日向がピースする。

ちよつと不安だ。

「大丈夫。」

アスカの戦ったところを見たことないので、不安は残る。

「ノア様がやられるかよ！」

いや、お前はやられたからな。

「無論、私は負けん。」

黒鬼は放っておいても、大丈夫そうだ。

美穂と朱雀は、神官たちへと歩みよった。

「私はアクア国王位後継者及び現聖女、バイオナ・M・アクアです。」

昨日朱雀が教えた言葉を言う。

今は美穂は神殿を巡る聖女。

聖女になったものは、バイオナと改めて命名されるのだ。

それにしても、美穂は間違えずにスラスラと言ってみせた。

記憶のない美穂には意味のわからない単語だらけだ。

それはすごいことだと思った。

「聖女バイオナ様、そして護衛朱雀。お通りください。」

神官や騎士たちがよそを向いたその時。

アレンたちは神官や騎士たちに飛びかかった。

あっという間に神官、騎士を全員気絶させたかった。

若干黒鬼の目が本気だったような…。

「早く始める。」

朱雀は美穂を抱えて、力を込める。特訓の成果を示す時だ。

力が朱雀と美穂を包み込むのに、少し時間がかかる。妨害されたり、朱雀の集中が乱れたりすれば、どうなるかわからない。

それくらい力を放出するのだ。

その間、アレンたちが朱雀を守るのだ。

さっきの神官や騎士たちが見れば、大騒ぎになりかねない。

ジエドルドは何故美穂の護衛に朱雀を選んだのか。

それは朱雀を魔術が使えず、自分の脅威となることがないと思ったからだろう。

今誰にも気付かれてはいけないのだ。

ドドドド…！

大きな音がし、魔術船が姿を現した！

アスカの魔術船と同じような船だった。

船の扉が開くと、騎士たちが一斉に降りてくる。

その後ろにはジエドルドがいた。

「あの大臣が来ることは計算外だったな…。」

騎士たちが来ることは予測していた。

しかしジエドルドまで来るとは誰も考えていなかった。

アレンは剣を構える。

「アレン！」

「お前は続ける、ここは俺たちがやる。」

騎士たちは容赦なく攻撃してくる。

騎士たちは主に朱雀とノアの顔見知りだった。

「お前ら、小隊長の俺にいい度胸だ！」

ノアは怪我をしているため、片手で戦っている。

一人の騎士がアスカに襲いかかった！

「アスカさん！」

朱雀は叫んだ。

しかしアスカは悲鳴一つ上げず、構えをとり…。

次の瞬間には騎士を投げ飛ばしていたのだ！

「国家資格を持つって、こういうことよ。」

アスカは朱雀にウインクする。

並大抵の努力では国家資格を取ることができないのだ。

ホツとしたつかの間。

全身と美穂を赤い光が包み込んだ。

「アレン、もう突破できる！」

アレンは振り向いたが、すぐ騎士が来て戦闘が始まる。

人数が多すぎるのだ。

黒鬼が大勢倒しているものの、次から次へと騎士が襲ってくる。

「朱雀先に行ってる、日向お前も行け。」

「でもアレンたちは…。」

「俺たちは後で行く、時間がないんだ。さつさと行け！」

朱雀はためらったが、時間がないのは確かだ。

朱雀が力を放出できるのはせいぜい20分。

それまでに、壁を突破しなければならぬ。

日向に押され、朱雀は壁の中へと入った。

壁の中は魔術が渦巻いていた。

灰色風が吹き荒れ、遠くが見えない。

ゴウゴウと鳴っている。

風は朱雀の放つ光に当たると、渦を巻いて消える。朱雀も美穂も、なんの痛みも感じなかった。

日向は迷わないように、朱雀の服を掴んでいた。

しかし歩いていくに連れて、日向は苦しそうにしていた。

日向は歯を食い縛り、必死に歩いている。

「日向、辛いのか？」

朱雀は話しかける。

歩みは止めずに。

「っ、辛いわけない！

さっさと行くわよ！」

辛いのだ。

苦笑い、それに冷や汗。

日向のこんな表情は久しぶりだ。

幽霊の話をしたときもこんな感じになる。

つまり、日向のピンチの表情だ。

一刻も早く突破しないとまずい…。

日向に倒れられては、どうすることもできない。

それに力を放出できるのも、あともう少ししかでそうにない。

朱雀は歩くペースを上げた。

朱雀も先程から変な汗をかいている。

朱雀の体が力に耐えきれなくなってきた。

ポウ…

「？」

朱雀は美穂の胸の当たりが光っていることに気が付いた。

朱雀の腕は震えた。

沸き上がる殺意。

いつの日かに、美穂を見たときと同じ感覚。

「何だ…これ…！」

「どうしたの朱雀？」

美穂は気が付いていないようだ。

朱雀からどんどん力が放たれていく。

相手は美穂、大切な人だ。

なのに…朱雀は美穂を殺そうとしていた…！

「朱雀、止めて…！」

不意に日向の叫び声が聞こえた。

「え…？」

朱雀がハッと気が付いた時には、もう遅かった。

朱雀が放出して膨張した力が、灰色の風と美穂の放つ光を巻き込んでゆき……

一気に爆発した…！

朱雀、美穂、日向は爆風で飛ばされる。

朱雀は荒れた視界に、美穂の姿を見た。

手を伸ばしている美穂。

朱雀も手を伸ばし、手をとろうとする。

しかし

「わっ…！」

2度目の爆発により、手をとることができず。

朱雀たちは四方八方に吹き飛ばされた。

叫び声と共に朱雀たちは

灰色の風に包み込まれた

突破（後書き）

大変遅くなりました。

テスト期間だったので、執筆が遅くなりました…。
ごめんなさい。

次回から、ヒューマの世界でのことを書いていきます。

これから朱雀たちにどんな困難が待ち受けているのでしょうか。

次回も是非読んでください。

by 黒穂。

新たな世界

ザワザワ

雑音がする

「早く来てくれ！」

「まさか壁の向こう側の奴か!？」

騒がしいな…。

「ん…。」

朱雀は頭を押さえながら起き上がった。

人だかりの中心に朱雀はいた。

「こいつ目は我々と同じ黒だ…どうなってんだ？」

目の前にいる人々は、皆黒の目と髪だった。

そして服装は、着物を着ている。

そう、壁を突破したのだ。

朱雀は辺りを見回す。

美穂と日向が見当たらない。

やはりあの爆風で、バラバラになってしまったのだ。

落胆している朱雀に、体格の良い男が近づいて来る。

「魔者は成敗してくれる！」

男は剣を抜いた。

剣? いや、違う。

朱雀たちのとは異なり、曲がっていた。

いわゆる刀だ。

本では読んだことがあるが、本物は初めてだった。

朱雀もこうしてはいられないと、剣を構える。

刀は何でも斬れると書いてあったからだ。

そして

両者同時に振りかぶる。

「お待ちなさい。」

不意に声がして、両者停止する。

「青龍様……！」

男はその場に膝まずいた。

青龍と呼ばれたのは、美穂と同じ年ぐらいである少女だった。

周りの者とは違い、高価な着物姿。

そして気品溢れる仕草。

美穂と似た雰囲気。

間違いない。

貴族、または王族だ。

朱雀は頭を下げた。

するとその少女は朱雀の手を取り、握りしめる。

「やっと、やっと帰ってきてくれましたね……。」

朱雀は首をかしげた。この少女を何処かで見たとある。

その声も、聞いたことがある。

(……………あ。)

朱雀は思い出し、顔をしかめた。

覚えているだろうか、美穂を今のうちに殺せと言った、あの少女だった。

「お前はあの時の……！」

「その話は……！」

少女は朱雀の声を妨げるように叫んだ。

「その話は、私の屋敷でしましょう。」

付いて来ると朱雀に言い、歩き出した。

朱雀は固まっていた。

少女が叫んだ時、真つ黒の目が青く光ったのだ…。
そして朱雀にはわかる。

あの少女が、あの一瞬でとんでもない強大な力を放ったのだ…。

大型の黒い馬車は、今日も同じ道を走り抜ける。

大きく黒い馬車は金持ちの証のようなものだった。

「勇哉様、実に良い天気ですな。」

「…。」

馬車の中の会話。

年老いた使用人が話しかけるも、主君勇哉は無言だった。

「何か勇哉様にとって、良い日ではないでしょうか。」

「…。」

使用人のご機嫌取りに、耳を傾けなかった。

過ぎ行く景色をただぼーっと見ている。

毎日これの繰り返し。

楽しくなかった。

父や母が死んで、自分が当主になった時から、覚悟していた筈なのに…。

毎日が楽しくない。

いつそ死んでもいいと思う。

ガコンツッ!!

馬車が急停止する。

「…何だ、何事だ。」

勇哉は冷ややかな目で、使用人を見る。

「そ、外で騒ぎが起きてるようですよ…。」

勇哉が窓から外を見ると、人だかりが。

「…少し見てくる。」

「ああ、勇哉様！」
使用人の言葉に反応せず、騒ぎの元へと歩み寄った。

「…何事だ。」

「何か変な女が倒れてるんだ、それも苦しそうに。」

（変な女…？）

勇哉は人混みをかき分け、その女を見た。
短く茶色の髪に、異国の服。

（魔者…！）

一目でわかった。

こちら側の世界には、着物しかないし。
皆、漆黒の髪をしていた。

その女…というより少女は、苦しそうだった。

発作のようなものを引き起こしている。

このまま放置すれば、死ぬかもしれない。

魔者は憎く死ねばいいと思うが、この少女にはまだ死なれては困る。
服装から見て、高貴な人物だろう。

「関係…あるかもな。」

勇哉は少女を抱えると、馬車に乗せた。

「勇哉様、その方は…？」

「連れて行く、放っておいたら死ぬだろ？」勇哉は少女を見る。

呼吸が荒い、それに腕が赤く腫れている。

骨が折れてるようだった。

（死なれたら困るしな…。）

黒い馬車は、颯爽と走り出した。

ゴウゴウと鳴る風
灰色の風
全てを包んだ

もう会えないのかな
貴方に

ゆっくり目を開けると、魔術船の天井：
ではなく、知らない天井が目に映った。

「あ……」

目から涙が溢れ落ちる。

「朱雀」

彼の名を呼ぶ。

「朱雀……？」

返事は返って来ない。

「朱雀ー！！」

頭の中が真っ白になって叫ぶ。

しかし彼の返事はない。

「黙れ！！」

怒鳴り声と共に青年が部屋に入って来た。

刀を抜き、美穂の首へ突き立てる。

突き立てられた首から一筋血が流れ出した。

「黙れ……さもないとその首撥ねる！！」

美穂は恐怖に固まる。

手に力を入れようとしたら、激痛が走る。

「片腕折れてる、じっとしている。逃げようなんて思っただけ……？」

青年がパチンと指を鳴らし、召し使いと思われる老人が出てきた。

「念のため、拘束しろ。」

老人は頭を下げ、美穂の足に拘束具をつける。

「あなたは誰…？」

美穂は目に涙を溜めながら、それでもまっすぐ青年を見つめる。

「勇哉…。」

青年は名前を告げると、部屋から出ていった。

「勇哉…さん。」

美穂はその名前を呟いて考え込む。

分からないことだらけだ。

分かることは、壁を突破できたということだ。

部屋を見渡す限りでは、今まで見てきたのとは雰囲気が違う。

現に今美穂が寝かされているのはベッドではなく、床に敷かれた布のようなものだ。

「ヒューマの世界に来たのね…。」

美穂は落ち着きを取り戻していた。

彼女は旅を重ねるうちに、様々なことを学んだ。
精神的にも成長したのだ。

旅を始めた頃の彼女ならば、訳もわからずに泣き続けていたことであらう。

美穂が落ち着きを取り戻したのには、もう1つ訳があった。

あの青年を見たとき、殺されるのではないかと恐怖した。

しかし青年と目が合い、確信したのだ。

この青年は自分を殺さない。

「何か訳があるのね、だから私を捕らえてる。」

美穂は折れている腕を見た。

「…手当てもしてきてくれる。」

包帯で固定されている腕。

「勇哉様はお優しい方ですから。」

先程の老人が部屋に入って来た。

「あなたはさっきの…。」

「使用人の寺戸です。お食事をお持ちしました。」

美穂は起こされ、器を渡される。

「片手で食べられますかな？」

「はい、大丈夫です。」

美穂はスプーンを渡される。

箸というものは美穂には無理だと、用意されたものだった。

「お口に合いますかな？」

「あ、はい。美味しいです。」

初めて味わうが、とても美味しかった。

「どうして私を捕らえるのですか？」

美穂はスプーンを置き、食べるのを止めた。

「それは…、口止めされてまして…。」

「そう、ですか…。」寺戸は申し訳なさそうに頭を下げる。

何かあるのだろう。

美穂は少し不安になった。

何かあれば朱雀が美穂を守ってくれた、しかし彼はいない。

「きつと大丈夫…。」

美穂は小さな声で呟いた。

不安に襲われるが、美穂の目は光を失うことはない。

運命が再び、朱雀に会わせてくれると

心から信じたのだ。

新たな世界（後書き）

また新たな世界で、朱雀たちの旅が始まりました。

朱雀は青龍、美穂は勇哉との出会い。

新たな人物が物語にどう影響するのか…。

日向は今回出ませんでした。が、ちゃんと生きてます；

次回には出せると思います〜。

皆様の期待通りに進んでいるか不安ですが、私らしく頑張ります。

b y 黒穂。

蘇れ記憶

皆は大丈夫だろうか…？

朱雀は青龍に付いて行きながら、考えていた。特に心配なのは美穂だ。

体の弱っている彼女は、あの風に耐えられただろうか？

考えれば考える程、悪いことばかり思いつく。

「お仲間が心配ですか？」

急に声して、朱雀はハツとする。

どうやら考え込んで、周りが見えなくなっていたようだ。

「勿論です…。」

朱雀の顔が再び曇ると、青龍は笑った。

「良いではないですか。この際あの子には死んでもらった方が朱雀も楽ですし。」

「…っ！！」

朱雀は手を振り上げた。

「ほら、着きましたよ。」

青龍の言葉に朱雀は止まる。

彼女の見方を見ると、大きな屋敷があった。

青龍は屋敷に入り、「こちらにどうぞ」と声をかけてくる。

朱雀はさつき振り上げた手を見て、ため息をつく。

「あの子に何をしようとしたんだか…。」

そう呟いて、朱雀も屋敷に足を踏み入れた。

屋敷に入ると、またしてもザワザワと騒ぎが起きていた。

「何事ですか？」

「青龍様！良かった、四神の皆様が居ないのでどうしようかと。」

異国の者を連れて来たんですが…」

四神。

その言葉に興味はあったが、それどころではなかった。

「異国の者って!?!」

朱雀は大声で叫んでいた。

美穂や日向の可能性が高い。

「ご苦労様、その者をこちらへ。」

青龍の指示に、屋敷の者たちが慌ただしく動き出す。

少しして何やらもめている声がある。

「こら、静かにせんか!」

「食べてる最中だったのに〜!」

この声は…。

「あ、朱雀。」

「日向!」

騒ぎを起こしていたのはやはり日向だった。

「無事だったか…で、美穂は?」

「へっ? あなたと一緒にじゃないの??」

サーッと朱雀の背筋を何かが抜けていった。

てっきり日向が美穂を連れて来ていると思った。

「青龍、美穂は!?!」

朱雀は青龍を揺さぶる。

「敵を助ける意味はありません。」

青龍は朱雀の剣幕に怯えることなく、微笑んだ。

「敵って!?!」

青龍が美穂を保護していてくれないのはわかっていた。

わかっていたが…

熱いものが込み上げてくる。

もう我慢の限界だ!

その時

パシッツと音が響き渡った。

青龍は頬を殴られる。

「あんだね、美穂がどんな子か知らないからそんなこと言えるのよ！！あの子が何をしたというの!？」

日向が青龍を殴ったのだ。

青龍は、涙目で怒っている日向を冷静に見つめる。

「あなたにしたら美穂は敵でも、あたしたちにとって大切な仲間なのよ！その仲間を敵呼ばわりするあなたは、あたしたちの敵よ!!」日向は堪えきれなくなったのか、涙を流しながら立ち去ろうとする。

「何処に行くんだ…?」

「美穂を探してくる。」

そう言って日向は、屋敷を飛び出した。

「馬鹿な子、探し出すのは困難よ。」

青龍の言葉に、朱雀も屋敷を出ようとする。

「朱雀、忘れてしまっているかもしれないけど使命があるのよ…?」青龍は朱雀の服にしがみつく。

「それでも」

「たとえどんな使命があつたとしても、美穂のこと好きなんだ。」朱雀はそう言い残し、日向を追った。

残された青龍は座り込み、うずくまった。

「私だって…殺したくないよ…。」

眩いた時、勢いよく扉が開いた。

「青龍〜」

「帰ったぞ。」

青龍はその声を聞くと、立ち上がり笑顔を作った。

「お帰りなさい。白虎、玄武。」

白虎と呼ばれた青年は、黒髪で少し長いツンツン髪を1つに束ねている。

一方玄武と呼ばれた青年は、黒髪を短く切り揃えている。

「青龍、見つかなかつたぜ朱雀。青龍の夢見では今日の筈だろ？」

白虎はぶすつと膨れた。

「私が見つけて保護しましたから、そう怒らないで、ね？」

「そうだぞ白虎、青龍を信じろ。」

玄武は自分より少し背の低い白虎を見下ろす。

「ちえっ、分かったから見下ろすな！」

白虎はまた膨れっ面になった。

「で、朱雀は？」

玄武が青龍に聞く。

途端に青龍の表情は曇った。

「それがね……」

「はぁ？出ていった〜！？」

白虎と玄武は顔を見合わせた。

「ったく、ようやく返って来たと思ったら。」

玄武はため息をついた。

「あいつ…本当に忘れちゃったんだな。自分が生まれてきた意味も、俺らのことも……。」

沈黙が続く。

少しためらって青龍が口を開いた。

「朱雀が帰って来たら、言いましたよ……。忘れてること全部。」

「それじゃあ、あいつの心が壊れるかもって玄武が言っただろ？」

白虎はそう言つと、玄武に意見を求めた。

「ああ、その可能性は高い。」

玄武が言うには朱雀自らが、思い出そうとしなければならぬそう

だ。

「とりあえず、朱雀が思い出そうとするように差し向けよう。」
玄武の言葉に、青龍は渋々頷いた。

数時間した後、朱雀と日向が屋敷に帰って来た。

2人共、傷だらけだ。

「だから無理だといったのです、貴方たちのその容姿では。」
青龍は冷静に朱雀と日向を見つめる。

2人の容姿では、すぐに異国の者と分かってしまう。

その為、襲撃されたのだ。

朱雀と日向は、青龍の顔を見ようとしなかった。
怒っているのだ。

「玄武：朱雀たちの傷を治して。」

「わかった。」

玄武が手をかざすと、朱雀と日向の体が光った。

「動くなよ。」

「これは…」

玄武から放たれているというより、朱雀と日向の内側から光が漏れているようだ。

「生命が生まれながらに持つ自然治癒力を活性化させている。」
とても人間ができる述ではなかった。

「君は？」

「四神の1人、玄武。」

また四神という言葉。

聞く度に、どこか引っかかる。

光が消えると、完全に傷が消えていた。

「凄い…。」

朱雀と日向が体を見回していると、後ろから声をかけられる。

「凄いだろ？玄武の治癒術！」

「君も四神…？」

朱雀より少し背の低い青年は誇らしげに笑う。

「俺は四神の白虎！最速の白虎様だあ！」

ズキツと頭が痛んだ。

恐らく朱雀が忘れていている何かに関係しているのであろう。

朱雀は思い出してはいけない気がした。

思い出してしまつては、皆と今まで通りの関係ではいられない。そんな気がしてならない。

頭の痛みを我慢し、朱雀は青龍の肩を掴んだ。

「青龍たちなら美穂を探せる筈だ。頼む、力を貸してくれ…！」
頭を下げる朱雀。

それを見て青龍は、にっこり笑つた。

「良いでしょう。その代わり…。」

「その代わり…？」

朱雀は頭を上げ、青龍を見つめる。

日向は後ろで、ケチだの卑怯だの文句を言っている。

「忘れていることを、自ら思い出そうとしてください。」

「えっ…。」

朱雀の反応に青龍は少し罪悪感を覚える。

思い出せばどうなるか知らない朱雀を騙しているようだったからだ。

「思い出そうとしているのに、貴方が拒んでいるのです。いい加減現実を見なさい朱雀。」

青龍たちは朱雀を鋭い目で、見つめる。

「思い出そうとすれば、美穂を見つけてくれるんだな…？」

「はい、必ず。」

朱雀は返事を確認すると、深く頷いた。

「良い方法思いついたけど、朱雀がかわいそうな気もするな…。」

「ああ…。」

白虎と朱雀はボソボソと小さな声で話す。

隣で怒っている日向に聞こえないように、だ。

「では朱雀、思い出そうとしてみて。」

青龍の言葉に朱雀は目を閉じた。

(拒むな…受け入れろ)

自分に言い聞かせる。思い出したくない。

でも、そうしなければ美穂にはもう会えないかもしれないのだ。

変な感覚が全身を駆け巡る度、朱雀は思い出すのを止めてしまいそうになる。

そうしてるうちに、朱雀の頭に映像が浮かぶ。

膨大な量の映像が朱雀の頭を回り始めた。

そして…

朱雀は倒れた。

蘇れ記憶（後書き）

朱雀と青龍の心中を書くのが難しいです；

青龍は悪い子ではないと、感じ取っていただけていると思います。
記憶を取り戻したら、朱雀はどうなってしまおうのでしょうか…

次回は美穂と勇哉のことを書きます。
難しくなりそうですが、頑張ります。

by 黒穂。

心の変化

体が熱い、口が乾き

頭痛が酷い。

ふと額が冷たくなり、美穂は目を開ける。

「勇哉さん…？」

額には勇哉の手があった。

「起きたか…。」

勇哉は額から手を退け、部屋を出ようとする。

「待つて…！」

美穂は勇哉の手を掴んだ。

「もう少し、もう少しだけこうしていてくれませんか？」

その言葉にハアとため息をつき、勇哉は再び美穂の額に手をのせる。勇哉を呼び止めてわがままを言ってしまうぐらい、美穂は苦しんでいた。

「ごめんなさい…、ずっと看病していてくれたのですか？」

勇哉の屋敷に来た夜から、美穂は熱を出していた。

「別に…。」

勇哉はあまり目を合わせようとしなない。

「どうして看病したのですか？私のこと…嫌いなんですよね？」

沈黙が続く。

そして、少しためらいながら呟いた。

「お前が酷くうなされているから、死ぬかと思った…。」

そして勇哉はフツと笑った。

「嫌いだけだな、死なれたら困るんだよ…。」

勇哉は美穂に馬乗りになる。

とっさに押し退けようとする美穂の腕を押さえつける。

「その容姿、話し方、王族だろう？言えよ、何の企みで来た…？」

「私は何も…」

腕を掴んでいる手に力が入る。

「嘘だ…！お前らはまた俺たちを不幸にする…！」

「…っ痛いよ！」

美穂の言葉に正気を取り戻したのか、勇哉は美穂の上から退いた。

「すまない…お前に言ってもどうにもならないのにな…。」

勇哉は部屋を出た。

美穂の目から涙が溢れる。

「どうして…」

自分が何故、怒りをぶつけられているのかわからない。

勇哉は美穂に言っても仕方がないと言った。

王族は王族だが、美穂の代ではないということだ。

「わからない…わからないよ朱雀…。」

朱雀がいらない今、美穂には何もわからない。

自分のことも

家族のことも…。

今日は朝から晴れ晴れとしていた。

「勇哉様、これを。」

「よつやくか寺戸…。」

渡された資料に勇哉は目を通す。

「…あの女に強く言い過ぎたか…。」

資料の内容は美穂の出生、家族構成。

寺戸にこれを調べさせていたのだが、壁の向こうの情報というところもあつて報告が遅れたのだ。

「どうするかな…。」

「勇哉様、ほら今日は良い天気でございます。」

寺戸はパンツと手を鳴らし、召し使いたちを呼び寄せた。
「あの方をお出掛けに連れて行って差し上げなされ。」

町を歩く勇哉と美穂。

馬車を出せと寺戸に言ったが、「歩く方が良いでしょう。」
「そう言
つて出してもらえなかった。」

勇哉は隣を歩く美穂を横目で見る。

元気がない。

あまり食欲もないらしい。

自分が強く言い過ぎたせいかとも思う。

「あの…」

美穂が話し始め、勇哉は少しビクツとする。
女と歩くのは初めてだ。

「あの、いろいろ教えてくれませんか？」

そう言つて微笑む美穂。

何で笑えるのか勇哉にはわからなかった。

「じゃあ聞けよ…。」

面倒くさそうな素振りをついついしてしまふ。

「私が着せてもらっているこの服は？」

「ああ、着物だ。こっちの世界の服だ。」

美穂は桃色の着物を着ていた。

勇哉は蒼い袴姿。

「それに、町には見たことがない物がたくさんありますね。」
美穂は辺りを見回した。

古い建物もあるが、新しい建物もある。

「木の扉もあるし、勝手に開く扉もあります！」

勇哉は淡々と説明をする。

「俺たちの世界は、近年科学と技術の発展が向上しつつある。自動で動くそれは機械だ…。」

美穂はポカンと勇哉を見つめる。

「どうやらわからなかったようだ。」

「カガク、ギジュツ、キカイ…?」

不思議そうに発音する美穂を見て、勇哉は笑っていた。

「…!」

「どうしたんですか勇哉さん?」

「いや、何でもない…。」

勇哉は自分が笑っていることに気が付き、驚いたのだ。

(俺が…笑った…?)

笑ったことがない勇哉にとって、それは変な感覚だった。

笑うという動作が、無意識に行われたことに驚きを隠せない。

そうしながら歩いていると、突然美穂がうずくまった。

「どうした…?」

「ごめんなさい…歩くの辛くなってきました…」

バイオの力は確実に美穂の体を弱らせていた。

「少し休もうか…。」

勇哉は美穂を抱き抱えた。

今までの勇哉なら、こんなことはしなかった。

美穂が座り込んでも、置いて行っただろう。

しかし、そうはしなかった。

勇哉の中で何かが変わり始めているのだ。

美穂と木陰のベンチに座る。

「自分で良くわかってるんです…体のこと。」

勇哉は黙って聞き続ける。

「すぐに疲れてしまうし、足が動いてくれないんです…。でも、朱雀や皆に言ったら心配するから…」

「だから黙っていたのかずっと。」

美穂はうつむいた。

目は今にも涙が溢れそうになっている。

「日に日に体が弱くなる。その度に皆に迷惑がかかる、それが辛い……！」

美穂は声を上げて泣き出した。

「迷惑ばかり、記憶がないからいつも朱雀が私に教えてくれて。

朱雀がいなくなつて、何もわからなくなった……。彼に頼るしかない自分が嫌い……！」

「わかつた、良くわかつたお前の言いたいことは……。」

勇哉は美穂の背中を摩る。

「お前だつて戦っているだろう。体が痛くなる時はないか……？」

「……ありますけど。」

時々体が痛くなることがあつた。

これも朱雀たちには言わなかつたことだ。

「それはブイオの力を押し返そうと、お前の体が戦っているんだ……。」

「……私……？」

美穂は自分の手を見る。

戦っているのが目に見えないから、実感がないのだ。

「お前に酷いことしたな……悪かつた。会話をしているうちに、お前が他の王族と違うこともわかつた……。」

勇哉は目を伏せる。

「でも私の身内が何かしたのでは……？」

美穂はこのことがずっと、気になっていた。

「ああ、確かに。でもお前がやった訳ではない……。」

勇哉はそう言つたと立ち上がった。

「そろそろ帰るぞ……。」

「あ、はい。」

美穂も立ち上がる。

美穂と勇哉は屋敷に帰った。

少し打ち解けあった2人。

勇哉は美穂を仲間の元に帰してやりたいと思った。

しかし。それ以上に朱雀という男に会えば、また彼女が傷付いてしまうのではないかとも思うのだ。

どしたらいいのか。

勇哉は初めて、他人のことで悩んだ。

心の変化（後書き）

美穂は誰にも言わずに耐えてきたんですよ；
勇哉の心に変化が起こり始めていますね。

さて関係はどうなっていくのやら…。

ちなみに勇哉の年は、朱雀と同じくらいです。

次回、記憶を取り戻す朱雀。

そして、中間との合流。

合流

ドンッ!

ガシャンッ!!

「キヤー!」

「青龍様〜!」

青龍たちの屋敷で凄まじい音が鳴り響いた。そして使用人たちの騒ぎ声。

「青龍が居ない時に〜。何?どうしたの?」

白虎は面倒くさそうに言う。

青龍は朱雀との約束通り、美穂を探しに行った。

玄武も用事で出掛けている。

「異国の者が〜!」

「異国の者ですって!?!」

白虎が反応するまえに、日向が駆け出した。

「ちよっ、待て!勝手なことされるとかなり困る!」

何かあったら青龍に殺される、だ。

「痛って〜。」

「くそ、私としたことが〜。」

「皆無事で良かったじゃない。」

「どうでもいいが〜退け。」

日向が駆けつけると、重なり合って倒れていた。

上からノア、黒鬼、アスカで、アレンが下敷きになっていた。

「あんたら〜何してんのよ。」

日向はホッとする。

町中に落ちたら、騒ぎが起こる。

それに、このメンバーなら乱闘騒ぎになりかねない。

「ここは？何でお前（日向）が？」

アレンは日向の隣にいる白虎を睨んだ。

「はあ……。説明しろってな。」

白虎は話し始めた。

自分たちが朱雀と日向を保護したこと。

朱雀の記憶が戻りつつあること。

美穂を探しに向かっていること。

「それよりさあ、何で都合良くここに落ちてきたのよ？」

日向はアレンたちを見る。

勿論アレンたちが知るわけないのだが。

「それは青龍がここに来るようにしたんだと思うぜ？」

白虎は自慢気に言う。

彼の言う通り、青龍がここに引き寄せるようにしたのだ。

まさか屋根を突き破って入って来るとは、考えもしないと思うが。

「何にもしてないあんたに言われてもねえ〜。」

「お、俺は別の仕事をたんまりしてんだよっ！」

日向と白虎は睨み合う。

それを見てアスカは、「季色君が見たら大変なことになりそうな絵ね。」と冷静に観察していたのだった。

青龍は、勇哉の屋敷に来ていた。

「あの子の禍々しい気をここから感じる……。」「

藤堂 勇哉。

王手会社の現社長。

最近では機械の開発に力を入れている。
様々な情報を手に入れているが…

性格は冷淡冷血。

笑った顔を見た者は未だにおらず。

そんな人間が少女を家に入れるだろうか？

疑問点は多々あるが、ここに居ることは間違いないのだ。

「失礼します。」

「はい、何方でいらっしゃいますか…」

寺戸は青龍の姿を見るなり、言葉を止めた。

「青龍様！」

これは大変だと勇哉を呼びに行く。

いくら王手会社だからといって、王族にあえるわけではない。

緊急事態だと走って来る寺戸に、勇哉は顔色1つ変わらないでいた。
そして客人を迎える準備をしると、淡々と告げた。

「で、用件は何ですか…？」

隣に座っている美穂は、横目で勇哉を見る。

彼の言葉に少しトゲを感じたのだ。

「ここに来たのは他でもない、その子を保護しにきました。」

そして、青龍の目も笑っていなかった。

互いに探りを入れている、険悪な雰囲気。美穂は押し潰されそうになる。

「保護…。」

勇哉の目付きが一層鋭くなる。

「貴方もご存知の通り、彼女はあちらのせかいの皇女殿下でいらっ
しゃいます。護衛の方が探してらっしゃいましたので、迎えに参っ
たまでです。」

つまり美穂を差し出せと言っているのだ。

沈黙が続く。

勇哉は迷っていた。

本来なら護衛たちの元へ行かせた方が良いのだろう。

でも美穂はいつも朱雀という男の名を口にする時、とても辛そうなのだ。

もし、皇女としての責任が重荷で苦痛だったら？

もし、朱雀という男の傍に居ることで自分に負い目を感じているとしたら？

もしもが本当なら、行かしてやれない。

「お前は会いたいか…？」

「うん…。」

美穂に問いかけると、遠慮がちな返事が返ってきた。

「わかった、そちらに引き渡そう。ただし条件がある。」

「何でしょう？」

青龍は一瞬嫌な顔をした。

勇哉はそれを見逃さない。

「俺も共に行く、それが条件だ…。」

「…わかりました。」

心配なら、一緒に行つてこの目で確かめれば良い。

「では行きましようか。」

青龍の馬車に乗る勇哉と美穂。

「勇哉さんが一緒に行つてくれて良かった。ちょっと心細かったです。」

「そうか…。」

青龍のあの目を見たら誰でも心細くなるだろう。

あの目は…歓迎をしている目ではなかった。

何かに駆り立てられているような、切羽詰まった感じだった。

少しすると大きな屋敷が見えてくる。

この国の姫の屋敷とあって、勇哉の屋敷よりもずっと大きい。出迎える人々の中に、異国の者の姿もあった。

「美穂ー!!!」

馬車から降りた美穂は日向に抱きしめられる。

かなり心配していたようだ。

「その男は誰だ？」

黒鬼が勇哉を睨み付ける。

「あ、勇哉さんが私を助けてくれたの。」

「…。」

渋々頷く黒鬼。

何か不満そうだ。

「美穂、こいつは…?」

勇哉も黒鬼を睨む。

「私の姉の黒鬼ちゃんです。」

姉 と聞いた途端に勇哉の顔が曇った。

「こいつが…。」

何かありそうな雰囲気だが、美穂は聞くことができなかった。

「おいっ!」

屋敷からノアが飛び出してきた。

傷口を押さえている。

まだ完治していないようだ。

「どうした？」

アレンがいち早くノアに気付く。

「朱雀が、朱雀が目を覚ましたと思っただら発狂して…！」
「っ！！」

青龍は美穂に向き直り、波動を発した。

「お前何した…！」

勇哉は美穂を受け止めて怒鳴る。

「朱雀が全てを思い出したようなので、真実をお話しします。この子には辛い話なので、眠ってもらいました。」

青龍は勇哉から美穂を受け取り、別室で寝かせる。

そして皆を手招きし、朱雀の部屋へと入った。

部屋で皆が目にしたものは

狂ったように叫び

壁に頭を何度も打ち付けて

血を流している朱雀の姿だった…！

合流（後書き）

合流しましたねえ。

やっとここまで書くことができました。

さて、次回は朱雀の真実を書きます。

朱雀と美穂はどうなってしまふのか…。

お楽しみに

b y 黒鬼。

真実

頭の中を巡った記憶

これは嘘だと信じていた。

しかし体が覚えている、神経1つ1つが物事を覚えている。

全てを真実と証明していた

∴

太古の昔

世界は1つだった

この世界を造り出した神々も存在していた

青龍・玄武・白虎

そして朱雀は

四神と呼ばれ、この世界を守る

守護神であった

何千と時が経った時であった。

世界に異変が起こった。

それはアクア国の初代妃が亡くなった夜のことだった。

アクア国から禍々しい気が立ち込め、空に邪悪な渦を巻き起こす程だった。

初代国王は悲しみに暮れ、苦しんだ末に‘化物’と化した。

後のクリスタル・バイオだ。

バイオの能力は変わっていて

もの、血液、細胞全てを結晶にすることができた。

その能力で、神々は消えて逝った。

人々も絶滅の道を辿ろうとしていた。

四神は強大な力を使い、バイオの息の根を止めることができた。しかし強大な力を使っても、バイオの邪悪な気まで消すことはできなかった。

バイオとの戦闘で四神もまた力尽きた。

数百年後、四神の生まれ変わりが誕生する。

青龍・白虎・玄武・朱雀は同じ日時に生まれ、同時に使命も授かった。

それは、バイオの生まれ変わりを殺すこと。使命は誰かに言われて背負ったのではない、ぼんやりと聞こえるのだ。

生まれ変わる前の自分の声。

自らに指名を与えられたのだ。

「では朱雀、世界の為に。」

青龍は淡々と告げる。

「はい、世界の為に。」

朱雀は言った。

玄武、白虎は黙っていた。

朱雀は体を宙に浮かせた。

向かうはアクア国。

バイオの造り上げた国、王都アクア国だ。

アクア国まで数時間かかってしまう。

まだ子供であるため四神の力が弱い。

朱雀は、ひとまず城に潜入することはできた。

子供ながらの小さい体が役に立つ。

朱雀は10の歳、本来の子供ならまだ親に守られて育つ頃だ。しかし。朱雀を始め、四神の生まれ変わりの子供たちは、赤子の頃から強大な力を秘めていた。

それ故に親からは捨てられ、捨て子として司祭に保護された。毎日訓練の日々。

楽しいという感情や、誰かを愛する心はない、というより知らなかった。

使命だけが朱雀の存在意義だった。

白の奥の頑丈な扉の部屋。

「ここだ…。」

手を握りしめ、呼吸を整える。

今からこの手で人を殺すのだ。

さすがに子供の朱雀には荷が重い。

「世界の為だ…。」

そう言い聞かせて、扉を開けた。

ガチャ

「お姉ちゃん？」

扉を開けると、幼い少女の声が聞こえた。

「バイオの生まれ変わりは、女の子のようだ。」

「違うよ…。」

静かにその子に歩み寄る。

右手を背中で隠し、進む。

右手には刃が握られていた。

「だあれ？」

振り向いた少女を見て、朱雀は硬直する。

その少女のまつすぐな目が、朱雀を捕らえる。

薄いブラウンの瞳は光に当たると黄金に見えるその瞳は、揺らぐことなく強い意思を放っていた。

こんな子を見たことがない。

「黄金の稲穂みたいだ…。」

朱雀は呟いた。

「なあにそれ？教えて教えて！」

美穂は朱雀を椅子に座らせた。

「えっ…。」

戸惑う朱雀にキラキラした笑顔を向ける。

「わかった、教えてあげる。」

朱雀のいた地方に稲というものがあり、日に当たると黄金に輝いた。稲は食料として貴重で、人々に愛されている。

「へえ〜わたしは見たことがないよ〜。」

この子の地方の主食は違う食べ物だ。

「今度見せてあげるよ…。」

そう言ったのに気付いた朱雀は、思わず自分の口をふさいだ。

そう、この子を殺さなくてはいけないのだ。

「君名前は？」

「マリンだよ。」

マリン：やはりバイオに少しだが関係がある名前だった。

「君にその名前は似合わない、君は『美穂』だ。」

日を浴びて、黄金に輝く美しい稲穂。

この子にはこの名がふさわしいと思った。

死ぬ前にせめて良い名を与えてやろうと思っただけ、それだけだった筈だった。

「あなたの名前は？」

そう聞かれて朱雀は首を横に振り、微弱な波動を発した。

眠らせて、楽にしなせてやろう。
少女の首に切っ先を当てる。

そこから手が動かない。

朱雀は自分の視界が歪んでいることに気が付いた。
涙を流していた。

泣いたことはある、だけどこんな気持ちで涙を流したのは始めてだ。
心が暖かった。

感情など殆どない筈だ。
なのに何故、涙が溢れてくる？
この少女を何故、大切に感じる？

朱雀は少し止まった後、何かを思い出したように呟いた。
「嬉しかった…？」
涙を流しながら、朱雀は少し笑ってみる。

朱雀は嬉しかった。
少女が初めて人として接してくれたから。

「殺したくない…。」
朱雀は少女を殺す気などなくなっていた。

朱雀はある決意をする。
記憶も四神の力も封じて、逃げてしまおう。
この使命から、運命から。

朱雀は少女に術をかける。

大きくなれば少女は、バイオの神殿に行かされる。
そしてバイオになる。

これは青龍の夢見、いわゆる予知夢で知ったこと。
その進行を少しでも送らせる為の抵抗の術だ。

そして朱雀は美穂の額に手をあてる。

「君に再び出会い、君を守っていますように。」
術ではない、これは祈りだ。

朱雀は崖から飛び降りた。

運命に身を任せ、濁流に吞まれた。

暴れる朱雀をアレンと黒鬼が取り押さえる。

記憶が戻ったことによって、混乱しているのだ。

「朱雀、しつかりしろ！」

黒鬼は朱雀を揺さぶった。

「お前がこんなことでどうする！お前が誰であれ妹を、美穂を守る
と決めたんだろ！」

朱雀は目を見開き、膝をついた。

「俺は…守るって決めたんだ…。四神朱雀だった時も、騎士朱雀だ
った時も…！」

「朱雀！」

声を上げたのは青龍。

目が揺らいでいる。

怒りが込み上げてきているのだ。

「私たちにはそれぞれ使命がある、貴方はあの子を殺すという使命

でしょう！？私たちは使命を果たした、後は貴方だけよ！！」

青龍は涙を流した。

「私たちは辛い使命を果たした、なのに貴方だけ逃げて辛いこと私たちに押し付けるの！？」

青龍は朱雀の胸板を思い切り殴る。

朱雀は少し後ろによるめいて、殴られたところに手を当てた。痛かった、青龍の思いが。

「それでも俺は、あの子は殺せない……。」

誰もが押し黙り、沈黙。

ようやくアレンが沈黙を破る。

「俺たちにわかるように説明しろ、話はそれからだ。」

日向たちもうなずく。

皆、朱雀を助けたいのだ。

こうして朱雀の過去は明かされ、真実が見えてきた。

運命から逃れることはできない

そう、逃れることなどできはしないのだ

真実（後書き）

執筆遅くなつてすみません！

大切な所ですので、慎重に執筆したつもりです；

分かりにくかった方は感想として、遠慮せず聞いてくださいね。

小説本文で説明するか、お返事致しますので！

では…

次回、皆で朱雀と美穂を救う手立てを探します。

そして、朱雀が出した答えとは…？

by 黒穂。

父さん

「なるほどな…」

アレンは複雑な心境だった。

日向やノアにいたっては、口をあんどり開けたままだ。

朱雀は四神朱雀の生まれ変わり。

美穂はクリスタル・バイオの生まれ変わり。

そして生まれ変わり同士で戦う運命にある。

こんな真実、誰がすんなり真実られるだろうか？

「俺がお前に感じた力は四神の力だった、か…。」

ゴーストタウンの時といい、壁の突破の時といい、アレンは何度か朱雀の力を感じてきた。

「どうして美穂ではなく、私がバイオの生まれ変わりではなかったんだ…！」

黒鬼は壁を殴る。

代われるものなら、代わってやりたい。

何もしてやれない自分に、黒鬼は苛立ちを覚える。

「お前はやはり殺すのか…？」

勇哉は朱雀を睨む。

その雰囲気には、殺気も含まれていた。

「俺は殺さない、もし美穂を殺すことになったら…自害しよう。」

「朱雀っ！！」

日向は思わず叫んだ。

自害なんて、しても何も解決なんてしない。

それに、そんな惨めな死に方を朱雀にしてほしくなかった。

「そつでもしないと、きつと美穂を殺してしまうだろう…！」

朱雀も叫んだ。

その目は追い詰められた兎のように、恐怖に揺れていた。

「ちょっと待て」

声が響き渡り、玄武が部屋に入ってきて来る。

「まだ手立てがある、青龍に頼まれて調べてきた。」

朱雀は青龍を見た。

彼女は苦笑していた。

「貴方があの子を殺せないって、わかってた…。」

胸が痛い。

貫かれそうなくらい。

「ごめん…！」

朱雀は堪らず頭を下げた。

「良いの、もう良いの。さあ、早く作戦会議しましょ。」

畳というものが敷かれた部屋に、皆を集めた。

美穂は傍らに寝かせて、時が来れば起こすそうだ。

「収集した情報を告げる、心して聞け。」

玄武は巻物を広げ、読み上げる。

バイオの生まれ変わりの美穂は、神殿に行つてバイオの力を受け継ぐことで命を保っている。

これは、儀式によって少量のバイオの力を入れられたことで美穂の体が過剰にバイオの力を求めるようになった為だ。

放置すれば、美穂の体は衰弱して死ぬだろう。

そして全ての神殿での儀式を済ませれば

美穂は完全にバイオと化すだろう。

「じゃあどうすれば…！」

「最後まで聞いてくれ、朱雀。」

そして玄武が全てを伝え終わると、皆目を伏せていた。

失敗すれば、この世界が終わってしまう。
そんな手立てが告げられた。

朱雀は立ち上がり美穂を起こす。

「朱雀…。」

「頼む…今日だけは、自由にさせてほしい。」

青龍は一瞬ためらったが、頷いた。

「美穂、見せたいものがあるんだ。」

「見せたいもの…？」

目を擦りながら、美穂は立ち上がる。

「勇哉さん、後は頼みます。」

「わかった…。」

朱雀は返事を聞くと、美穂の手を引いて部屋を出ていった。

「さて…と。こっちはこっちで、話をしようか…。」

勇哉は黒鬼に近づいた。

座っている黒鬼を見下す。

「姉さん…。」

その言葉に黒鬼は目を丸くした。

「姉さん、だと…？」

「そうだ、腹違いのな…!!」

勇哉は黒鬼に飛びかかった!

とっさに受け身をとった黒鬼を蹴り飛ばした。

そして刀を抜き、斬りかかろうとした勇哉の手を、アレンが押さえた。

「くそつ、邪魔するな…!!」

アレンは勇哉を畳に叩き付けた。

黒鬼は大人しくなった勇哉に近づいた。

「私に恨みがあるのか？」

優しく、穏やかな声だった。

「違う…、お前の親にだ…。」

「そうか。」

黒鬼は勇哉の手をとった。

「お前が本当の父上にできた新しい子供なのだな。」

勇哉は頷き、うろたえた。

覚えているだろうか？

黒鬼と美穂の父親が違うことを。

黒鬼は、母サラと魔力を持たない父の間に生まれた子。

黒鬼は城から追放され、奴隷として過ごすことになった。

その父もまた、壁の向こうに追放されていたのだ。

壁の向こうで新しい人と出会い、生まれた子が勇哉だった。

「お前も辛い思いをしたのか？」

黒鬼の問いかけに、勇哉は頷いた。

「父は…お前と、お前の母親のことしか考えていなかった…。」

「……。」

勇哉は涙を流していた。

「母は毎日泣いていた、お前の母親の元に父がいつか行ってしまおう
と思つて。家族はバラバラだ、いや、元から家族じゃなかったか…。」

「偽りの家族。」

幼かった勇哉でもそう感じるような雰囲気、家の中を漂っていた。

母は毎日泣き、父は自分たちを見ようともしなかった。

悔しくて、腹違いの姉とその母親を憎んだ。

どうして他の子のこと考えるの…？

愛してるって言って

お父さん

「辛かったな…でもな？父はお前のこと愛していたんだぞ？」

「お前は何も知らないからそういうことを言えるんだ…！」

黒鬼は立ち上がった勇哉に指差した。

差した先には、藤堂と書かれたバツジ。

「父はお前に残してくれているではないか…。」

父が息子に残したのは、藤堂財閥そのものだった。

「そうか…これは父なりの愛だったのか…。」

少し何か考えた後、勇哉は首を横に振った。

「すまない、まだ…許せない…。」

勇哉が全てを許せるまでに少し時間がかかるだろう。

アレンはため息をついた。

やれやれ、といった安堵と

そして少し羨ましそうな表情を勇哉に向ける。

「俺には家族が居ない。生まれた時から俺は…奴隷だった。お前を

羨ましく思う。」

「アレン…。」

そう呟いた後、勇哉はバツジを握りしめて大粒の涙を流した。

さっき流した怒りの涙ではなく、穏やかな涙だった。

そして

「父さん…！」

そう、一言だけ叫んだ。

「なあ、勇哉。」

暫く経つて、黒鬼は勇哉に声をかけた。

「なんだ…?」

「このこと、美穂には?」

勇哉は少し黙り、それから大きく息を吸った。

「言わないでくれないか…?」

何故かと黒鬼が聞く前に、勇哉は答えた。

「知らない方が、いいこともあるさ…。」

そう言つと

勇哉は笑った。

父さん（後書き）

黒鬼と勇哉の父親は、どっちも愛していました。
黒鬼とその母サヲを心配するあまり、勇哉に何もしてあげられなかつた父。

その父は、勇哉に会社を残した。
彼が苦勞しないように。
と、いうわけで。

勇哉の父さんは良い人なのです。

私はあまりストレートに書かないので…、わかりにくいかもしれませんが；
次回、朱雀は美穂をある場所に連れていきます。
そして…朱雀は決心するのです。

b y 黒穂。

黄金の場所

「無事で良かったよ。」

朱雀は美穂の手を引きながら言った。

「もう会えないかと思った…。」

そう頬を膨らませて、美穂は呟いた。

「どうしたの？」

「もっと早く迎えに来てくれれば良かったのに…。」

そう言いそっぽを向いた美穂。

朱雀が苦笑したことに美穂は気が付かなかった。

「これから行く所は、美穂もきつと気に入るよ。その前に…神殿に行くよ？」

「神殿に…？」

ブイオの神殿はあと二つ残っていた。

美穂は首を横に振った。

行きたくないの合図。

「神殿に行つて儀式を頑張ったら、連れて行ってあげるから。」

朱雀は何とか美穂を納得させた。

美穂は儀式が辛くて行きたくない訳ではない。

儀式を受けてはいけない気がする。

何か嫌な気が体の中に入ってくる、その度に気がおかしくなつてしまふ。

このまま儀式を続ければ、きっと気が狂って何をしでかすかわからなくなってしまう。

美穂はそう思った。

しかし、朱雀の必死に頼む姿を見ると行きたくないなんて、言えなくなっていた。

神殿の中は相変わらず独特な重苦しい雰囲気だった。

朱雀が神殿に足を踏み入れたのは、久しぶりのことだ。

怪我を負ったりしたせいで、黒鬼たちに連れて行ってもらっていた。神殿内は何も変わらない。

一方で、朱雀は変化していた。

神殿の空気はブイオ気そのもので、殺気が起こる。

殺気を押し殺しているせいで、大量の汗が流れ出た。

「大丈夫？」

美穂は朱雀の汗を拭った。

「ああ、大丈夫だよ。何も心配しなくていいから……。」

美穂は朱雀が少し変わったことに、何となく気が付いた。

それは朱雀が記憶を取り戻したからなのだが、美穂はまだ知らない。美穂は首をかしげた。

神殿を進んで行くと、祭壇が見えてきた。

そして轟音も鳴り響く。

守護獣だ。

全身鱗に被われ、尻尾が長い。

「出たな！」

朱雀の言葉に美穂は構える。

「いいよ、俺がやる。」

朱雀は美穂の前に立った。

守護獣は尻尾を振り上げる。

思わず美穂は目をギョツと閉じた。

振り上げた尻尾を朱雀に叩き付けようとする。

しかし朱雀は手をかざし、それを弾き飛ばしてしまったのだ！

「もう大丈夫だよ。」

美穂は恐る恐る目を開けた。

朱雀は一步も動いていなかった。

それなのに守護獣は倒れている。

「殺したの…？」

「殺してないよ、殺す必要なんてないからね。」

朱雀は美穂の頭を撫でた。

やはりどこか朱雀は変わった。

美穂はそう確信した。

美穂は祭壇に横たわる。

この瞬間がとてつもなく怖いのだ。

力が美穂に入っていく、もう美穂の体は力を受け付けていた。

「怖いよ…。」

儀式が終わった美穂は肩を震わせて泣きだした。

「俺がずっと傍にいるよ、だから大丈夫だよ。」

朱雀は美穂を抱えた。

「頑張ったから、良いものを見に行こう。」

につこり笑った朱雀に、美穂赤面する。

「私歩けるよ？」

「嘘つかなくていい、ずっと我慢してただろ？」

これまでの朱雀は美穂の我慢に気が付かなかった。

しかし今は気が付きこうして気遣ってくれる。

何だか大人になった朱雀に、美穂は寂しさを感じた。

何処へ向かっているのだろう。

目の前が真っ暗で検討も付かない。

美穂は目を閉じていてと、朱雀言われそうしていた。

何でも驚かせたいらしいのだ。

抱き抱えられていても、体が痛い。

勇哉が抵抗している証拠だと言った。

だったらこの痛みがなくなった時には、この体はバイオに乗っ取られてしまうのか？

美穂は身震いした。

「寒い？」

「え、ううん。何でもない。」

美穂はとっさに首を振った。

「そっか、もう目を開けて良いよ。」

そう言われて美穂は目を開ける。

やっぱり真っ暗は不安になるし、つまらない。

「わぁ…！」

目の前の光景を目の当たりにし、美穂は目をキラキラさせた。

それは太陽に照らされ黄金に光る稲穂が、辺り一面に広がっていた。

「ここが俺の好きな場所。」

朱雀は穏やかな口調で言った。

懐かしくてたまらない。

記憶が本当に戻ったんだと、改めて感じた。

「ただいま…。」

そう言った朱雀の横顔を美穂は見る。

「……朱雀？」

呼んだ美穂の声は、不安が込められていた。

「ごめんね、何でもないんだ。」

朱雀が笑うと、美穂はまた膨れっ面になった。

「朱雀大人になったね…、私を置いて行っちゃうみたい。隠し事して、私を置いていくの…?!」

美穂は朱雀の手を握りしめた。

恐怖に目が揺らいでいる。

「そっだね、怖いよな。記憶がなくなって、自分を知ってる人に置いて行かれたら。」

朱雀は美穂の手を優しく包み込み、言い聞かせるように話した。自分の記憶、そして生まれ変わりの真実のことも…。

「私が、バイオ…。」

信じられないと首を横に振る。

「真実なんだよ。」

朱雀は少しきつく手を握りしめた。

大丈夫だよ、ここにいますよ。

そう伝えるみたいに。

「私が世界を滅ぼすなら…私は消えないと」

「待って、そうじゃないんだ！」

美穂の言葉を遮って、朱雀は叫んだ。

「見て、一面の稲穂。美穂って名前、ここから取ったんだ。」

朱雀は、ぱあっと明るい顔になって話す。

「どうして君にあげたか知ってる？それはね…君の心が綺麗でキラキラしてたから。」

「キラキラ？」

「そう、君のその純粋な心はバイオなんかには絶対負けない。」

朱雀はパツと手を離れた。

「そして俺は、君を好きになった。」

そして美穂に背を向け歩き出す。

「勇哉さんに頼んであるから、美穂を最後の神殿に連れて行ってくださいって。」

「えっ、朱雀は…？」

美穂は追いかけてよとすると、足が動かない。

体の衰弱の進行が進んで、歩くことができなくなったのだ。

「最後の儀式を受けるんだ。」

「待つて！」

遠ざかる朱雀。

美穂はどうすることもできなかった。

「もうこれでお別れ。」

「さようなら」

その言葉と共に、朱雀の背中が消えた……。

「待つて、待つてよ……どうしてそんなこと言うの……？」

目の前が揺れる。

涙が溢れていた。

苦しい、苦しい、胸が裂けそうな程に。

「もう会えないの……?!」

雀は何も言わずに行ってしまった。

何故さよならなのか、これからどうする気なのか。

ただもう会うことがない、そう告げて。

美穂は泣いた。

声を上げて泣いて、泣いた

その数分後、勇哉を乗せた馬車が
稲畑に到着したのだった。

黄金の場所（後書き）

皆さんは日に当たった稲畑を見たことがありますか？
私は一度だけ見たことがあります。

金色に見えて、すごく感動したのを覚えてますよ。

次回…

朱雀と美穂の別れ。

迫り来るバイオの呪い。

朱雀たち最後の手立てとは一体何なのか。

ついにバイオとの決戦が幕を開ける

甦る虚無神

ドンツドンツという外から聞こえる轟音。

勇哉はため息をついた。

朱雀に頼まれた通りにことが進まないのだ。

「美穂、もう出てきてくれ…。」

美穂は返事をしない。

ただ天井を見つめて、首を横に振るだけ。

朱雀と美穂が別れて、もう一月経っていた。

勇哉は美穂を最後の神殿に連れていくように、朱雀に頼まれていた。その際に、ジエドルドという男と、カオスという青年が訪ねてくると聞かされた。

「おい小僧、皇女はまだ出てこんのか！」
ジエドルドの声。

朱雀が言った通り、二人は訪ねて来た。

この二人が来たということは戦争の始まりを意味していた。

先程の轟音は、戦闘をしている音だ。

そのことも悩ましいが…。

最も悩ましいのは、美穂が結晶の向こうから出てこないということ。

美穂は結晶の壁を創り、そこから出てこなくなった。

体は衰弱していき、もう歩くこともできない。

それどころか、手で何かを持つこともできないくらいになっていた。

美穂は何も食べず、ただ寝たきりだった。

「お前、このままだと死んでしまうぞ…。」

勇哉が結晶に手を当てながら、呟いた。

「い…いの、それで…。」

久しぶりに発せられた言葉に、勇哉は耳を傾けた。

「ブイオに…なって…迷惑をかける…ことになるなら…。私は…死にたい…」

「やはり死ぬ気だったか…！」

勇哉は結晶を思い切り殴った。

拳は裂けて血が流れ落ちる。

「お前は朱雀の思いを無視して、死を選ぶのか…！」

「…。」

何も言わない美穂。

その目からは涙が溢れていた。

「死にたくない本当はそう思ってるから、だから涙が出るんだろ…！」

勇哉は結晶をまた殴った。

何度もそうして、指の骨が折れた。

それでもまだ拳を振り上げる勇哉の姿を見て、美穂は再び言葉を発した。

「やめて…もう…やめて…！」

そう叫んだが、遅かった。

誰もが次の瞬間には鈍い音が鳴り響き、勇哉の腕は潰れると思っていた。

しかし、目の前の光景に美穂は目を見開いた。

「朱雀…？」

勇哉の腕を掴んで止めているのは…

確かに朱雀だった。

髪は少し伸び、顔付きも大人になったようだった。

だけれど、髪は癖ではねていて、目は優しいままだ。

美穂は朱雀が変わらずにいてくれたことが嬉しかった。

「どうしたの美穂？出ておいで。」

朱雀の言葉にも首を横に振る。

「私は…ブイオに…なるので…しょう？」

ただそう言ったただけだが、朱雀には全てわかった。

「君は負けない。大丈夫、俺も一緒に戦うから。」

そう言っただけで朱雀は結晶の壁に手を当てると、結晶が音を立て崩れた。そのまま朱雀は美穂に歩みより、ぶりに顔をあわせる。

「美穂の髪、長くなつたね。」

朱雀は髪を指ですくつた。

美穂の短かった髪は、腰辺りまで伸びていた。

「こんなにも痩せて…ごめん、迎えにくるの遅くなって。」

「どう…して…行っちゃつたの…？」

美穂は朱雀を見つめる。

この目の前では嘘は無意味なのだ。

「一緒にいれば君を殺してしまいたいそうになる、だから離れた方が良
いと思った。」

朱雀は汗を拭う。

「今だって、魂は君を殺そうとしているから。」

美穂は一瞬目を伏せて、また朱雀を見た。

まるで自分の運命を痛いほど感じ、それを受け入れるように。

「私を…殺して…。」

「駄目だ。神殿に行こう？」

「貴方も…世界も…傷つけ…たくない…！」

「俺が守るから！」

朱雀は美穂を強く抱き締めた。

「お願いだ、世界も君も守るから！だから、死なないでくれ…！」

「朱雀…。」

そして美穂はゆっくり目を閉じた。

「馬車の準備だ…。」
その様子を見て、勇哉は使用人にそう告げた。
「あいつを守るのは朱雀だけ、か…。」
勇哉は苦笑した。

最後の神殿は、今までのものと少し違った。
所々壁には紋章が刻まれている。

その紋章の模様は、美穂が儀式で体に刻まれた模様と同じだった。
そして気味が悪いのは、ジェルドとその息子カオスが何も言わず
に、後をついて来ていることだった。
目は虚ろでまるで人形のようなようだった。

もしかすると、この二人はバイオに操られているだけなのだろうか？
朱雀はそう思った。

「そつえば、お前の仲間はどうした…？」
勇哉は聞いた。

日向やアレンたちが居ないことが、不審に思えた。

「皆準備をしてくれてるんだ。」

そう言つて、朱雀は黙った。

あまり多くを語ろうとはしない朱雀に、勇哉はもう何も聞かなかつた。

ドンツと地響きがして揺れる神殿を、歩いてやっと祭壇へ着いた。
地響きで歩きにくかった為か、これまでよりずっと長く感じた。

神殿に着いても守護獣は出てこない。

そして今までのと、大きな違いがあった。

それは石像。

祭壇の奥にあるのは今までバイオだった。

今日の前にあるのは等身大と思われる、女性の石像だった。

「女の人…？」

「これより最終儀式を始める！」
突然ジエドルドが叫んだ。

朱雀は考える間もなく、美穂を祭壇へ寝かせると命令された。

朱雀は何も逆らわず、美穂を祭壇に寝かせる。

今行動を起こせば、何が起こるかわからない。

この場所はブイオの領域なのだから。

「朱雀：また…会える？」

「ああ、きつと。きつとまた会える。」

美穂はまだ不安なのか、朱雀が立ち去ろうとすると首を横に振った。

朱雀は祭壇に横たわる美穂の前で膝まずいた。

「これが終わったら、私と結婚してくださいますか？」

朱雀は下げている頭を上げ、にっこり微笑んだ。

思ってもみない言葉に、美穂は驚いたが。

美穂の心はもうとっくに決まっていた。

「はいっ…！」

そう返事をした瞬間。

祭壇が光った。

同時に美穂の体に紋章が浮かび上がる。

カオスがゆっくり美穂に近づき、美穂の腹部を剣で突き刺した！

「なっ…！」

止めに入ろうとした勇哉を、朱雀が止めた。

「大丈夫だ。」

そう言った朱雀のは齒を食いしばっていた。

剣を突き刺され、痛みにもがく美穂。

カオスの体から緑の光が漏れて、傷口から美穂の体内に入った。

ドクンッ

美穂の体が一瞬脈打った。

そして次に女性の像の目から血が滴り落ちたその時。

美穂の体が浮き上がったのだ！

美穂の体は光を放ち、光が止む頃にはもうそれは

美穂ではなかった。

「来る…。勇哉さんは下がってください！」

朱雀は剣を構えた。

「あはははははっ！！やっとだ、やっとこの時が来た！！！」
狂ったように叫ぶ美穂。

目は虚ろで、髪は緑色に染まっていた。

そう、バイオが復活してしまったのだ。

甦る虚無神（後書き）

テスト中なので執筆遅くなりました、申し訳ないです；

バイオが甦り、終幕への幕が開けました。

ということは、もう少しで完結です。

文章力がない為つまらないかもしれないかもしれませんが、もうしばらく見守っていただきたいと思います。

今回はバイオの思惑、陰謀が詳しく明かされます。

これまでも少し書いてきたので、もう察している方がいるかもしれませんが、くれませんね。

少しでも楽しんでいただければ幸いです。

by 黒穂。

最終決戦

響き渡る奇声に朱雀たちは耳をふさいだ。

耳をふさぎながら、勇哉は目の前にいるブイオの姿を仰ぎ見た。

緑色の長い髪。

虚ろな目。

「化物だ…！」

あの美穂からは想像できない、ものになっていた。

「ブイオ様、今こそ世界を…！」

「黙れ」

膝まづくジエドルドをブイオは冷たい目で見つめた。

そして、ブイオが手を上げると同時に

ジエドルドは光となって消えてしまったのだ…！

「吸収したか…。」

朱雀はブイオを睨んだ。

ブイオもまた朱雀を見つめる。

「久しいな、四神。少し弱体化したか？力があまり感じれん。」

ブイオは声を上げて笑い、神殿を突き破って空へ昇った。

「なめるなよ。」朱雀は目を閉じ、ゆっくりまた開いた。

朱雀の黒かった目は朱く色付き、髪も朱く染まった。

髪の長さは更に長くなったようだ。

これが朱雀本来の姿だった。

朱雀もブイオ追う。

壮絶なる戦いの幕開けだった。

日向は空を見上げ、目を凝らして合図を待つ。

「こつちですよー避難してください！」

アスカや黒鬼は住民や停戦した兵の避難を行っていた。一方アレンとノア、そして四神たちは何かを待っていた。

「見えた！！」

突然日向が叫び、アレンは空を見上げた。

緑色と朱の光が二つ。

これが朱雀に言われている合図だった。

「玄武、よろしくね？」

青龍の言葉に黙ってうなづく玄武。

青龍は白虎におぶさった。

白虎が一瞬構えたと思ったときには、もうその姿はなかった。

白虎の能力は神速。

それは光のような速さだった。

玄武はそれを見送った後、膝をついて手を前に突き出した。

光が玄武を包み、そこから大地を包んだ。

玄武の能力は、治癒力を向上させるもの。

人の体や自然の治癒力を活性化させるのだ。

玄武はこの能力を使って朱雀たちを援護する。

つまり。玄武が生きている限り、朱雀たちに傷はつかないのだ。

日向やアレンたちはその玄武を、バイオの攻撃からから保護するよ
う朱雀に言われていた。

バイオと対等に戦えるのは四神しかない。

その四神の中でも、即戦力となるのは

朱雀と青龍だけなのだ。

そんな相手に日向たちは太刀打ちできるはずもなかった。日向たちにできるのは、玄武を守り抜くことだった。

上空では、ブイオと朱雀の激しい力の撃ち合いが始まっていた。ブイオの方が朱雀を攻めて、朱雀はそれをなんとか防いでいるといった感じだった。

朱雀の能力は風を操る。

四神の中で唯一、飛べるのだ。

飛べる朱雀でなければブイオと戦えない。

攻撃が届かないからだ。

だから正直、朱雀の力はブイオには劣っていた。

朱雀ではブイオに勝てない。

そのことは朱雀自身が一番わかっていた。

それではどうするのか。

青龍だ。

青龍は最強クラスの能力使い。

四神の中で最も攻撃力が高い。

青龍の攻撃さえ当たれば、ブイオでも相当なダメージを受ける。

朱雀のはブイオを、青龍の攻撃が当たるところまで引きずり下ろそうとしていた。

上手くいくかどうかなんて頭にない。

‘絶対’に成功させなければ、世界は終わる。

ブイオは世界を本気で消そうとしているのだから……！

「しぶとい奴だ、諦めれば良いものを。」
バイオは朱雀を嘲笑う。

そのバイオの目が、何ともいえないのだ。
まるで廃人のような虚ろな目。

心、体の痛みを感じない。

そんな目だった。

「諦めるものか…絶対に世界は消させない！」

バイオは眉毛一つ動かすこともなかった。

ただ淡々と、攻撃を仕掛けてくる。

「お前は どうして世界が嫌になった？アクア国の王、バイオ。あんなに人々を世界を愛していたのに！」

かつてのバイオは優しい王だった。

「黙れ！哀れな人間どもがキサナを殺した、世界が我からキサナを奪ったんだ！」

そう、バイオの妻キサナが死んだその時から。

バイオは狂ったのだ。

怒りでバイオの魔力は大きくなり、姿を変えた。
メラメラと炎のように揺れる魔力。

ビュンツと音がしたと同時に、朱雀の左脚に激痛が走った！

朱雀は声を上げ、膝をつく。

傷口は焼け爛れていた。

「何故だ…？」

不意にバイオが呟いた。

「な…何がだ…？」

朱雀は激痛に耐えながら応えた。

「何故…」

「どうして、キサナを助けてくれなかった…？」

「え…？」

次の瞬間、朱雀は落ちた。

右脚をやられて、バランスを崩したのだ。

「朱雀！」

青龍がとっさに朱雀を光で包み、地面に激突するのは回避できた。

「大丈夫？」

「ああ、玄武の能力で治ってきてる。」

朱雀の傷口は治り始めていた。

「ブイオがああなったのは、俺たちのせいなのか…？」

「えっ？」

驚く青龍に、何でもないと行って

朱雀はまた飛び上がった。

朱雀の心に何かが引つかかっていた。

ブイオはキサナを助けてくれと、朱雀たちにすがったのだろうか？

そうに違いない。

しかしそれなら、何故助けてやれなかったのだろう。

(思い出せ、思い出すんだ…！)

朱雀はブイオと戦闘を続けながら、記憶を巡らせた。

浮かび上がったのは、妻のキサナを抱えているブイオの姿。

朱雀たちがキサナを見た。

その時はもうキサナは…

ザンッ

音を立て、鞘から抜かれた剣。

それはブイオの攻撃を斬り捨てた。

「思い出した…、思い出したよブイオ。」

風がなくなり、一瞬静寂なる。

「言うな…」

ブイオは目を見開いた。

まるで何かに怯えるように。

「キサナさんは…」

「言うな!! もう何も言ってくれな…!!」

「キサナさんは、あの時も…亡くなっていたんだ。」

奇声にまた大地が揺れ、空気が揺れた。

ブイオは耳をふさぎ、涙を流した。

あの女性の石像と同じ、血の涙を。

「嘘だ! キサナは死んでなかった、お前らが何かしていればキサナは…死んでなかった!!!」

「でも現実…」

「黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ!!」

ブイオは朱雀を容赦なく攻め立てる。

朱雀は所々焼け爛れ、酷い所は骨が見える程の傷だった。

ブイオは怒りで暴走している。

こうなってしまうのは、もう誰にも止められない。

いくら玄武の力が働いているとしても、このままでは朱雀は殺される。

朱雀は剣を構え戦略を考える。

しかしブイオとの力の差に、戦略は何も意味しなかった。

どうすれば良いのか、いよいよわからなくなったその時。
バイオの心臓の辺りが光った。
それはバイオの光ではない。

「美穂：？」

そう、黄金に輝く彼女の光だった。

「美穂も一緒に戦ってくれてるんだな…。」

朱雀は再びバイオに斬りかかった！

バイオはそれを簡単にはね除ける。

「我に敵わないと知りながら、何故向かってくる!!！」

「俺にもお前と同じように、大切な人が居るんだ負けるわけにはい
かない！」

ぶつかり合う二つの力。

どうしてこんな戦いが起こってしまったのだろう。

あの時から

バイオの時間は止まっている。

あの時

そう、キサナが死んだその時から。

最終決戦（後書き）

最終決戦の幕開け、ということ。

朱雀と美穂は無事にまた会うことができるでしょうか？

私もまだどういつ完結にしようか、考えているところです；

次回はブイオが生きていた頃のアクア国のお話し。

ブイオが愛したキサナ、そして彼女の死。

あの時を書こうと思ってます。

次回も見えていただければ幸いです。

by 黒穂。

あの時

庭に一人座り、小鳥と歌を歌う女性。

キサナは光に照らされて、茶色の髪は光輝いていた。

「キサナ、そこに居たのか。」

ブイオはキサナの横に座った。

「はいあなた。今日は良い天気です。」

微笑む彼女にブイオは寄り添った。

「そうか、そうだな。」

キサナの手を握る。

その存在を確かめるように。

ふとキサナの首筋に目がいく。

そこには痛々しい火傷の跡があつた。

奴隷の刻印。

この時代は奴隷制度が一般的だった。

キサナも元は奴隷。

ブイオは檻に入れられた彼女に恋をした。

当然、綺麗な格好をしているわけではなかった。

しかし彼女の優しさ、人としての心に惹かれた。

例えば、一つのパンを与えられたら。

どんなに飢えていたとしても、キサナはそのパンをお腹が空いた子

供にあげてしまう。

自分より他人を優先してしまうのだ。

ブイオはそんなキサナを心から愛した。

だから周囲が反対する中、キサナを妻とした。

王族と奴隷の婚儀など本来許されるものではない。

しかしブイオはそんなことは気にしなかった。
家柄や出生にこだわる必要がどこにあるのだろうか？
本当に愛する者同士が共に幸せになればいいのだから。
ブイオはそう考えていた。

そんなブイオと、キサナを周囲は良く思っていない。
それも仕方のないことだった。

「ブイオ様、お時間です。」
不意に後ろから声が響き渡った。

「すまないキサナ、時間のようだ。」
「はい、無理はしないでくださいね。」

ブイオはキサナの頭を撫でて、庭を後にした。

ふう、と息を吐いたキサナは何かを覚悟したかのように立ち上がる。

「ブイオも頑張っているのですもの。」

キサナは廊下を歩き、自室へ向かう。

すれ違うメイドや使用人たちは、キサナを指差し笑った。

あちこちから聞こえてくる陰口、罵声。

キサナは耳をふさぎたくなった。

でもそうすると、自分が負けてしまったようになってしまう。
だからしゃんと立ち、まっすぐ前を見て歩いた。

自室に入って、キサナは鏡を見て笑った。

「私はあの人の妻ですもの。」

ブイオに釣り合うような人物になりたい。

キサナは笑顔でいようと決めていた。

コンコンッ

ノックの音がした。

「どうぞ。」

「失礼しますキサナ様。」

メイドたちがぞろぞろと部屋に入ってくる。

「何か用ですか？」

そう言ったキサナに、メイドの一人が掴みかかった。

「あなたに‘様’をつけなければいけないなんて！」

キサナは壁に押さえつけられた。

「私たちより身分が低かったあなたに、何で仕えなければいけないのよ！」

そしてキサナを殴って床に這いつくばらせる。

それからずっと、殴る蹴るの暴行。

メイドたちはブイオに気付かれないように、顔はあまり殴らなかつた。

しばらくしてメイドたちが出ていった後も、キサナは床に座り込んでいた。

再び鏡を見ると、そこには暗い顔の自分。

「あはは……」

キサナは笑った。

笑った……が、同時に涙も出た。

城の中でも、城の外でも。

キサナへの扱いは同じ。

陰口、罵声、暴力。

助けてくれる人はおるか、優しく接してくれる人すらない。

ブイオは優しい、助けてくれる。愛してくれる。

だからこそ、心配をかけるわけにはいかなかった。

朝早くから夜遅くまで国のため働き、眠ってもうなされているブイオ。

そんな夫に言えるだろうか？

キサナは言えなかった。

毎日体の痣を隠して、心の傷を隠してキサナは笑った。

そんなある日だった。

ブイオはいつものように仕事をこなしていた。

山ほどあった書類をやっと終わらせようとした時だった。

「ブイオ様！！」

ノックもせず、使用人の男が部屋に走り込んできた。

こんなことは初めてのことで、ブイオは目を丸くした。

「どうしたというのだ、そんなに慌てて…？」

首を傾げたブイオに使用人の男は、信じられないことを告げた。

「キサナ様が、襲撃に合い…」

「キサナが！？」

ブイオは話しの全てを聞く前に、部屋から飛び出した。

窓の外を見ると、騒ぎが起きている。

伝う冷や汗、ブイオは震えていた。

キサナはきつと無事に違いない。

そう言い聞かせた。

「キサナ…」

ブイオは目の前の光景に膝をついた…。

そこには、変わり果てたキサナの姿。

頭から大量に血を流し、血溜まりをつくっていた。

顔はもう血の気がなく、唇の色も紫に変色していた。

キサナを抱き抱え、ブイオは走り出した。

何人もの医者に治療を頼んだが、どの医者も決まって静かに首を横に振った。

ブイオは医者に頼ることを止め、神が住む森へと足を進めた。

「キサナ、もう少しの我慢だ…！」

古びた一つの小屋を見つけ、ブイオは叫んだ。

「お願いです、妻を助けてください…！」

ギイイと扉が開き、出てきたのは朱く長い髪を、一つに束ねたブイオと同じ歳くらいの男だった。

「今治療を使える者は出てしまっていますが、少しでも処置をしましょう。」

優しく微笑んだ男は、朱雀という天空の神だった。

「はい！ありがとうございます…！」

ブイオは頭を下げ、キサナを渡す。

「っ…！！」

朱雀はキサナを見た瞬間、息を飲んだ。

何故なら、誰が見ても彼女はもう亡くなっていた。

血が通っていないから体は酷く冷たいし、何よりも呼吸も鼓動もない。

「残念ですが、この方はもう亡くなって…！」

「嘘だ！ほら、まだ温かいです！お願いします、見捨てないでく

ださい…！！」

朱雀は首を横に振った。

何もしようがなかった。

いくら神だったとしても、死者を生き返らせることはできない。

「…お前も、医者たちと同じだ…。お前も私の敵だ…！」

そう言っつて、ブイオは走り去った。

走りながらキサナを見る。
腕や足に酷い痣がたくさんあった。
ブイオはいつの間にか走るのを止め、その不可解な痣を探した。
キサナの痣は身体中にあった。
それも最近のものばかりではない。
ずいぶん前からある痣だった。
奴隷の時の痣とも考えた。
しかしこんなに酷くはなかった。
もしかして…

気が付くと、ブイオはキサナが倒れていた場所に戻ってきていた。
まだ大勢の人々がそこに残っている。
「残念ですが、仕方のないことです。賊に襲われて、誰も何もできません。」
「だから誰のせいでもない？」
ブイオは町人の発言をきっぱり切り捨てた。
「本当に賊に襲われたなら…、物取り目的だったら刃物で急所である首を深く斬るか刺して即死させる。
人身売買なら、キサナを傷一つなく連れていくはず。
キサナは『撲殺』されている。
こんな手間のかかるやり方、賊はしない…」
ブイオは怖いくらい冷静だった。

「お前らが殺つたのだろっが!!!」
ブイオは剣を抜き、隣に居た町人の首を落とした!
「まって…ブイオ様!」
ブイオは容赦なく剣を振るった。
「キサナをお前らは困んで殴って、殺した!!!キサナが奴隷だったからか!?!関係ないであろう!?!」

「キサナはお前らに認めて欲しくて、どれほどの苦悩と努力を繰り返したか!!」

「返せ返せ!!私の妻を、愛する人を!!返してくれ!!!」

ブイオは空を見ていた。

空は灰色だった。

空だけではない、草も花も血だつて灰色だ。

ブイオの目は虚ろで光がなくなっていた。

足下には鮮血。

殺した人々の血で地面は真っ赤に染まっていた。

ブイオはまた剣を構えた。

元々薄い緑色の髪が、魔力で濃く染まっていく…。

もう一度空を見上げ、一言だけ呟いた。

「こんな世界は

いらない」

あの時（後書き）

我ながらキサナはかわいそうな最後だったと思います。
けど好きな人物ですけどね。

後少しでこの話も終わりです。

気合い入れて書きたいと思います！

次回は美穂の戦いメインになると思います。

では次回もよろしく願います。

b y 黒穂。

暴走する力

悲しい記憶。

ここは何処？

私は誰？

ハッと目を開けると暗闇の中、自分の体が浮いていた。

「あれ…私…。」

美穂は自分の体を抱き締めた。

「覚えてる…。」

目を閉じ、思い出す過去のこと。

子供の頃、朱雀と出会ったあの頃。

記憶が蘇っていた。

「どうして…？」

「お前が私になって、全ての傷が癒えたからだ。後ろを振り向くとバイオが居た。」

「儀式による脳の損傷が癒えたのだ。」

「貴方の記憶が見えたの…。」

バイオはうつむいた。

「キサナさんを亡くしたことは悲しい。でも虐殺なんて…！」

「黙れ、お前も私だろうが！」

バイオを包む緑色の光。

バイオ特有の色だった。

「誰も殺したくなかった、そうでしょう…？」

美穂も黄金の光に包まれる。

二人はまるで光と影、善と悪だった。

ブイオの中には悲しみ憎しみが残り。

生まれ変わりの美穂には、人を慈しむ優しい感情が受け継がれた。

ブイオは強大な力で、美穂を圧倒する。

炎のように揺れ動き、ブイオを取り巻く力。

憎しみだけの力。

美穂は地面に手をかざした。

そびえ立つ結晶の壁。

「忘れたの！？貴方の本当の力！」

結晶の壁に憎しみの炎がぶつかる。

「そんな力はどうに捨てたわ！」

ギシギシとなる結晶。

「どうして…？どうしてそんな悲しいこと言うの…？」

一瞬。

一瞬キサナが見えたような気がした。

「キサナ…」

ガツクリと膝をつくブイオ。

「私は貴方の生まれ変わりがもしれない、でもキサナさんの血も継いでるの。見て、私の髪：キサナさんと同じよ？」

美穂は長い髪を撫でて見せた。

血は確かに継いでいた。

ブイオには、幼い娘がいたのだから。

「笑った顔…キサナににてるな。」

ブイオは美穂を手招きした。

そしてギュッと抱き締めた。

「キサナ、キサナ、許しておくれ。私は残された娘の世話もせず、悪事を働き封印された。すまないことをしたと思うよ…。」

ブイオは泣き崩れた。

「王というとても重い責任を負い、誰にも弱音を吐かず。貴方は良く頑張りました。」

「だからもう、こんなこと止めませんか？もう貴方は、お休みしても良いんですよ。」

みるみるブイオの髪の色が薄くなり、淡い緑になった。

「…嬉しい。でも、もう…手遅れのようだ…！」

頭を押さえて、もがき苦しむブイオ。

力の暴走。

憎しみに走った力はもう誰にも止められない。

例えばそれが生まれ変わりの美穂だとしても…！

「ブイオ！」

「逃…げろ…！」

途端にブイオから波が押し寄せる！

美穂は波を背に駆け出した！

波が通った場所は結晶の床ができていた。

呑まれたら最後、美穂は結晶となる。

意識という名の、終わりなき空間を美穂はひたすら走った。

結晶の壁をでなんとかせき止めようとしたが、結晶も波に同化して波を大きくしてしまうようだった。

暗い空間をあてもなく走り続ける。
美穂の頭に朱雀の顔が浮かんだ。
また彼に頼ろうと、助けてもらおうとしている自分がある。
一番大嫌いな自分。

朱雀…！

助けてなんて思わない。

美穂はただ彼の名前を心の中で叫んだ。

バイオの攻撃が一層激しくなる中。

朱雀はなんとかバイオを、引きずり降ろそうとしていた。

青龍の準備は整っている、後はもう少し、もう少しだけ降りてくれるだけで良いのだ。

朱雀は一瞬剣を持つ手を少し緩めた。

「美穂…？」

彼女の声が聞こえた気がした。

そして、とてつもなく胸騒ぎがした。

時間がもうないのかもしれない。

美穂が危ないのかもしれない。

朱雀は再び剣を握り直した。

限界に近い体を奮い起こし、全ての力を手に集中させる。
そして透明な紐のようなものを、バイオに巻き付けた！
バイオは暴れたが、消えることはなかった。

空気を高速に回転させ、圧縮た紐。

そう簡単には消えない。

力を入れてブイオを引つ張るが、なかなか動かない。そうこうしているうちに、ブイオが攻撃を仕掛けてきた！

「落ちろー！！！」

朱雀は思い切り力を入れて、ブイオを落とした！

手のひらは空気の回転に巻き込まれ、肉が裂けた。

痛みなどもう感じなかった。

同時にブイオの仕掛けた攻撃も、朱雀に当たる。

左肩をやられた。

左腕は回復するまで動かせない。

ブイオを落とすのに、これくらいの傷は覚悟していた。

落ちるブイオ。

体制を立て直そうとするが、紐が巻き付いて立て直すことができない。

そんなブイオを確認し、青龍は放った。

「魂の龍よ、この手に宿れっ！！！」

青龍は右腕を勢い良く前に突き出す。

青龍の右腕をぐるぐる光が巻いたかと思うと、龍の姿をした光が一気に飛び出した！

ゴオオオ！

轟音と共にブイオに近づいていく、そして…

ブイオを呑み込んだ…！

言葉に表せないような奇声を上げるブイオ。

光がブイオを蝕んでいく…

誰もがそう思った

「!!!!」

次の時だった。

ブイオの炎にも似た力が、天に伸びて

朱雀の腹を貫いていた

血を吐いて、手についた血を朱雀は見つめる。

それを確認するまで、状況を把握できなかった。

目を見開き、そして下にいるブイオを見た。

ブイオは笑みを浮かべていた。

「なんで……」

腹から力が抜かれると、朱雀は落ちた。

「白虎！私は良いから、朱雀を玄武の所まで連れて行きなさい！」

「でも青龍が……」

「早くなさい!!!」

それを聞き、白虎は駆け出した。

青龍があんなに顔を真っ青にしたことがあっただろうか？

白虎はそれに驚き、走出したのだ。

青龍だけではブイオに勝てない。

なのに任せると言った青龍。

「青龍：死ぬなよ！」

白虎は拳をさらに握りしめた。

落下直前の朱雀を、白虎はギリギリで受け止める。

朱雀を担ぎ、また走り出した。

玄武の元に行くまで、そう時間はかからなかった。

「玄武！朱雀を、早く!!!」

玄武は朱雀見て息を飲んだ。

酷い有り様だった。
生きているのがまず不思議なくらいの傷だった。
玄武は分散させていた力を、朱雀に集中させた。
これにより、朱雀以外は傷が回復しない。
時間との戦いだった。

白虎は何かの気配を感じた。
意識を集中させると、禍々しい殺気があった…！

「玄武ー！！！」

白虎は玄武の前に飛び出した、そして
バンツという音と共に、白虎は倒れた！

「白虎！」

玄武は叫んだ。

白虎の胸には、穴があった。

撃たれたのだ…。

「いてえな…。俺は大丈夫だから…朱雀を！」
かすれた声。

血を吐く白虎はもう虫の息だった。

「このっ…！」

日向が詠唱を始め、アレンたちは剣を構えた。

「動くな。少しでも動いてみる、頭を撃ち抜く。」

そう言って、物陰から姿を現した。

歪んだ笑みを浮かべながら。

暴走する力（後書き）

最終決戦も終演間近。

しかしまだ困難が朱雀たちを襲います。

ブイオの力が暴走し、朱雀に致命傷を負わせてしまいました。
倒れていく仲間たち…。

朱雀たちは世界を守ることができるのだろうか…？

次回 終わるのは世界か、それとも戦いか
次も見てくださいね！

b y 黒穂。

終演

「なつ、お前は！」

怪しく微笑むその人物。

「あんたは……！」

日向が毛を逆立てる。

「よく覚えてられたな、狐の分際で」

そこに居たのはカオスだった……！

「何ですって！」

「動くな。」

日向に銃口を向ける。

悔しそう睨む日向を、カオスは嘲笑った。

魔術も詠唱するのに時間がかかる。

日向は手出しできない。

アレンとノアも剣が大きく大振りなため、下手に飛び込んで行けなかった。

アレンは黒鬼と目を合わせ、黒鬼は頷いた。

アスカもそれを見て構える。

トンツとつま先を地面に一度つけると、黒鬼は消える。

次に姿を現したのは、カオスの背後だった！

「はあああ……！」

黒鬼がカオスの後頭部を蹴ろうとしたが、カオスは銃でそれを受け止める。

振り返ると同時にカオスは、黒鬼のもう一方の足を払った！

「くっ……！」

黒鬼は押し倒されて、銃口を頭に押し付けられる。

「待ちなさいっ！」

アスカが殴りかかり、カオスが飛び退いた。

「今だ！」

アレンの号令で一斉に飛び出す日向たち。

シュルツ

音がすると共に、アレンたちは足をとられた。

「何だこれは！」

「私にも能力があることをお忘れなく。」

笑うカオスの背後からは、炎のように揺らめくものがあった。

ブイオが朱雀の腹に穴をあけた力にそっくりだった！

「なるほどな、お前はあのジェドルドの息子。能力も同じか！」

ノアは叫んだ。

ブイオはジェドルドを取り込んだことで、カオスと同じ力を手に入れたのだ。

「さて、誰から殺ろうか？」

アレンの足に巻き付いていた力が、針のように鋭く変形した！

「アレン君！」

バンツ

アレンの方を見たアスカに、衝撃が走った。

「あ、ああ……。」

「アスカさん！！！」

倒れ込むアスカ。

動く気配はなかった。

「このっ！！！」

黒鬼がカオスに飛びかかった。

素早く動き、アレンの攻撃を避ける。

「足、痛いんだろ？」

黒鬼が気がついた時、耳元で声がした。
次に銃声が響き、古傷のある足を撃たれた。
黒鬼は倒れ込み、撃たれた足を抱える。
激しい痛みに襲われ、汗が溢れる。
カオスは黒鬼をわざと見逃し、アレンたちに向き合った。
傷めつけてから殺すつもりらしい。

次にカオスが目を付けたのは、朱雀を治療する玄武。

「その男を治すの、止めてくれないか？」

玄武の方にカオスの力が伸びていく…！

アレンは剣に魔力を集中させ、足に巻き付く力を引きちぎった！
玄武の前で剣を構え、アレンは力を受け止める。

剣はアレンの魔力とカオス力に耐えきれず、真っ二つに折れた…

力の刃がアレンの腹を貫通する。

血を吐きながら、荒く息をしている。

急所は避けられているようだ。

「次はお前だ。」

「…！！」

日向の足に巻き付いていた力が、足に刺さる。

「うっ…！！」

倒れたら、串刺しになってしまう。

日向は必死に耐えた。

「しぶとい狐め。」

銃を日向に向けて、引金を引いた…！！

「日向ああ…！！」

パンツという音と共に日向に突進した。

その人物は日向を庇いながら倒れる。

「き、季色…！！」

銃弾は季色の肩をかすったようで血が流れていた。

「よお、日向！置いて行くななんて酷いぞ！」

頬を膨らませ、すねた表情をする季色。

そんな季色の足に、カオスの力が貫通していた。

「あんた、私を庇って…！」

「別にどおってことねえよ。お前が無事で良かった。」

そう言っただけ笑った季色の顔が、一瞬にして強張った。

「そこまでだ。」

季色の後頭部に押し付けられた銃口。

「日向、逃げる…！」

「嫌！季色…！」

カオスが引金を引こうとした時だった。

「…！」

後ろからカオスは頭を殴られ、そして倒れた。

「間に合ったか…。」

汗を拭う勇哉。

「遅いよ…！」

日向は泣きながら、べーと舌をだした。

「うるせえ、こっちだってこいつに殺られかけたんだ…。」

勇哉の足には貫通した傷口があった。

「玄武…。」

意識を取り戻した朱雀。

「俺はもう十分だ…皆を治療してくれ。」

「だが、まだ…。」

朱雀は聞き終わる前に立ち上がり、また飛び上がった。

生きているのが不思議な怪我を負った朱雀が、話せるまでには回復した。

しかしまだ危険な状態には変わりなかった。
玄武は再び能力の範囲を広げ、上空にいる朱雀を見つめた。

空に上がると、バイオは笑っていた。

もう目は赤くなり、人としての意思もなくなっていた。

下を見ると、青龍がバイオにの攻撃を受け、倒れ込んでいた。

「青龍、よく頑張ったな…。」

朱雀は霞む目を擦り、バイオに視線を戻した。

「バイオ、終わりにしよう…。」

そう言っつて朱い光を身にまとった朱雀は、バイオに突進する。
ぶつかり合う朱雀とバイオ。

朱雀はバイオの体を掴み、自分の力をバイオに流し込む。
もがき苦しむバイオ。

バイオの力に追われていた美穂の前に光が射した。

「朱雀…！」

美穂はその光に触った瞬間、朱雀と美穂の力が重なり合った。

バイオの姿が、美穂の姿へと変わり始めた。

そしてバイオは緑色の光になって、美穂の中から出ていった。

「お帰り、美穂…。」

気絶している美穂を受け止める。

腕は痙攣して震えていた。

体力はもう既に、限界を越えている。

朱雀は意識が遠くなったり、そして落ちた…。

自分が落ちているのかも、朱雀には分からなかった。
ふと目に入ったのは、世界を分けるあの壁。

「最後に君にあげる……」

朱雀は落ちながら、壁の方に手を出した。
最後の力を使つて、朱雀は願った。

「壁に縛られることのない自由を……」

朱雀から溢れ出た力が、壁を打ち消していく…。

そして朱雀はゆっくりと目を閉じた。

美穂が目を覚ましたのは草むらだった。

「お目覚ですか？」

青龍が腕を押さえて、隣に座っていた。

「私は…どうして…？」

「この力が、貴女をここまで運んできた。」

緑色の光。

「ブイオ…ありがとう。」

そう言つと、光は空高く上がった。

雲はなくなり、世界に陽の光が戻った。

「朱雀は…？」

「…あそこ。」

青龍は指差した方へ美穂は走った。

怪我をしたアレンたちが、朱雀を暗い顔で見ている。

「どう…したの…？」

「あつ、美穂…。」

日向は目を伏せた。

アレンやノア、アスカと勇哉までが押し黙っている。

「私が説明しよう。」

玄武が前に出た。

「命だけは助かった、しかし…意識は戻らないかもしれない。」

「どうして…。」

美穂は朱雀に抱きついた。

「君の為に、壁を最後の力を使って消した。…生きてるのが不思議なくらいだ…。」

「朱雀…起きてよ、私思い出したんだよ…？」

「いつもみたいに大丈夫って笑ってよ…、朱雀ー！！」

揺さぶっても、呼びかけても朱雀は目を覚まさなかった。

美穂は涙を流し続けた。

彼の名を呼びながら…

終演（後書き）

次回で最終話にしたいと思います。

番外編のリクエストがありましたら最終話更新前にご連絡ください。
なければ次回最終になります。

では次回も、よろしく願います！

b y 黒穂

涙の色

ザワザワと外から人々の声が聞こえる。

真っ白なドレスに身につけた美穂は、剣を受け取った。

カオスは美穂に剣を渡すと、頭を下げた。

「頭を上げて、カオス。」

美穂は困った顔をして、カオスの肩をトンと叩いた。

「しかし…こうなったのも、私のせい…」

「良いの、誰のせいでもないのよ。貴方だって、お父様を亡くされた。」

そう言つて城の外に出ようとする美穂に、慌ててカオスは言った。

「だったら何も貴女が謝罪しなくても！」

「私がしなくてはいけないのよ」

美穂は微笑んだ。

そして、城の外へ歩き出した。

城の扉が開くと同時に、人々の声が一層大きくなった。

美穂は用意された台の上に立ち、人々を見回す。

「貴女のせいで戦争が始まったのよ！」

「あなたには、わからんだろうな！手駒になつて死んでいく者たちの気持ちだ！」

「私たちはこの三年間、地獄を見たんだよ！」

口々に人々は叫んだ。

朱雀とブイオの戦いの後、すぐに平穩が訪れたわけではなかった。

ブイオを見たヒューマ族が、魔者たちの兵器だと騒ぎ立てたために戦争になってしまったのだ。

その戦争を止め、人々が元の生活をできるようになるまでに三年の月日が経っていた。

「本当に申し訳ありませんでした…。」

美穂は頭を下げた。

「でも私は、戦争を望んだわけではありません。」
嘘をつけと、人々は罵声を浴びせた。

「あんたも、その仲間も、死ねばいいんだ！」

「わかってます…！」

途端。

人々は叫ぶのを止め、美穂を見つめた。

「皆様が辛い思いをしたのはわかってます。私の命で償えるならこの場で死にましょう。」

美穂はカオスから受け取った剣を抜いてみせた。

「でも、どうか…仲間たちにそんなこと言わないで…。」

首元に刃を突き立てた美穂の目から、一筋涙が溢れた。

「もつと良いやり方があったかもしれない、私たちは間違ったかもしれない。でも、仲間たちは皆様の為に命をかけたんです、戦ったんです。」

「それだけは、知っておいてください。」

美穂は剣を握りしめ、刃に力を加えた…

その時、美穂の手を男の人が掴んだ。

「そんなこと、しなくていい。」

男の人は笑った。

「でも私は……」

「いいよ、皆もそう思ってる。」

美穂は人々を見た。

さっきまで怒りに満ち溢れていた人々の顔が、今は穏やかになっていた。

「貴女たちだけのせいではない、僕ら人間の弱さから戦争は起こったんです。」

「だから、貴女に罪はないんですよ。」

拍手が起こり、美穂は座り込んだ。

許してくれたわけではない。

でも、認めてくれたのだ。

「ありがとう……」

美穂はうずくまり、呟いた。

「お疲れ様でした。」

カオスがまた頭を下げた。

「あのね、婚約のことなんだけど……。」

「わかってます、貴女にふさわしい男は私ではない。」

カオスは美穂の手をとった。

「それに、待つのでしょ。何年かかっても、貴女はあの男を。」

今も意識のない朱雀のことだ。

「はい、待ちます。」

美穂はまっすぐカオスを見た。

決して揺るがない瞳は、決意を表していた。

カオスは胸が痛んだ。

二人を引き裂いた原因は自分と、その父ジェドルドにあるのだから。「では、私はこれで。」

美穂はお辞儀をすると、その場から立ち去った。

「早く起きろよあの馬鹿……。」

カオスは今まで散々婚約の邪魔をした朱雀の顔を思い出し顔をしかめた。

廊下を歩きながら、美穂はぼんやり考えていた。

仲間たちはそれぞれの道を歩み出している。

黒鬼とアレンは一緒にギルドをすることになった。

黒鬼は仕事の合間に来てくれる。

アスカは魔術船のパイロットととして、国に使えている。

仕事柄、美穂と会うことが多い。

ノアは騎士団長になったし、勇哉は前と変わらず財閥の仕事をしている。

ノアはほぼ毎日会っていて、勇哉からは手紙が届く。

日向は朱雀の家に居候していて、朱雀と一緒に居てくれる。

四神たちはひっそりと暮らしていくみたいだ。

朱雀は……、まだ意識を取り戻さない。

皆それぞれ歩み初めているのに、美穂の時間はあの時から止まったままだ。

朱雀は生きている。

眠っている、だからいつでも会える。

でも、三年間会っていない。

見るのが辛いのだ。

現実を受け止めることのできない。

あの時から、美穂の心の時間は止まってしまったのだ。

「会いたいよ」

美穂は無意識に呟いていた。

「皇女殿下様ー！！」

使用人たちが一斉に駆け寄って来た。

「美穂でいいのよ、それでどうしたの？」

「こつ：いえ、美穂様！大変です、城の門の前に！！」

「幽霊じゃないですよね！？」

「でもちゃんと足あつたよ？」

口々に使用人たちが話し出す。

「え？え？誰の話？」

「朱雀ですよ！」

使用人たちが声を揃えて言った。

「朱雀：つて？」

「はい。こつ：いえ、美穂様に会わせると言つて…：つて美穂様！？」
美穂は最後まで聞かずに駆け出していた。

これは夢ではないだろうか？

止まっていた時間が動き出した気がした。

門を開けるとそこには一人の男。

癖ではねた紺青の髪、真つ黒な瞳。

間違いなかった

「朱雀！」

美穂は朱雀に抱きついた。

「いてて…」

思った以上に力が強く、朱雀は美穂をなだめようと頭を撫でた。美穂は泣いたまま顔を上げようとしない。

「迎えに来たよ、お姫様。」

赤くなつた顔を上げる美穂。

「四神の力、使えなくなつたんだ。」

朱雀は話し始めた。

ブイオとの戦いで、失つたものを。

「うん。」

「何の能力もない普通の人間になつた。」

美穂はただ頷いていた。

朱雀の不安が伝わってきたからだ。

「こんな俺でもいいかな…？」

「うん、だって…私は貴方が好きなの。」

美穂はまた朱雀に抱きついた。

強くきつく、その存在を確かめるように。

「ずっと傍にいてね」

そう言った美穂に、朱雀はそつと口付けた
…

私たちの旅は間違いだらけだったかもしれない。

世界を救った。

それもただの偽善に過ぎないかもしれない。

でもこの旅は決して無駄な旅ではなかった。

たくさん人の涙を見てきて、涙の色が人それぞれにあるように人の思いが異なることを知れたから。

忘れないでほしい。

この旅を。

仲間たちのことを。

私の大好きな人のことを。

END

涙の色（後書き）

最終話、ということでは…

ありがとうございます！

最後まで書けたのも、見てくれる皆様のおかげです。

処女作のため、凄くダメダメな作品だったと思います。

こんな作品を見てくださり、本当にありがとうございます…！

これからも小説活動をしていきたいと思えます。

次回作は5月中に公開したいと思ってますので、良ければ見てやってください。

それではまたお会いしましょう。

b y 黒穂

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8883g/>

涙の色

2010年12月9日03時53分発行